

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌「リクシル・アイ」

no. 5

June 2014

特集

- | | | |
|---|------------|------------------------|
| 1 | 新・生き続ける建築 | 辰野金吾 |
| 2 | 建築ソリューション | 秩父セメント第二工場 |
| 3 | まちづくりの今を見る | 賑わい空間を創出する「うめきた」のまちづくり |



風景をデザインする 海外編

場の力による風景の創造

中国・青島市

大規模な建設ラッシュが続く中国では、さまざまな事業を組み合わせた複合的な住宅開発が試みられている。青島小鎮は青島市郊外の丘陵地250haの住宅地開発で、低層の別荘型住宅と共に商業施設やホテル、展望台、自然公園、サイクリング道路、山の遊歩道などの施設・環境整備を行っている。同時に、現地で栽培・生産するお茶や蜂蜜の販売により、事業全体を観光的視点からブランド化する試みも見られる。今回その入り口部にビジターセンターが先行整備されることとなり、私たちがそのランドスケープの計画・設計を行った。

最初に訪れた計画地は一見荒涼としながら、さまざまな豊かさであふれていた。丘陵は花崗岩の岩山で、点在する昔の採石場がその地質の一端をのぞかせていた。薄い表土には小さなマツが生え、自生するグラス類がマツを追って斜面を駆け上がる姿が美しかった。緩やかな斜面は小さな農地として利用され、テラス状の畑地がおおらかな水平線をつくった。普段は水のない谷筋にはその窪地に沿って高木が茂り、地中の水分のありようを示していた。

こうした風景を手掛かりに、新たに茶畑やグラスガーデン、水盤などによって風景の再構築を行っている。将来の開発イメージを先取りして実現することがテーマであったが、この場が持つ力の豊かさを少しでも表現できたとすれば、とても幸せである。

吉田 謙一

Kenichi Yoshida

プロジェクト概要

名称：青島小鎮

所在地：中華人民共和国山東省青島市

主要用途：ビジターセンター

発注者：青島万科

設計：ランドスケープ；株式会社ランドスケープデザイン、建築：Bohlin Cywinski

Jackson（アメリカ）；同済大学建築設計研究

院（中国）

敷地面積：10.5ha

工期：2012.3-10

よした けんいち——株式会社ランドスケープデザイングループリーダー／1964年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学大学院修了。鹿島建設入社。ペンシルバニア大学大学院修了。1999年、株式会社ランドスケープデザイン。

主な作品：虎ノ門タワーズ[2006]、グランドミッドタワーズ大宮[2011]、AKASAKA K-TOWER [2012]、瀋陽柏翠園[2010-]、長春柏翠園[2012-]、瀋陽春河里[2013-]など。



ビジターセンター前に広がるグラスガーデン [写真：Jianwei Sun]

CONTENTS

表紙写真：
秩父セメント第二工場
[撮影：フォワードストローク]

次号[LIXIL eye]no.6は、
2014年10月発行予定です。

[LIXIL eye]はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 [風景をデザインする 海外編]
場の力による風景の創造 —— 吉田謙一

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 5**
辰野金吾

04 [本論]辰野式の秘密 —— 藤森照信

08 [作品]奈良ホテル
旧松本家住宅
東京駅丸ノ内本屋

14 [年譜]略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション — 5**
秩父セメント第二工場

22 [序論]「端正で気品ある」工場建築 —— 秩父セメント第二工場 —— 藤岡洋保

24 [鼎談]新時代に挑戦した先駆者
生産重視の時代に“美しい健康な生活の場”を実現した
秩父セメント第二工場。 —— 谷口吉生 | 松隈 洋 | 古谷誠章

37 [鼎談後記]工場建築をただの生産工場に終わらせない —— 古谷誠章

38 [ARTIST at HOME] — 5
リュート奏者・つのだたかしさんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 5**
賑わい空間を創出する「うめきた」のまちづくり

44 [序論]北梅田から大梅田へ —— 「うめきた」の将来構想 —— 橋爪紳也

48 [本論]大阪の新しいまち「グランフロント大阪」 —— 都心におけるエリアマネジメント —— 廣野研一

54 [各論]成長・発展し続けるJR大阪駅周辺地域 —— 上溝憲郎

57 [コラム]日本初のBID制度創設への試み —— 辰巳康夫

58 [素材を語る]
非物質の象徴“アルミニウム”を物質として再考する —— 中村拓志

60 [TOPICS]
グリーン・イレシステムプロジェクト —— 今井茂雄

64 [INFORMATION]
建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL 出版 新刊案内

68 [新・建築家の往復書簡] — 5
最近、アーメダバードとチャンディガールに行ってきました。 —— 妹島和世 | 隈 研吾

LIXIL eye no.5
2014年6月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：安岡淳也
日本マーケティング統括部
LIXIL eye 編集室
〒100-6011
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング11階
Tel: 03-6273-3628
Fax: 03-6273-3539
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきました

辰野金吾

Kingo Tatsuno

1854年、佐賀県に生まれた辰野金吾は、1873年、工部大学校に入学し、第1回生となる。1879年、首席で卒業後、英国に留学し、ロンドン大学で建築を学びながら、ジョサイア・コンドルの師であり、建築家・デザイナーとして活躍したウィリアム・パージェスの事務所で実務を体得した。その後、フランスやイタリアを視察し、1883年、帰国。翌年、コンドルの退官に伴って、工部大学校教授に就任し、工科大学教授、工科大学長となる。そして1902年の退職まで約20年にわたって建築教育にあたり、優秀な後進を数多く育てた。

その一方で建築家としても活動し、東京に葛西萬司と辰野葛西事務所、大阪に片岡安と辰野片岡事務所を設立して設計の態勢を整え、時代のニーズに応じた幅広い作品を世に送り、近代日本の黎明期を築いた。さらに、日本建築学会会長など、公職も歴任し、明治建築界のボスとして君臨した。1919年、この年に大流行したスペイン風邪に罹り逝去。65歳だった。

生涯にかかわった建築作品は200を超えたとも言われる。今号は、2012年に復原された“辰野式”の真骨頂としても名高い「東京駅丸の内駅舎」を中心に、様式を問わずオールマイティにこなす万能の建築家だった辰野の作風を読み解いていく。



【出典：『日本の建築[明治大正昭和]3 国家のデザイン』】



日本銀行本店[1896]
辰野の代表作であるばかりか、日本人建築家の自立を示すシンボルとなった。なぜなら日銀以前、主な国の建物は師のコンドルはじめエンデとベックマンなど、御備外国人建築家の手に託されていたからだ。平面と全体構成にはベルギー中央銀行の、造形にはソーン設計のイングランド銀行の影響が見られる。この成功により、辰野は明治を代表する建築家への道を歩み始める【重要文化財】
【出典：『日本の建築[明治大正昭和]3 国家のデザイン』藤森照信著[三省堂/1979]】

ラスの超高層ビルに建て替えられていたらどうだろう。そのようなビルが出来ても誰もわざわざ見に行かないばかりか、東京の都市イメージのヘソが喪われていたに違いない。

皇居の緑と赤煉瓦の東京駅を繋ぐ幅50mの行幸道路——この三位一体の景観によって、21世紀の東京は新しいヘソを得ることができた。

そう思ってから周囲の超高層ビル群を見まわすと、ビルというビルの窓という窓がパチパチと万雷の拍手をもって迎えているように思えた。“戦後モダニズム敗れたり”とちよつとだけ思ったが、それ以上考えないようにした。

改めて復原・再生なった東京駅を眺めると、デザインはやはり破綻していると言わざるを得ない。このことを示唆してくれたのは建築史家の故・稲垣栄三先生で、新年会のおり、二人で話して東京駅に及ぶと、「駅の前を歩いてみたら、一つの建築というより、街並みみたいに感じた」と言った。

一つの建築としてまとめ切れておらず、赤煉瓦の似た建物が軒を連ねているようだ、と言うのである。確かにその通りで、壁面も屋根も、各部のデザインがゴロゴロと自己主張に忙しく、全体を統御する骨格の意識が欠けている。東京駅だけでなく、辰野のすべての作品に共通する性格と言わなければならない。

なぜこんなことになったのか。まず考えたのは、日本の伝統的な木造建築とヨーロッパの石や煉瓦の建築の違いについて。日本の木造建築は、細長い柱と梁を組み立てて枠を作ることからすべてが始まり、その結果、構造的な枠がそのまま造形上の秩序を生むから、各部造形を意識的にコントロールしなくても全体の統一感は一損なわれない。その結果、日本の木造建築の中で育つと、どうしても意識的に各部造形をコントロールして全体に筋を通す力が弱くなる。別の言い方をすれば骨格の感覚が弱くなりやすい。

一方、ヨーロッパの石と煉瓦の建築は、壁や柱といった構造体が各部造形を自ずとコントロールするわけではない。バラバラに作られる各部造形を積み重ねながら、意識的コントロールによって全体性を確保しなければならない。こうした組積造の中で育った建築家は、まず部分と全体の関係をコントロールすることを学ぶ。

日本の木造の中で生まれ育った辰野は、大学に入ってからヨーロッパ建築を学習しても、ついに彼の地の建築造形原理を修得できず、各部がバラバラになってしまったのではないか。そうまず考えたが、しかし、同世代の建築家の作品に当たると、例えば妻木頼黄の東京商工会議所などは、辰野同様の賑やかな各部造形がちゃんとコントロールされ、一つの全体像に納まっている。ということは、東京駅のバラバラ感は辰野に固有の特性と判断せざるを得ない。

辰野の作品の中でも東京駅のバラバラ感は図抜けているが、そうなった理由はひとえに屋根にある。長大な建物に、大きさも形も違う屋根をいくつも並べれば、名人上手といえどもコントロールは難しい。

それにしても辰野はなぜ、屋根をそんなに賑やかにしたんだろう。

東京駅に代表される赤煉瓦と白い石の混合によるスタイルは、英国のヴィクトリア朝後期に固有で、クィーンアン様式と呼ばれ、ノーマン・ショーが編み出している。辰野が明治13年[1880]、イギリスに留学した時、まさにロンドンを風靡していたスタイルだが、しかし辰野青年は“将来の日本にふさわしい”と述べるに留まり、帰国後は専らヴィクトリア朝より一時代前のジョージア朝スタイルを専らとし、日本銀行本店を作っている。

イギリスの時代と建築様式の歩みを見ると、ジョージア朝の産業革命時代は硬い古典系様式、そして産業革命の成果を享受した次のヴィクトリア朝の時代は、派手で賑やかなゴシック系様式(クィーンアンはゴシック系様式が再び古典化する途上の折衷様式)と変わっていくが、おそらく新興国日本からの留学生の目には、派手で賑やかなヴィクトリア朝スタイルは日本には向かず、まずは産業革命期の古典系と判断したに違いない。

戦後のモダニズムのせいで、辰野のような歴史様式主義者は、適当にヨーロッパの歴史様式を持ち込んで切り貼りしていた、となんとなく思いやすいが、そんなことはなく、欧米諸国の最新動向を睨みつつ、どの国のどの様式を選ぶかについては大真面目に考えていた。現在の世界をリードする日本の建築界の大元を創った人たちのことを軽く見てはいけぬ。この点は、忘

2012年、赤煉瓦の東京駅が、東京大空襲で半壊して以来68年ぶりに竣工当初の姿を現した時、嬉しかった。私の短からぬ建築界暮らしを振り返っても、あれほど見物人が多かった建築はなく、代々木のオリンピックプールも東京都庁舎も人の数では抜いていた。

嬉しい一方、複雑だった。建築史の研究を始めた大学院生の頃、東京駅の周囲には、今こう思い返しても、丸ビル、工業倶楽部、昔のままの中央郵便局、郵船ビルといった戦前の名建築が文字通り軒を連ねていたが、すべて取り壊され、鉄とガラスの超高層ビルに建て替えられてしまった。肩を並べる仲間もなく忽然と立つ明治の、正確には大正3年[1914]完成の赤煉瓦建築。

大男が股を割ってグッと腰を落としたような東京駅の姿について、その昔、“横綱の土俵入り”と評したことがある。皇居に向かっての土俵入り。設計者の辰野金吾の相撲好きを踏まえてのたとえて、彼が赤坂の自宅の庭の土俵で息子の隆(フランス文学者)と保を従えて本当に土俵入りしたのは日本銀行本店に向かったが、東京駅は辰野になりかわってそうしている。横長の赤煉瓦の壁の上に載る二つの大ドームと一つの寄棟屋根は、さしずめ横綱の頭の大銀杏。

復原・再生を心底嬉しく思ったのは、周囲に目をやった時だった。鉄とガラスの、ガラスと鉄の超高層ビルが目届く限り林立しているが、もし、保存運動がうまく行かず、取り壊され、鉄とガ

*特記のない写真は、フォワードストローク



日本生命保険会社九州支店 [1909]
 齢五十にして工科大学長という頭職を辞し、若き日のように従一民間建築家となりおおせた辰野が選んだ様式がこれだった。そして、亡くなるまで貫き、全国各地そして朝鮮や台湾にも建てている。技術は赤煉瓦と石の混合にあり、各部の造形はゴシックとクラシックの折衷。ヴィクトリアン朝を飾るヴィクトリアン・ゴシックがしだいにクラシック化する途上に生まれたショーのクィーンアン様式をベースにするが、屋根の強調など辰野ならではの解釈もあり、よって「辰野式」と呼ぶ【重要文化財】
 [出典：『日本の建築 [明治大正昭和] 3 国家のデザイン』]



銀行集会所 [1886]
 辰野の処女作である。生涯辰野を経済人としてバックアップする渋沢栄一の依頼で作られた。用途は渋沢をリーダーとする銀行界の人々のクラブ。様式はバラディオに習っている。面白いのはパティメントの中の図像で風凰が刻まれた。辰野は、イギリス留学の帰路、イタリアを回る“グランド・ツアー”を試み、そのおりに見聞したバラディオ作品が念頭にあったと思われる。バラディオの影響はイギリスで大きく、そのこともあり処女作をバラディオアニズムで飾ったにちがいない[出典：『日本の建築 [明治大正昭和] 3 国家のデザイン』]

れないでいただきたい。

辰野がクィーンアンを試みるのは、明治36年[1903]以後だが、この年が日露戦争の勝利の年であることは重要で、おそらく、日本もロシアに勝ち、そろそろ華やかなヴィクトリア朝のスタイルをやってもいいだろう、と考えたのではないか。 齢五十を迎え、大学を離れて設計事務所を開いた辰野は、そう考えてヴィクトリア朝後期のクィーンアンを初めて採用するが、しかし、ショーとは明らかに一部を変えて採用している。

屋根を変えた。

ショーは、拡大するロンドン郊外に新しい街並みを作ることを目的にクィーンアンを編み出したから、ストリートのファサードをどう構成するかを重視し、交差点の角地に塔など付けて強調することを嫌がった。塔やドームなどの記念碑的造形は、むしろストリートの造形を損ねるだけ。記念碑性好きのそれまでの建築家からは考えられないショーのこうしたストリート志向は、ヴィクトリア朝後期の建築家の都市的感覚が熟成した証といえよう。

一方、辰野はどうか。ショーとは立地からして正反対で、街の角地を選び、たとえ小さな建物しか許されなくとも、例えば日本生命保険会社九州支店のようにさまざまな形のドームや塔を屋根いっぱい軍艦巻きのごとく盛り付けた。

ショーから見れば街並みへの犯罪のごときデザインを辰野はなぜしたのか。

確信犯だった。辰野のクィーンアンは銀行や会社が主な施主で、それらは昔ながらの薨の波の只中に、近代化の象徴として、街並みを破るようにスックと立ち上がることを施主も辰野も熱望していた。ショーがロンドンでそうしたように、江戸から続く昔の街並みと調和しては、銀行も会社も存在する意味がなくなる。

辰野の建築は伝統の街並みを破り、新しい力のシンボルとなるべく、王冠のごとき屋根を戴かねばならなかった。辰野のクィーンアンが当初よりショーと区別して“辰野式”と呼ばれたのはこうした事情による。

辰野式でまとめられた東京駅第一案は、平屋を基本とする扁平極まりない姿をしていたが、しかし、日露戦争の勝利を記念する一大イベントが東京駅を軸に行われることが決まり、予算が追加され、今の規模になった。辰野は万歳したいくらいに喜んだに違いない。

辰野は三回、一人で万歳をしている。一回目は、日露戦争の勝利を聞いて。二回目は、東京駅の設計者に決まった時、丸の内の路上を事務所に向かって走りながら。最後は、自宅で息を引き取る直前。

幕末、下級武士の子として生まれ、明治期、日本に一つの新しい領分を築き上げた建築家は、後の建築家と違い、自分と国家がズレなく重なっていたのである。

辰野の建築というどうしても日本銀行本店や東京駅のように国の記念碑になってしまうが、明治19年[1886]の銀行集会所に始まり大正8年[1919]のスペイン風邪による死に至る長い作品歴を辿ると、一見辰野らしからぬ作品が見つかる。そのうち二つを最後に紹介しよう。

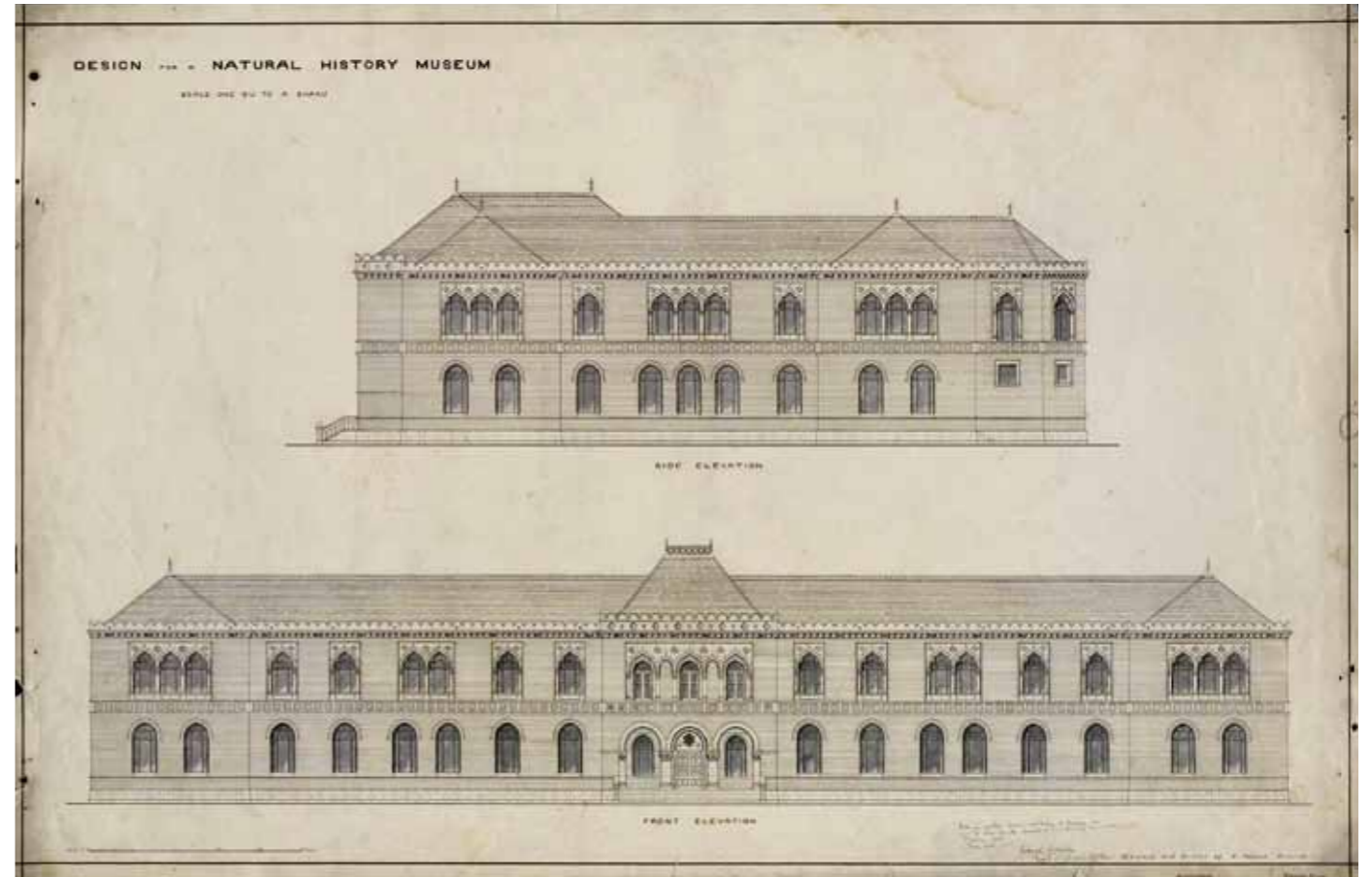
一つは、明治42年[1909]の奈良ホテル。辰野には珍しく外観を和風になっているのは、奈良公園の中だからである。

辰野の同級生の片山東熊が、明治27年[1894]、フランスのネオ・バロックで奈良皇室博物館を作り、これが地元の猛反発を買い、以後、奈良公園内は伝統を加味することが奈良県議会で決められた。日本最初の歴史的環境保護条例である。

奈良ホテルは、昨今の高級ホテルと比べると機能上は決していいとは言えないが、しかしいかにも奈良らしいホテルとして多くのファンに支持され、シーズン中は予約が取りにくい。奈良ホテルに泊まり、歴史的な食堂で上品で豊かな朝食をとり、奈良公園を通過して古寺大寺を訪れるのは、奈良ならではの楽しみ。もし、予約できるなら“正倉院展”と“お水取り”と“若宮御祭”の時に泊まってほしい。

もう一つは、明治44年[1911]、戸畑に完成した松本健次郎邸(現・西日本工業倶楽部)。

辰野の国家的記念碑のイメージとは大きくずれるが、日本最高最大のアールヌーヴォー建築として知られる。外観はイギリスのチューダースタイルをアールヌーヴォーの感覚で洗った表現に留まっているが、インテリアはアールヌーヴォーが大爆発。



辰野とは別に事務所のスタッフが勝手にやったわけではなく、この頃、辰野はいくつかこの系統のデザインを試し、例えば東京駅の皇室玄関の鉄扉もその一つ。辰野にとって、ヴィクトリアン・ゴシックも、クィーンアンも、アールヌーヴォーも、ヨーロッパの同じ建築の流れに見えていたのだろう。19世紀末のアールヌーヴォーを口火として、辰野が慣れ親しんだヨーロッパ歴史主義様式が終焉しようとは思ってもよらなかったに違いない。

人柄について述べておこう。工部大学校の学生時代は、地味で堅実で人並み優れた努力家として知られ、あだ名は“辰野堅固”。全学の補欠で入り、造家学科を首席で出ることができたのは、その人柄のおかげ。

もう一つ加えるなら、公私の別を峻別した。例えば、国会議事堂の設計を巡って大蔵省(当時、官庁建築はここが担当)の妻木と日本建築学会会長の辰野が政治家やジャーナリズムを巻き込んで戦っている時も、辰野家と妻木家の親しさは変わらず、正月には両家を行き来して楽しんでたという。

また、自分の弟子への師としての立場は守り続け、後藤慶二や遠藤新などの大正世代の若者が辰野批判をしても、そのことは気にかけず、むしろそうした連中を有望視した。ただし、遊郭に居続けて授業に出て来る下田菊太郎と渡辺節については、化粧臭さを落としてから来い、と叱り、個人的にも嫌ったと伝えられる。

卒業設計図面
「NATURAL HISTORY MUSEUM」 [1879]
 歴史博物館をテーマにし、様式は師のコンドルの影響が同級生の中で最も強く、ヴェネチアン・ゴシックによる。初期のコンドルは、東京の水辺に立ついくつかの作品でヴェネチアン・ゴシックを試みていた。もちろん水辺を意識したこともあるが、それ以上に、ヴェネチアはかつて東方貿易の拠点であり、洋の東西の結合を志す初期コンドルの思想に合っていた[所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

ふじもり・てるのぶ——建築史家・建築家／1946年生まれ。東北大学・東京大学大学院修了後、東京大学生産技術研究所教授、工学院大学教授。現在、東京大学名誉教授。専門は日本近代建築史研究。
 主な著書：『建築探偵の冒険 東京篇』[筑摩書房／1986]、『日本の近代建築 上・下』[岩波書店(岩波新書)／1993]、『丹下健三』[共著、新建築社／2002]など。

奈良ホテル

竣工年：1909年
所在地：奈良県奈良市高畑町1096
構造・規模：木造2階建て



1



2

3

4

5

1 正面外観
木造の伝統と洋風の間をどう取り結んで歴史的環境に調和させるかの難問は、辰野の愛弟子の長野宇平治が奈良県庁で最初の解答を出した。それは「チューダー様式で壁体を作り、上に伝統の瓦屋根を、軒を浅くして載せる」という方法で、このホテルもそれに習っている

2 棟飾り
唐招提寺や東大寺に見られるシビに習っている。何はともあれ日本瓦を載せただけで、奈良におい

ては伝統との調和の第一歩を確保することができる

3 階段の擬宝珠と照明
階段室はヨーロッパの建築の最大の見せ場でもあり、ここをどう伝統と調和させるのかのテーマに対し、全体はバロックの構成とし、そこに擬宝珠の付いた「京の五条の橋」のごとき作り投入した

4 メインダイニングルーム「三笠」
書院造をベースとして壁面と天井を仕上げ、書院造なら床の間の位置に、暖炉を据えている

5 デラックスツイン Aタイプ
和洋折衷の室内にどんな家具調度を置いても大きなテーマだった。さいわい、天井のランプのような折衷デザインはコンドル以来試みられ、そのように従っている

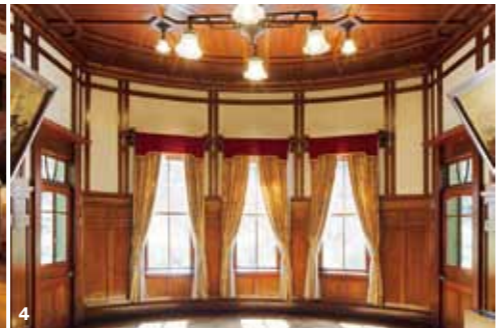
6 フロント
柱の上部をどうまとめるかも大きなテーマで、ここでは神社の「舟助木(ふなひじき)」を使っている。しかし2階回廊を支える持ち送りは寺院の「大斗助木(だいとひじき)」



6

旧松本家住宅

竣工年：1911年
 所在地：福岡県北九州市戸畑区一枝1-4-33
 構造・規模：木造2階建て
 【重要文化財】



1 ダイニングルームの飾り棚
 これを辰野がどれだけアールヌーヴォーを意識してやっていたか不安もあったが、松本健次郎の息子によると、オープンの日、中を見て驚く客に、父が「アールヌーヴォーっていう、うるさいもんだぞうだ」と答えていたという。イギリス系のアールヌーヴォーである

2 正面外観
 右手には大きな和館があるが、母のためのものであり松本と家族は洋館に住んでいた。松本はペンシ

ルヴァニア大学で鉱山学を学び、洋式の生活が好きだったという。全体はイギリスの木造チューダー様式をベースに、アールヌーヴォー的崩しを入れている

3 階段室
 左手の踊場の壁にステンドグラスがはまっている

4 応接室
 柱も二本並べるなどなかなか上手い。アールヌーヴォーと日本の建築や美術工芸との深い関係について、当然のように日本の建築家たちは知っていた

5 階段室のステンドグラス
 ステンドグラスのデザインと製作は、アメリカより帰国したばかりの和田三造による。アメリカのティファニーなどによるオパールグラスを駆使したアールヌーヴォーのデザインに学んでいる

6 南面外観
 これだけ美しいアールヌーヴォー化した木造チューダー様式は、イギリスでも見たことがない



東京駅丸ノ内本屋

竣工年：1914年
所在地：東京都千代田区丸の内1-1-3
構造・規模：鉄骨煉瓦造2階建て、一部3階建て
【重要文化財】



- 1 南ドーム**
スレートの黒と銅の赤銅色のコントラストが美しい。力強く堂々とした材感の演出
- 2 南ドーム見上げ**
ドーム内の仕上げは、図面も失われ、彩色した写真図版もなく、復原に当たり最も苦労したところという。ドームの立ち上がり位置には大ワシが、壁には十二支が付くが、これは古写真による
- 3 東京ステーションギャラリー 階段室**
上階の美術館に上るための階段室は、赤煉瓦の昔の構造に新しい鉄筋コンクリート構造を組み込んでいる
【提供2・3：JR東日本】
- 4 正面外観**
竣工当時から、アムステルダム駅との関係が言われていたらしいが、初期案から最終案まで辿ると、全然関係ないことが分かる。一貫して辰野式である。ゴシックとクラシックが、赤煉瓦と白い石（一部人造石）が混じり合い、ルネサンス以降続いた長い長い歴史主義の最終舞台に立つ



略歴 Biography

嘉永7年[1854]	8月22日、姫松倉右衛門・おまつの次男として唐津城下裏坊主町に生まれる	明治15年[1882]	方、ロンドン大学に入学	7日、工学博士。8月6日、臨時建築局を辞任。8月18日、岡田時太郎を伴い、欧米の銀行建築調査に出發。米、英、仏、独、伊、ベルギーを巡回	
明治6年[1873]	新設の工部省工学寮第1回入学試験を受験し、10月9日、入寮	明治16年[1883]	3月、ロンドン大学建築課程および美術課程2等修了。同月、英国を発ち、フランスおよびイタリアを巡回遊学	明治22年[1889]	10月3日頃、帰国
明治8年[1875]	普通科(教養課程)2年修了後、専門科進学にあたり、それまでの造船志望(機械科に付設)を転じ、造家科に進む	明治17年[1884]	5月26日、帰国。6月21日、工部省准奏任御用掛に奉職。9月22日、工部省営繕課に勤務	明治24年[1891]	1月10日、次男・保が生まれる
明治12年[1879]	6月、卒業設計制作。テーマは、「NATURAL HISTORY MUSEUM」。9月、卒業論文提出。テーマは、「Thesis on the future domestic architecture in Japan (日本の将来の住宅建築について)」。11月8日、卒業。卒業生で工学会を結成、日本最初の工学専門学会となる。11月25日、留学申し付け。12月1日、留学にあたり急拠、西脇乾三郎の実妹・鳥羽秀子と結婚	明治19年[1886]	7月28日、工部省権少技長に昇任。10月17日、長女・須磨子が生まれる。12月20日、コンドルが満5年契約切れ解雇につき、工部大学校教授に就任	明治25年[1892]	3月2日、震災予防調査会委員
明治13年[1880]	2月8日、ロンドンへ向けて横浜を向出。3月23日、ロンドン着。ジョサイア・コンドルの従兄でロンドン大学教授トーマス・ロジャー・スミスの紹介により、キュービット建築会社で5ヵ月間の実習。9月、貿易商社マジソン商会の紹介により、建築家ウイリアム・パージェスの研修生となる。10月、パージェスの事務所に通う	明治20年[1887]	1月28日、工部省を辞官。2月、岡田時太郎と共に、辰野建築事務所を開設(京橋区山下町、経師屋松下勝五郎の2階)。4月9日、工学会より分化独立し、造家学会(現・日本建築学会)創設。当初会長を置かず、辰野が副会長となる。4月10日、工科大学教授。6月、鉄道局嘱託。12月、司法省嘱託	明治26年[1893]	旧副島種臣邸を購入し、転居する(赤坂新坂町14)
		明治21年[1888]	4月、京橋区加賀町八の銀座煉瓦街2等煉瓦家を購入、転居する。辰野建築事務所を移転	明治31年[1898]	1月、日本建築学会会長に就任。7月19日、工科大学長に就任
			3月1日、長男・隆が生まれる。4月6日、臨時建築局3等技師に兼務就任。5月30日、臨時建築局工事部長に昇任。6月	明治34年[1901]	6月12日、震災予防調査会長。6月、住友家建築顧問
				明治35年[1902]	12月29日、工科大学を辞官
				明治36年[1903]	8月1日、葛西萬司と共に、辰野葛西事務所を開設(京橋区日吉町2番地)
				明治38年[1905]	片岡安と共に、辰野片岡事務所を開設(大阪市中之島2)
				明治40年[1907]	8月、辰野葛西事務所を移転(丸の内八重洲18-18-1)
				大正8年[1919]	3月25日、赤坂新坂町自邸で逝去(65歳)。常円寺に葬られる
				大正10年[1921]	3月、『第一相互館建築図集』刊行
				大正15年[1926]	12月20日、『工學博士辰野金吾伝』刊行
				昭和3年[1928]	7月、『辰野紀年日本銀行建築譜』刊行

主な作品 Works

●印は現存 ※印は推定竣工年 ◇印は辰野葛西事務所 □印は辰野片岡事務所

明治19年[1886]	銀行集会所(東京)	日本銀行金沢支店(石川)	□大阪薬業会社(大阪)	
明治20年[1887]	東京海上保険会社(東京)	□小郡銀行(山口)	※◇富山銀行(富山)	
明治21年[1888]	東京製綱会社(東京)	※□三十四銀行台南支店(台湾)	大正3年[1914]	●◇東京駅(現・東京駅丸の内駅舎)(東京)【重要文化財】
	渋沢栄一郎(東京)	◇明治専門学校(福岡)	●□日本生命保険会社京都支店(現・日本生命京都三条ビル)(京都)【国登録文化財】	
	工科大学(東京)	●□奈良ホテル(奈良)	□神戸銀行集会所(神戸)	
明治22年[1889]	英吉利法律学校(東京)	●□日本生命保険会社九州支店(現・福岡市赤煉瓦文化館)(福岡)【重要文化財】	大正4年[1915]	●◇武雄温泉場建物及び楼門(佐賀)【重要文化財】
明治23年[1890]	横浜裁判所(神奈川)	◇国技館(東京)	□近江銀行(大阪)	
明治24年[1891]	明治生命保険会社(東京)	□山口銀行(大阪)	□伊藤忠合名会社(大阪)	
	第一銀行大阪支店(大阪)	◇釜山駅(韓国)	□日本生命保険会社北陸支店(石川)	
明治29年[1896]	●日本銀行本店(東京)【重要文化財】	●◇盛岡銀行(現・岩手銀行中ノ橋支店)(岩手)【重要文化財】	◇帝国製麻会社(東京)	
明治32年[1899]	銀行倶楽部(東京)	◇浅草国技館(東京)	●◇函館図書館(北海道)	
明治34年[1901]	唐津小学校(佐賀)	□共同火災保険(大阪)	●□旧山口銀行京都支店(京都)	
明治35年[1902]	第一銀行本店(東京)	●□松本健次郎邸(現・西日本工業倶楽部)(福岡)【重要文化財】	□四十三銀行(和歌山)	
明治36年[1903]	●日本銀行大阪支店(大阪)	□大阪株式取引所(大阪)	◇雲南坂教会(東京)	
明治38年[1905]	◇東京海上火災保険会社(東京)	●◇朝鮮銀行(現・貨幣金融博物館)(韓国)	●□大阪市公会堂(大阪)	
明治39年[1906]	●◇第一銀行京都支店(現・みずほ銀行京都中央支店)(京都)	●日本銀行小樽支店(現・日本銀行旧小樽支店金融資料館)(北海道)【小樽市指定文化財】	◇資生堂(東京)	
	日本銀行名古屋支店(愛知)	●□教育生命保険会社(現・オペラ・ドレーヌ又高麗橋)(大阪)	□大阪農工銀行(大阪)	
	●日本銀行京都支店(現・京都文化博物館別館)(京都)【重要文化財】	□安田商事合名会社大阪支店(大阪)	□二十二銀行(岡山)	
明治40年[1907]	□浪速銀行(大阪)	●◇二十三銀行(現・大分銀行赤レンガ館)(大分)【国登録文化財】	※◇帝国工科大学教室(東京)	
	●□浜寺停車場(現・浜寺公園駅)(大阪)【国登録文化財】		□福徳生命保険会社(大阪)	
	□神戸商品取引所(神戸)		□神戸川崎銀行(神戸)	
	□日本生命保険会社東京支店(東京)		◇第一相互銀行(東京)	
明治41年[1908]	●◇第一銀行神戸支店(現・みなと元町駅)(神戸)			
	◇帝国海上運送火災保険会社(東京)			

※この頁は、『日本の建築[明治大正昭和]3 国家のデザイン』藤森照信著[三省堂/1979]をもとに、編集部が制作したものです

取材協力：旧松本家住宅(西日本工業倶楽部)／JR東日本／東京大学大学院工学系研究科建築学専攻／奈良ホテル
おことわり：08-13頁の作品名称のみ文化財指定名称とし、他は原則として竣工時の名称を使用しています

特集 2
建築ソリューション — 5

秩父セメント 第二工場

1956年、業界再建を担い、世界最新鋭の工場を目指してつくられたのが秩父セメント第二工場である。設計・施工には理想の精鋭メンバーを揃え、日本で初めてのコラボレーションチームを組んで臨んだ。それまでのセメント工場といえば、粉塵がひどく工場の付近一帯を巻き込んだ“灰のまち”として、社会問題にもなっていた。「できることなら、工場の中庭に緑の芝生を作り、花壇には四季の美しい花を咲かせて、これがセメント工場かとあやまれるほど、気持ちいい生活環境を実現したいと意気込んだ」という記録がある。完成なった工場は果たして労働者の誇りとなり、美しい建築群は名建築と評された。海外の注目をも集め、日本建築学会賞も受賞した。会社案内の工場の特色欄には「工場設備の配置と建物は、東京工業大学の谷口吉郎教授によるもので、シンプルに統一されたフォルムの構造物とそのレイアウトは、現在でも美しい調和を保っています。また、2000年にはDOCOMOMO 20 JAPANにも選ばれています」と明記されている。外観は極力原形を保持するよう努力しているそうだ。谷口の意気込みが誇りとして継承されている。半世紀を過ぎた今もなお、昔の姿のまま稼働している。

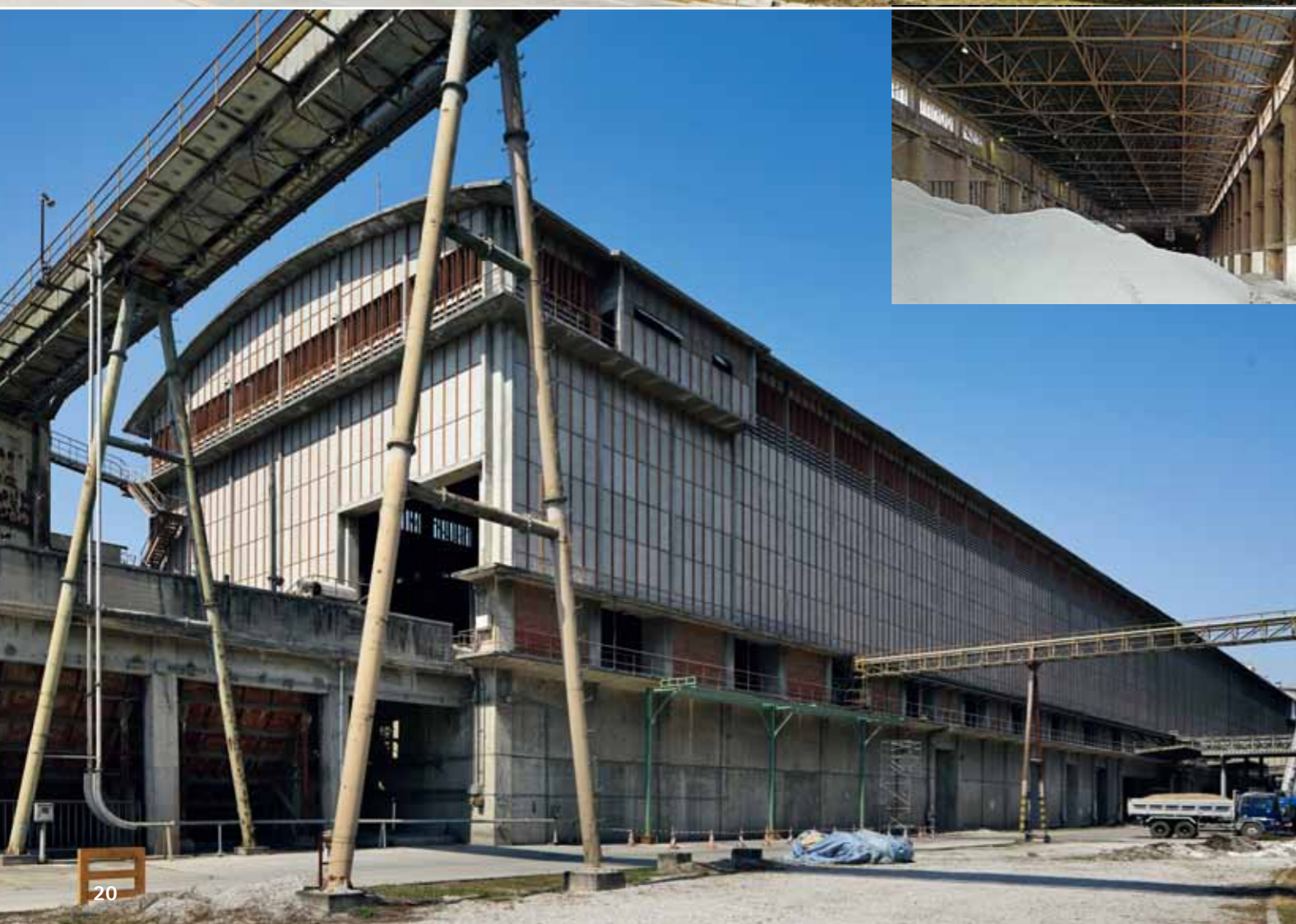
竣工時の概要

基本設計	建築：谷口吉郎 構造：二見秀雄、加藤六美
実施設計・監理	日建設計工務
機械設計	F.L.スミス社(デンマーク)
施工	安藤組、清水建設、大正鉄筋コンクリートKK、大成建設、戸田組
構造	SRC造・S造
工期	1954.11-1956.4
所在地	埼玉県秩父市大野原 1800
工場敷地面積	280,500m ²
建築面積	33,000m ²





15頁—原料置場東壁面と外階段 | 16-17頁—北東から見た工場全景 | 18-19頁—中央通路中ほどから原料粉末室、仕上げ粉末室を見る | 20頁—上—湿式キルン(回転窯): 竣工時は4基あったが、現在は1基のみ特殊セメント用に転用。他は役目を終えている | 20頁—下—原料置場: H: 26m, W: 30m、長さ: 240mで工場内最大規模の建築。現在も使用中。上は原料置場内部 | 21頁—調合原料タンクの鉄製らせん階段: 青磁色ペンキ塗り



「端正で気品ある」工場建築——秩父セメント第二工場

秩父セメント第二工場(現・秩父太平洋セメント株式会社)は、東京工業大学教授だった谷口吉郎(1904-79)の設計で、1956年(昭和31)に竣工した。敷地面積280,500m²、建築面積33,000m²の大建築で、谷口作品の中では最も大規模なものである。1956年は、経済白書で「もはや戦後ではない」といわれ、戦後復興から高度成長時代にさしかかった時で、セメントの需要が急速に高まっていた。この施設は、それに應えるためにデンマークのF.L.スミス社からのプラント輸入でつくられた最新鋭の大規模工場で、機械や施設のレイアウトはスミス社と秩父セメントが決定し、谷口はそれらを納める建屋や煙突などの設計を担当した。工場内外に粉塵が舞っていたというのが当時のセメント工場の常態だったが、彼はここで“美しい工場”の実現を目指した。

この工場は、10km先の武甲山麓から石灰岩を、近くの丘から粘土を採掘し、それらに鉄粉や石膏などを調合して粉碎したものを焼成してクリンカー(焼塊)をつくり、再び粉碎してセメントにするもので、原料置場から複数の経路を介して原料を燃焼室に送り、そこでできたクリンカーを仕上げ粉末室でセメントにしてタンクに貯蔵し、出荷作業室に回すというラインが計画された。この施設を紹介した『新建築』に、谷口は「セメント・シンフォニー」と題する設計趣旨を寄せている[1]。ここでは、工期や工費の削減と同社の製品であるセメントの利用を考慮して鉄骨鉄筋コンクリート造にしたこと、軽量化と、増築用の梁や床の張り出し部分を隠すためにカーテンウォールを採用したことなど、「構造も材料もみな使用上の必要から選定されたのである」と、合目的性重視の説明をしている。しかし、ある条件を満たすための手法は複数あるはずだから、谷口のデザインを読み解くためには、各構成要素の形やスケール、配置の仕方に注目しなくてはならない。

ここでの谷口のテーマは、規模や配置が決められた個々のヴォリュームにどのような意匠をまとわせるかということと、複数のヴォリュームによる工場景観をどうするかということだったと考えられる。まず、個々の建物のデザインについては、それぞれがかなり巨大で、長大になることが設計の前提になる。ここでは原料置場を例に、その立面のデザインを分析する。

この建物では、石灰岩を積んだ貨物列車用の高架線路を取り込むだけでなく、鉄粉や石炭の搬入経路が設けられるので長さが240mにもなり、軒高は26mなので、相当に横長の立面になる。原料の搬入・搬出や巨大な機械を納めるために、梁間は30mもある。

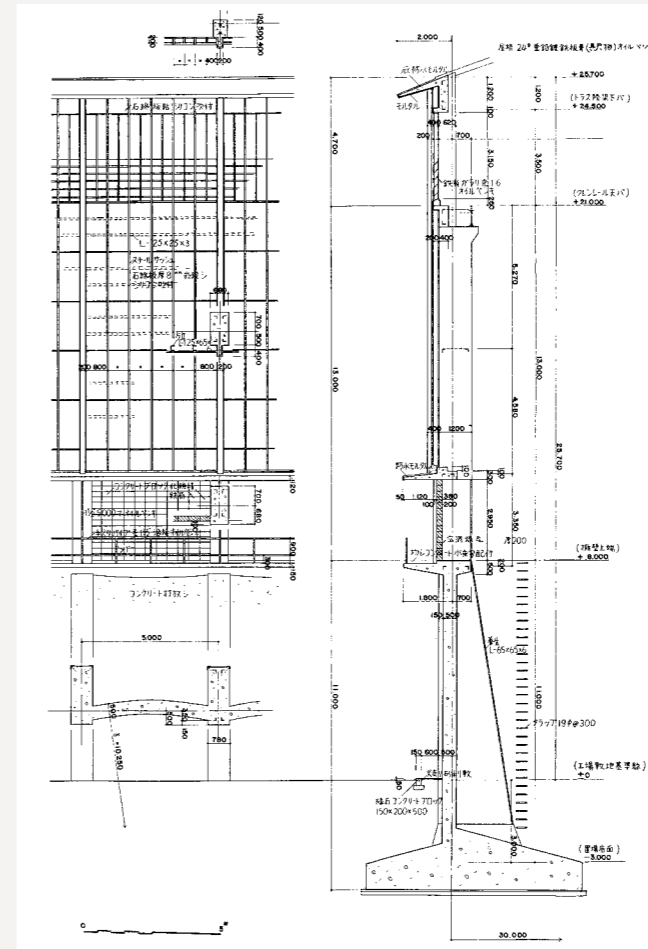
この長大な立面をまず規定するのは、5mスパンで並

ぶコンクリート打放しの柱である。その見付け幅は外廊下の下端までが78cmで、その上からは68cmである。そして立面の中ほどのやや下の位置に、薄いキャンティレバーの床と庇による深い2つの水平面が、外廊下として建物全長につけられている。その水平面間の外壁側には、ほぼ1スパンおきにレンガが充填され、ヴォイドとソリッドが交互に並んで、立面にアクセントを添える。外廊下の床下の柱間には、内側からの原料の圧力に対抗するためのコンクリート打放しのヴォールトシェルが曲面の要素として並び、立面基部に力感を与えている。外廊下の庇の上は、縦長のスレート板をスチールサッシュで留めたカーテンウォールで覆われ、それを、後ろの柱と一体化した見付け幅20cmのコンクリート製の方立が5mおきに分節している。その上に載る鉄骨造のヴォールト屋根を支持するのは庇と一体化した鉄筋コンクリート造の桁で、その庇の端部は極限まで薄くされて、建物全長にわたるシャープな水平線として立面頂部を引き締めている。

それぞれの要素が、果たすべき役割に対応したものであるだけでなく、その組み合わせ方の妙と、それらによって構成される端正な比例をもとにした、隙のない緻密な表現になっていることがこの建物の見所である。

この長大な立面にまとまりと軽快感、端正さをもたらすのに重要な役割を担っているのが外廊下の床と庇による水平の層で、それによって全体が3層構成になっている。基部と外廊下の2層の壁面は重厚だが、それを冗長にしないために、外廊下部分のヴォイドとソリッドのリズム、レンガの細かい目地によるテクスチュア、ヴォールトシェルのコンクリート打放しの曲面が効いている。3層目では、一転して縦長の比例とスチールサッシュの細い見付け、ほっそりした方立によって軽快感と端正さを演出し、それが下部の重厚な柱や、外廊下の上下2列のキャンティレバーの水平線と対照の妙を見せている。カーテンウォールは長大だが、頂部が通風口でその下部にスチールのガラリ戸がついていることが、カーテンウォールを端正に見せるのに効いている。剛と柔、垂直線の連なりと長大な2本の水平面、ソリッドとヴォイドなど、対比的な要素が上下に、また前後に重なり合って構成されたこの立面には、谷口の類い稀な美的センスがうかがわれ、古典主義建築のような記念性すら感じさせる。さらに、各要素の前後関係が緻密に調整され、そこにできる影の深さの違いが立面をさらに引き立てている。

ちなみに他の施設では、水平の窓を複数の層にして配置することでカーテンウォールに彩りを添えている。建物群の構成という点では、まずタンクなどの円筒の



要素が目目される。それはセメント工場には円形断面の施設が必須という条件によるものだが、その円筒形の打放しコンクリート面を繊細なカーテンウォールの平面と対比する要素として位置づけ、工場景観に変化を与える要素にしている。煙突が2本ずつ組になって、断面が八の字型になっているのも、そのコンテキストで説明できるだろう。水平に延びる巨大な工場群に対比できる垂直の要素として、存在感を持たせて配されているように見えるし、その中央にらせん状につけられた鉄骨の階段も効果的である。外階段は、いずれもキャンティレバーの直截的なデザインで、工場群のアクセントになっている。

以上のように、この工場は、大規模でありながら、果たすべき機能に対応しつつ、さまざまな要素に対比の妙が見られる点で、谷口の絶妙なバランス感覚によって緻密に整えられた、完成度の高い建築といえる。

最後に、谷口の一連の作品におけるこの工場の位置づけに触れておこう。若い頃の彼は合目的性重視の姿勢を見せていた。しかし、『雪あかり日記』[2]にうかがえるように、1938年10月から1年間ベルリンに滞在した際にシンケルの古典主義建築に親しく接し、形そのものの表現力(記念性の表現)や、その表現の意義

を感じとった。それが後の作品で美に対する憧憬を前面に出すことにつながっていく。彼の場合、シンケルの影響は荘重な形ではなく、端正で気品ある姿として示されることになった。記念性に対する志向は、実は最初の実作である東京工業大学水力実験室[1932]にも垣間見える。その南面の、柱形を見せる開口部は古典主義的だし、窓割りも縦長の長方形である。壁を埋め込みにするなど、端正な外観をつくり出すための美的操作が施されている。

秩父セメント第二工場は、美への憧憬が、近代建築の教義をともなって大規模に展開された好例といえる。建築においては、本当にどうであるかよりも、どう見えるかの方が大事である。そのような形のレトリックの妙が建築のデザインの要点で、この作品はその好例である。戦後の谷口作品には、上層を下層よりも少し張り出して、その外壁に縦長の要素を並べるものが数多く見られるが、秩父セメント第二工場は、大規模でありながら、内部の機能と立面とがよく対応し、各要素の位置づけに説得力が感じられる点で、その代表作といえる。この建物は1956年度日本建築学会賞(作品)を受賞している。

[1] 谷口吉郎「セメント・シンフォニー」『新建築』1956.10

ふじおか・ひろやす——東京工業大学大学院理工学研究科教授/1949年生まれ。1973年、東京工業大学工学部建築学科卒業。1975年、同大学院理工学研究科建築学専攻修了。1980年、同博士課程修了、工学博士。明治大学工学部助手、東京工業大学工学部助教授、教授を経て、2000年より現職。専門は近代建築史で、おもに近代の建築思想やデザインを研究。主な著書:『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求』[中央公論美術出版/2009]、『近代建築史』(建築学入門シリーズ)[森北出版/2011]など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した
先駆者



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

●ゲスト●
谷口吉生
Yoshio Taniguchi
建築家(左)
松隈 洋
Hiroshi Matsukuma
建築史家(右)



生産重視の時代に “美しい健康な生活の場”を実現した 秩父セメント第二工場。

前川さんと谷口さんは、
すごく親しかったはず…

古谷 | 「建築ソリューション」は「LIXIL eye」の創刊に伴ってスタートした企画ですが、実はその題材としてイの一番に思い浮かんだのが、秩父セメント第二工場でした。長らくぜひお話を伺いたいなと思ってきましたが、今日やっとそれが実現したことになります。昨日、松隈(洋)さんと私は初めてセメント工場をお訪ねして、まだ壮健に稼働している状態を見学して参りました。軒庇が出ているせいでしょか。外壁のコンクリートが風化もせずに、本当にきれいなまま稼働していて、有名なキルンというシリンダー状の焼成装置は1基が残っているだけでしたが、全体の佇まいは竣工時の写真で見たままでした。

では、本題に入りますね。通常ですと、谷口(吉生)さんに「谷口吉郎先生とのかかわりは？」から聞くんですが、今日は「建築家としての谷口吉郎先生のご記憶があるのは？」というご質問にいたします。

谷口 | 父は日本大使館の庭を設計するために外務省からドイツに派遣されていて、僕が4歳くらいの時にアメリカ経由で横浜に帰って来ました。その時から父の記憶が始まります。なぜかという、母が僕を抱いて港に迎えに行っていたのですが、人がいっぱい、隣の人のタバコの火が僕の頬に付いてすごく熱かった。その後、洗足の自宅に戻り、父が帰って来たから、みなでお寿司を食べたのですが、その時、わさびを食べてしまい、これがまたすごくてね(笑)。強烈なタバコの火とわさび、その2つが僕の一生の記憶の最初に出てくる父です。

古谷 | 刺激的な登場ですね。では、谷口先生が建築家だと思われたことは？

谷口 | 必ず毎晩遅く帰って来ることでした。建築の設計はそういう仕事なのだと思います。

古谷 | 設計されている姿に触れられたのはいつ頃ですか？

谷口 | 東工大の研究室に行った時に、時々見ました。紙に、何か分からないものを描いていました。スケッチを重ねるうちに、だんだん紙が黒くなって…。実は僕も今、同じようなことをやっています。

古谷 | それはフリーハンドで？

谷口 | ええ、スケッチは。自分だけにしか分からないような絵で、しまいには鉛筆で真っ黒になっていました。

古谷 | それはきっと、慶應の校舎を設計されていた頃になりますよね。

谷口 | そうでしょうね。戦後すぐの頃ですから。

古谷 | いったんそこまでして、次は松隈さんに、谷口吉郎先生とのかかわりについて伺います。まず、松隈さんが前川事務所におられたのは？

松隈 | 僕は1980年から85年まで、前川國男の事務所にいました。前川さんが同級生としての谷口吉郎先生のことを書いている記事をずいぶん読ませてもらいました。谷口先生は学生時代から飛び抜けて優秀

だったという話や、他の人と全然違った…ということも書いています。ちょうどその頃の、この東大時代の集合写真を見つけたんです。お隣が五井(孝夫)さんですよね。

谷口 | 本当ですね。この写真は前川さんの事務所にあったのですか？

松隈 | ええ、アルバムの中に残っていたんです。前川國男がいて、横山不学、岸田日出刀、佐野利器もいる。上が市浦健さん。ご覧になるのは初めてですか？

谷口 | この写真は初めて見ます。

松隈 | そうですか。何だか血気盛んで強い意志を感じますね(笑)。

谷口 | 卒業の時ですか？

松隈 | どっちかちよつとよく分からないんですが、おそらく、入学時ではないかと…。いずれにしても1926年か28年かですから、20代前半ですね。

谷口 | 父に聞いておけば良かったと思うのですが、父は前川さんとはすごく親しかったはず。古い写真を見ると、山にスキーに行ったりして、一緒に撮った写真がいっぱい残っています。ところが、僕が建築家になった頃から後は、前川さんとお付き合いが、どういふわけかあまりなかったような気がします。仲違いしたわけじゃないと思いますけど。僕の推察では、どちらかという父は次第に日本的なもの、保守的な方に傾いていって、一方、前川さんは歳を取られても設計が進歩的でしたので左右に分かれたのかな…。若い時に書いたものを読むと、父も非常に勇ましい革新的な意見をたくさん述べていますけど。

松隈 | それぞれが自分の道を歩み始めたということでしょうね。

谷口 | そうでしょう。あとは、時代背景を考えると、やはりドイツとフランスとに分かれた可能性もありますね。前川さんがル・コルビュジエのフランスへ、父はドイツへ行き、当時は敵対する国だから、そういうこともある程度影響したのかもしれない。

古谷 | 松隈さんが事務所にいらした頃は、前川さんはよく谷口先生のこともおっしゃっていた？

松隈 | いやあ、特に谷口先生の話は聞きませんでした。もう75歳を越えていましたし…。ル・コルビュジエの話はしていましたけど。

谷口 | すでに父とは疎遠になっていたのですかね。

松隈 | さっきのドイツ的なものとフランス的なもの…かもしれないですね。(ペーター・)ペーレンス対ル・コルビュジエみたいな違いかもしれません。

谷口 | そうね。ペーレンスとル・コルビュジエって、良い対比ですね。

松隈 | もちろん、ル・コルビュジエもペーレンスのところにいたわけですけど。谷口先生はミース(・ファンデル・ローエ)のことは何かおっしゃっていましたか？

谷口 | ミースのことはよく僕にも話していました。非常に好きであったようです。

松隈 | そうですか、ミースもやっぱり、ペーレンスのところで(カール・フリードリッヒ・)シンケルの影響を受



谷口吉郎 [出典:「谷口吉郎作品集」[新建築社編、淡交社/1981]]
1904年、石川県に生まれる。1928年、東京帝国大学工学部建築学科卒業。1930年、東京工業大学講師。1931年、同助教授。1938年、外務省嘱託として欧米に出張。1943年、東京工業大学教授、工学博士。1962年、日本芸術院会員。1964年、博物館明治村初代館長。1965年、東京工業大学教授定年退官、同名誉教授。1968年、文化庁文化財保護審議委員。1973年、文化勲章。1979年、逝去(75歳)。勲一等瑞宝章



東京帝国大学入学時の写真：中段右から3番目が谷口吉郎、その左隣が五井孝夫、左から3番目が前川國男、その右隣が横山不学、後段右から3番目が市浦健、前列左から4番目に岸田日出刀、その右隣に佐野利器、塚本靖、武藤清と続く [所蔵：前川建築設計事務所]



秩父セメント第二工場 航空写真：竣工後、約25年を経た1980年撮影：左側(西側)に乾式キルン(1号)、タワー、煙突を新設(1976年)。奥に石炭置場が見える[提供：秩父太平洋セメント]

けるんですね。

谷口 | 当時の時代背景もいろいろあったでしょうね。父もシンケルの影響も受けたと言われている。あの長い文章もそうです。

古谷 | 「セメント・シンフォニー」のことですね[1]。そのお話にはまた後ほど触れたいと思います。

卒業設計

モダニストたちを追いかける世に…

古谷 | 今日は松隈さんが谷口先生の卒業設計もお持ち下さったんです。同期の方たちのも…。

松隈 | たまたま前川國男のことを調べていた時に資料があって、一緒にコピーしたんです。

谷口 | 当時の卒業設計はどういうものが多いですか。古典的な様式の建築も多いですか？

松隈 | 非常に過渡的な感じがします。谷口先生は製鉄所ですし、前川國男は放送局、それまではとても卒業設計にはしなかったようなものをつくり始めた。いわゆる当時のモダニストたちに連なるようなテーマが多いんです。市場とか放送局とか、かなり日常的にあるものをデザインしている。まさにモダニストたちを追っかけている世代に入っている印象が強いですね。

谷口 | なるほどね。そういうことですか。

松隈 | 例えば議事堂をつくったり美術館をつくったりということじゃなくて、もっと日常的なものをつくろうということですね。

古谷 | 誰がどんなことをやっていますか？

松隈 | 市浦健さんが劇場で、横山不学さんが中央郵便局、吉村辰夫さんが埠頭、五井孝夫さんが屠場なんですよ。

谷口 | 珍しいですね。

松隈 | すごく珍しい。

谷口 | やはりすべて特別な機能がある建築ですね。

松隈 | そうです。そうです。

谷口 | 教会なんかはあまりない。

古谷 | 本当ですね。あつ、塵芥焼却場もありますね。

松隈 | そうなんですよ。とにかく工場とか、機械みたいなものが前面に出てきている感じがしますよね。メカニクなものに対する憧れのようなものが…。ご覧になったのは初めてですか。

谷口 | 卒業設計が残っているという話は聞いたことあるけど、今まで見たことはなかったです。

古谷 | 私も製鉄所が卒業設計だったということは知っていたんだけど、見るのは初めてです。

松隈 | 東大の図書館に全部保管されています。谷口先生は卒業設計のためにわざわざ八幡製鉄所まで見に行ったという話もあります。

谷口 | 熱心ですね。

松隈 | たくさん描いておられるんですよ。プラントも設計していますし、ちゃんと。

古谷 | トラスなんかもね、克明に描かれている。几帳面に…ね。

谷口 | 20代の初めですか？

松隈 | そうですね。1928年に卒業されているから24歳。その年の東大の代表作として、横山さん、吉村さんと共に、建築学会の機関誌『建築雑誌』に載っています[2]。

処女作・水力実験室から、メタボリを繰り返す自邸へ

古谷 | 本題のセメント工場に行く前に、少しその前のことを振り返りたいんですが、処女作としてつとに有名なのが東工大の水力実験室。もともと東工大だからだとは思いますが、プラントとか、そういうものが好きだったんでしょうか。

谷口 | 機能主義の全盛時代ですからね。それから、当時は建築家ってそんなに多くなかったから、そういう機械に関する建築とか工場に関するものは、東工大の建築学科が最もかかわっていたんじゃないですか。実験室なども多くありましたから。

古谷 | それはドイツに行かれる前ですよね。

谷口 | ええ、ドイツに行く前でしょう。

古谷 | 当時、日本ではそういう工学的なものとかは、書物から？

谷口 | その当時のモダニズムですよ。丹下(健三)先生も、「白いお豆腐に穴が開いたような、そういうモダニズムの建築を当時はみんながやっていた」と話されていました。いつの時代も、若い時は、流行のスタイルをまねるところから始まりますから、単純にそうじゃないですかね。それがちょうど東工大が求めた水力実験室のビルディングタイプにぴったり合ったのだと思います。

古谷 | 1932年だから、まだサヴォア邸とかと同世代みたいなものですよ。ですからそれ以前のものから何か影響を受けているわけですね。その後、ご自邸もおつくりになられますけど、ご自邸では何か。

谷口 | 自邸ではもういろいろな実験をしています。藤岡(洋保)先生が本に書いてくださっているように、父の家は時代によって変化していった[3]。私が生まれるちょっと前の1935年に父はあの家を設計したのですが、それから父が亡くなる79年まで、何回もそれこそメタボリズムを繰り返しています。最初は、真っ白なインターナショナルスタイルの家なのですが、芯の構造は同じでも、最後は内部も外部もすべて数寄屋建築になりました。自分の建築が変わると同時に、自分の家も変わっていったんです。まず、自分の家を使って実験するわけですから、住んでいる家がモックアップになってしまふ。

古谷 | なるほどなるほど、原寸大の… (笑)。

谷口 | そう原寸大の模型です。家に入ると、ホテルオークラの壁があったり、東宮御所の壁があったり(笑)。

古谷 | いつ頃までそれは繰り返されていたんですか、実験は。

谷口 | 最後までです。

松隈 | 完全に実験住宅なんですよ。大変でしたね。
古谷 | 話を伺うだけでも面白い。まさにスケルトンインフィルみたいに、インフィルがどんどん変わっていく。その後、それこそセメント工場の時も、骨格はRCでつくるけど、それ以外のところはブロックやレンガで作り分けて、交換可能なように…と書いてらっしゃいますが[1]、その原点ですね。

谷口 | そんなこと父が言っていますか？ セメント工場の時に？

古谷 | セメント工場で言われています。わざと柱を独立させて、そして1階周りはどこに穴を開けても良いように全部空洞レンガで積んであると書かれています。でも昨日、伺ってみると、それはどうも実際に行われた形跡はないようでした(笑)。竣工以来、今でも大事に同じように使われていて、取り替えたところはあまりないみたいです。

谷口 | 大変に面白いですね。

慶應寄宿舎の改修とローマ風呂

谷口 | 広島工場を設計した時ですが、実は僕も同じようなことを考えていました。ゴミ工場は、機械のための建築ですから、すごく耐用年数が短いのです。

古谷 | 相当な高温で燃やしますからね。

谷口 | 工場の人はあまり知らないと思うのですが、僕は、将来、ゴミ工場がスポーツセンターに変わるように、テニスコートや体育館が入るようにして、スケッチを描いておいたのです。ちょうど空間のスケールが合うので。

古谷 | 予想図が描いてあるんですか！

谷口 | そう。例えば廊下の部分は観客用のスタンドになり、そこから見下ろす場所は、競技もできるプールに変えられるように。構造スパンも少し広めにし、将来いろんなものに変えられるようにしてあるのです。大きな機械室の中はそのままテニスコートが入ります(笑)。

古谷 | そうですか(笑)。それは面白い。谷口さんはすでにそれに類したことを体験しておられたから、やっぱり血は争えないというんでしょうか。谷口さんのゴミ工場の話は、最後にまたもう一度伺います。ところで、慶應寄宿舎はまだ残っていますね。聞くところによると、全部、壊されそうになったところを、何とか改修にこぎつけたという話のようでしたか。

谷口 | そうそう。せっかく保存できたのだから、もう少し改修方法がはっきりすると良かった。創建当時の姿に戻すのか、それとも生まれ変わらせるのか。父の家



東京工業大学水力実験室[1932] [出典：「谷口吉郎作品集」]



自邸[1935] [出典：「谷口吉郎作品集」]



広島市中工場[2004] [写真：北嶋俊治]

[2] 「卒業計画」『建築雑誌』1928.9
[3] 「合理的性を越えた意匠の世界—谷口吉郎自邸」藤岡洋保著『新建築社/1997]

みたいに、構造だけ使って新しい建築に生まれ変わらせるとか。昔の通りに保存するという方法もありますし、その辺の考え方があいまいなのが残念です。

古谷 | 松隈さんはご覧になりましたか？

松隈 | 見てないです。ただ僕、ひとつだけご報告があるんです。前川國男の事務所にいた崎谷(小三郎)さんというスタッフが、(アントニン・)レーモンドと一緒に独立したんですが、前川國男の自邸の木造の設計を担当した人なんですね。彼がまだお元気に頃に話を聞いたことがあって、前川事務所在籍中に、慶應寄宿舎の図面の手伝いに谷口先生のところに通って、矩計とかを描いた…という話を聞いているんです。そういうことからすると、前川さんと谷口先生は本当に親しい時期があったんでしょうね…。

古谷 | そうでしたか。ところで慶應は何棟もあるうち1棟を改修した段階のようですが、全部をぜひきちんと改修されたら良いと個人的には思っています。あの中にお風呂がありますよね。

谷口 | そのお風呂はどうなっていますか？

古谷 | まだ何もしないでそのままになっているらしいです。寄宿舎は改修して、ローマ風呂の方は手を付けずに置いてある。あのローマ風呂も改修できたら良いですね。

松隈 | 素敵でしょうね。

古谷 | それこそ前の姿にきちんと復元して、体験できたらさぞや良いだろうと思って。

谷口 | あのローマ風呂は、戦後、進駐軍が保存しながら将校用のパーとして使っていた。だから生き残ったのです。父が設計した床暖房の設備やローマ風呂がある白い明るい建築というのは、当時は、今と違う意味があったのではないかと思います。結核を克服するためのサナトリウムなど、そういう健康志向の時代だったのです。太陽をたくさん採り入れて明るく、健康な家をつくらう…という当時のスタイルの影響ですよ。慶應の幼稚舎の建築もみんなそうです。日本の住宅はお風呂とか台所は北側に多くあったのですが、それを南側に持ってきた。僕の生まれた家もお風呂場は、一番太陽が当たる南側の明るいところにありました。その辺の影響だと思います。

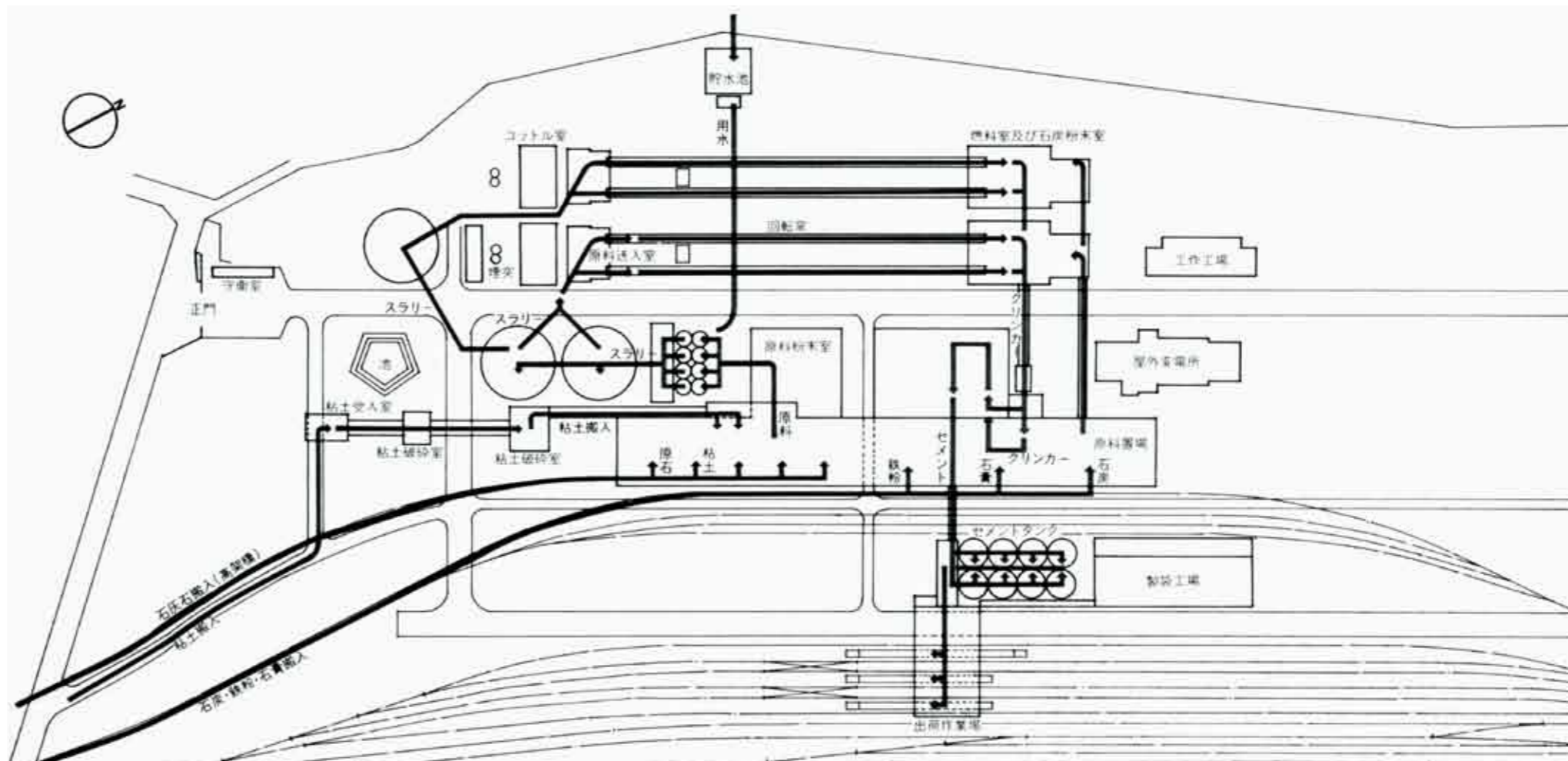
古谷 | 建築のスタイルもそうでしょうけど、戦前は結核の脅威というか。

谷口 | そう結核は脅威だった。

古谷 | 立原道造も結核ですね。立原道造が亡くなるのは何年でした？

松隈 | 立原道造は1939年です。たぶん(アルヴァ・)アアルトのバイモアのサナトリウムとか、あるいは(ヨハネス・)ダウカーのオランダのゾンネストラールのサナトリウムとか、そういうものがやっぱり一番輝いて見えたんでしょうね。人々の健康のために近代建築の技術を使う…、ということですね。

古谷 | 慶應寄宿舎が1938年ですから、だいたい30年代にご自邸や水力実験室が始まって、それから47年に藤村記念堂になるわけですね。



藤村記念堂に見る和風の表現

古谷 | 藤村記念堂の話少し伺います。和風の建物だったんですが、聞くところによると、あの時期のことだから結構資金も資材も厳しくて、だから地元の木を使って地元の大工がつくるということでつくられたようですが、でも、いわゆる和風木造ともちよっと違うような気がします。谷口さんからご覧になるといかがですか。藤村記念堂に見るような単純な壁と戸障子の繰り返しには和風の表現とモダニズムが、何か接点があるような感じもしますが。

谷口 | それは本人がいつも言っていました、日本建築とモダニズムの関係について。例えば桂離宮の松琴亭のコンポジション、線と面の構成などでモダニズムの関係について説明していました。

古谷 | 確かにそうですね。

谷口 | また、(ピエト・)モンドリアンの構成と日本の違いの割付け、建築の非対称性とかね。クラシズムは中心線があるのに対して、モダニズムは非対称的になっている。そして「日本の建築もそうである」というようなことを、子どもの僕にも話をしていました。

古谷 | お家でそういうお話をされていたわけですか。

谷口 | そうですね。前にもお話したことがあります。父は間接的な方法で僕を建築家にさせたかったからでしょうか。

古谷 | そうでした。清家(清)先生の陰謀で谷口さんは建築家になられたんですね[4]。だからやっぱり外部の方が建築は面白いんだよというお話をなさって、何となく影響を与えとか…(笑)。

谷口 | 今考えると、そういう面白い話を時々して、興味を持たせるようにしていたのだと思いますよ。

古谷 | そうでしょうね。それはともかくとして、藤村記念堂とこれからお話しようとしているセメント工場は、全く自然に抵抗なくつながるものがあると思うんです。古谷 | そうでしょうね。それはともかくとして、藤村記念堂とこれからお話しようとしているセメント工場は、全く自然に抵抗なくつながるものがあると思うんです。古谷 | そうでしょうね。それはともかくとして、藤村記念堂とこれからお話しようとしているセメント工場は、全く自然に抵抗なくつながるものがあると思うんです。

谷口 | 建築の形式は変わっても自分が好む感覚的なものは変化しない。また自分の中では両方とも論理的にもうまく説明できたのでしょ。村野藤吾先生が父の建築について書いていらっやる[5]。日本の建築と共通する線による構成についてなのですが、藤村記念堂も主に線の構成でしょ。セメント工場のファサードも線ですよ。藤村記念堂を設計した頃に、水力実験室みたいな壁に穴を開けたような構成から、線の構成による建築に変わっていったと思います。

古谷 | それはやっぱりモダニズムというか、日本のモダニズムをだんだん手に入れてきた…。

谷口 | 父の建築が変わったのは、自分の美意識が変わったのではなく、時代が変わったのではないでしょう

か。今になって、父に聞いてみたいことがいっぱいあります。父に聞けば「違う」って言うかもしれませんが、藤村記念堂の設計をした戦後の時代に、白いモダニズムの建築などできなかった。そして地元の大工さんを使ったら、伝統的な木造建築しかできない。だから伝統的な木造建築を初めて設計することになって、柱、梁、格子などによる線の構成の日本建築に変わっていった。しかし美意識というか、プロポーションというか、そういうものは変わっていません。また、シンケルのことを書いていますが、シンケルはネオクラシズムで、全体の構成は全く異なりますが、慶應校舎のファサードの線の構成によるところなどに共通点があるような気がします。

松隈 | 新古典ですね。

谷口 | 父は文章を多く残していますが、まず自分が好む感覚的なことがあって、それを後で論理付けしたのではないかと思います。

古谷 | 直感で先に思っただけで、それを後でね…。

谷口 | 丹下先生がそうだったのですが、すべてが論理的に構成されているようですが、形が先行しているのです。形が美しく説得力があれば、それ自体が論理的であるという考え方です。

古谷 | 松隈さん、いかがですか。

松隈 | 前川國男もそんなことを言っていました、理論は後から付いてくる。つまり、発見した形がある説得

秩父セメント第二工場 配置図[出典:「谷口吉郎作品集」]
この配置は、原料の搬入から加工、製品の保管および出荷の動線から決められている。原料の石灰石・粘土・鉄粉を貨車で搬入するため、原料置場が引き込み線に平行に配置されている。原料置場に搬入した後、破碎室に送って粉碎し、それらを別々の経路で燃焼室(燃料は石灰)に送り、そこで出来たクリンカーを仕上げ粉末室で粉碎して製品にするという経路が、引き込み線を始点・終点にして計画されている[解説:藤岡洋保]



慶應義塾大学予科日吉寄宿舎浴室棟内観 [1938] [提供:慶應義塾福澤研究センター]



藤村記念堂 [1947] [出典:「谷口吉郎作品集」]

[4] [INAX REPORT]No.183, p.21~参照
[5] 村野藤吾「線に旨趣あり」[谷口吉郎作品集][新建築社編、淡交社/1981]



土建工事完了直後のセメントタンク【出典：「谷口吉郎作品集」】
鉄筋コンクリート造円筒型連結構造で、2列で後側に4基連なっており、計8基。外径13m、高さ28.5m、合計26,000tの容量がある。上部には17.25×41.45mの鉄骨造コンベヤー室があり、セメントはこの中を走るコンベヤーからタンクの中に落とし込まれ、貯蔵される。取り出しは、下を縦横に貫くトンネルのコンベヤーによって行われる。現役で使われており、小幅度の型枠による打放しコンクリート面は、今なお美しい

力を持っていて、これだと決めたものは言葉によって後から説明できると。だから理論で構築するんじゃなくて、丹下さんのおっしゃる通り、美しいものを求めることが大事なんだと言っていました。

古谷 | 藤村記念堂の意匠、セメント工場の意匠の関係はどうお考えになっていますか？

松隈 | 僕は、それもその通りだと思っているんです。先ほどの白い箱のモダニズムから、やっぱりシンケルとの出会いによって、つまり自分のルーツになるものから建築を組み立てようというふうに変ったんです。

谷口 | そうですね。

松隈 | その時に、木造の文化に根差すきっかけが藤村記念堂にあって、あれでたぶん、方法的に核心みたいなものを手に入れたんじゃないかと思うんです。谷口先生が。同じようなものを鉄とガラスとコンクリートでやるとどうなるか。それがセメント工場をつくり上げた、僕も思います。

古谷 | やっぱある種の自然なつながりというか、そういうものがありますよね。

松隈 | そうですね。

古谷 | 木が豊富なところでは、そして大工さんがいるところではその木で、そういう方法でつくっていくし、秩父は何と言っても石灰岩の山の前に建つセメント工場だから、コンクリートでつくことに異論はなかったで

しょうし。コンクリートを活かして、ご自分の考える日本のモダニズムの表現になっているような気がします。

松隈 | 藤村記念堂をやる中で、自分が抛って立つ場所なり目指すものが、はっきり見えたような気がしますね、ある核心が。後はさっきおっしゃったように迷いが感じ。線と面でつくっていくことを、コンポジションの考え方でいけば良いんだと。

古谷 | やっぱり一段階、何だろ、箱の家に穴を開けたという、ル・コルビュジエ前期のモダニズムから…。

松隈 | そうです、そうです。

古谷 | それは、先ほどのように模倣していたかもしれないけれども、やっぱり少しオリジナルなものをというか、日本によりふさわしいものに一歩踏み出したという感じがしますね。

松隈 | 材料とかつくり方とか、そういう合理に根差しつつ…ということですね。美しさを求める、そういう場所が木造の中にあるんだということですね。

工場見学で「セメント・シンフォニー」を検証

古谷 | セメント工場を雑誌で発表する時に、「セメント・シンフォニー」という記事[1]を書いています…。

谷口 | あれは父にとって、自分の中でかなり大事なこ

とだったと思います。僕にそういう話をよくしていましたから。当時、工場は生産性や効率を上げることをだけを考えていい場所だった。だから工場の周りに木を植えたり環境を整えたりすることなどは誰も考えもしなかった。工場で周辺環境のことを日本で最初に考慮したのが秩父のセメント工場だと。晩年になってからも、度々そういう話をしたのは、余程思い入れがあったのでしょね。

古谷 | 当時の『新建築』の「セメント・シンフォニー」に書いてあることは、とにかく灰のまぢだったので、それを何とか払拭したい。「塵埃ばかりでなく、騒音や、そのほか工場内の乱雑や非衛生など一切のごみごみしたものを払いのけて、新しい模範的な工場を作ってみたいと、そんな希望を強く抱いた。できることなら、工場の中庭に緑の芝生を作り、花壇には四季の美しい花を咲かせて、これがセメント工場かとあやまれるほど、気持ちのいい生産環境を実現したいと意気こんだ」と書かれているんです。その後、他のところでも、ただの生産の場ではなくて、その人たちにとって生活の場であり、生活の環境でもあるということをおっしゃっていますよね。花壇についてはよく言われていますけど、緑の芝生だったことはあるんですかね。

谷口 | どうでしょうか。

松隈 | ちょっと昨日の見学では分からなかったですね。雪が降った後だったし。

古谷 | 当時の写真はみんなモノクロなので、あまりよく分からないですが、本当に緑の芝生がずっと張られている光景なんてイメージしたら、美しいですよ。

谷口 | セメント工場は1950年代で、そういう建築が全くなかった時代ですから、見た人は驚いたでしょうね。

古谷 | セメント工場の竣工した1956年、昭和31年という、実は私は30年生まれなので、ほとんど同い年という感じなんです。

谷口 | そうですか。それから特に面白いというか、変わっていると思うのは、非常に大きな煙突です。ルイス・カーンの建築のようなプロポーションの。ああいう造形は、父の建築の中ではセメント工場しか表れないんです。

古谷 | 円筒が2つつながっていますね。

谷口 | それからセメントタンクの形も面白い。このような形は、他の建築には一度も表れてこない。その他にも、いろんなモチーフがあるでしょう。アールデコとかクラシズムのような、いろんな造形がコラーージュになっている。つまり、工場としての機能をそのまま形にした結果でしょう。

松隈 | ル・コルビュジエの『建築をめざして』[6]の中にも、サイロとか構造プラントみたいなものが載っているんです。その中で、いわゆる建築というものは、幾何学的な立方体の組み合わせなんだ、と言っています。そういうものもちょっと感じますよね。やっぱり“清らかなる美しさ”みたいなものを、どこかに求めている感じがしますね。

谷口 | また、この工場の設計には、一生持ち続けた同じモチーフみたいなものも同時にあります。

古谷 | このセメントタンクは今もそのままあるんですよ。周囲にいろいろ出来てしまいましたが。

松隈 | でも明らかに「絶対にこの写真を作品集に入れる」という意志を感じますね。

谷口 | いや、この作品集[7]は、父が亡くなった後にくったものですから、この写真は僕が選んだのです。しかし、写真撮影の時には、写真家と一緒に父もアングルを決めていたということですから、好みの場所であったことは間違いありません。

古谷 | そうですね。この小幅度のタンクの打放しも面白いですね。この感じはどことなく何か対比するものが感じられる。ただのマスじゃないんです。細かく板の目が入っているから。

谷口 | そうですね。

古谷 | とここで、今は正門から入ってまもなくのところにある煙突に上る階段がなくなっているんです。

松隈 | そうそう。2基の煙突のうちの1つは、当時のものではなくなくなっていましたね。

谷口 | そうですね。原料置場は今でもありますか？

松隈 | そのままありましたけど、2つあった外階段の片方が取られちゃった。3年前だそうですね。

古谷 | そうでした。もう一つの外階段はまだ残っているんです。コンベアの大きな庇の下になっているから、ほとんど健全な状態で残っていました。昨日上がらせていただいたけど。

松隈 | 谷口さんは、これは出来た時にご覧になったんですか。

谷口 | 当時、見学した記憶があります。1956年だから、私が大学の1年の頃ですね。

松隈 | いまだに見学者が多いみたいですよ。きれいな石膏の模型も残っていました。

古谷 | そろそろこの本題のセメント工場の細かいところに入っていきたいと思います。当時の作品発表の雑誌の記事には、「清潔な自動工場に」と書かれています、まさに清潔感というか、清潔さに対する憧れというか、そういうものがこの文章には至るところに出てくるんですよ[8]。確かにセメント工場というのは、セメントの粉が舞っていて、粉塵がサッシといわず軒先といわず、積もっちゃう宿命があるから、それを何とか振り払って、労働者にとって健康な職場環境を与えたい、という意図があったと思います。もしかすると、先ほど伺ったような、当時の結核をも克服していこうとする清潔感なんかも意識していたかもしれない。

谷口 | 特に終戦からは、それまでの戦時中の灯火管制とか暗かった思い出を払拭するために、当時は何でも明るくする傾向があったのです。

古谷 | 隅々まで照らしていくような感じがありますよね。健康志向と、それから景気を回復してもう一度、国をつくり直していこうとしている。

谷口 | 色については、日本的な色が一時、戦後は消えた時代がありました。アメリカ人が持ち込んだ

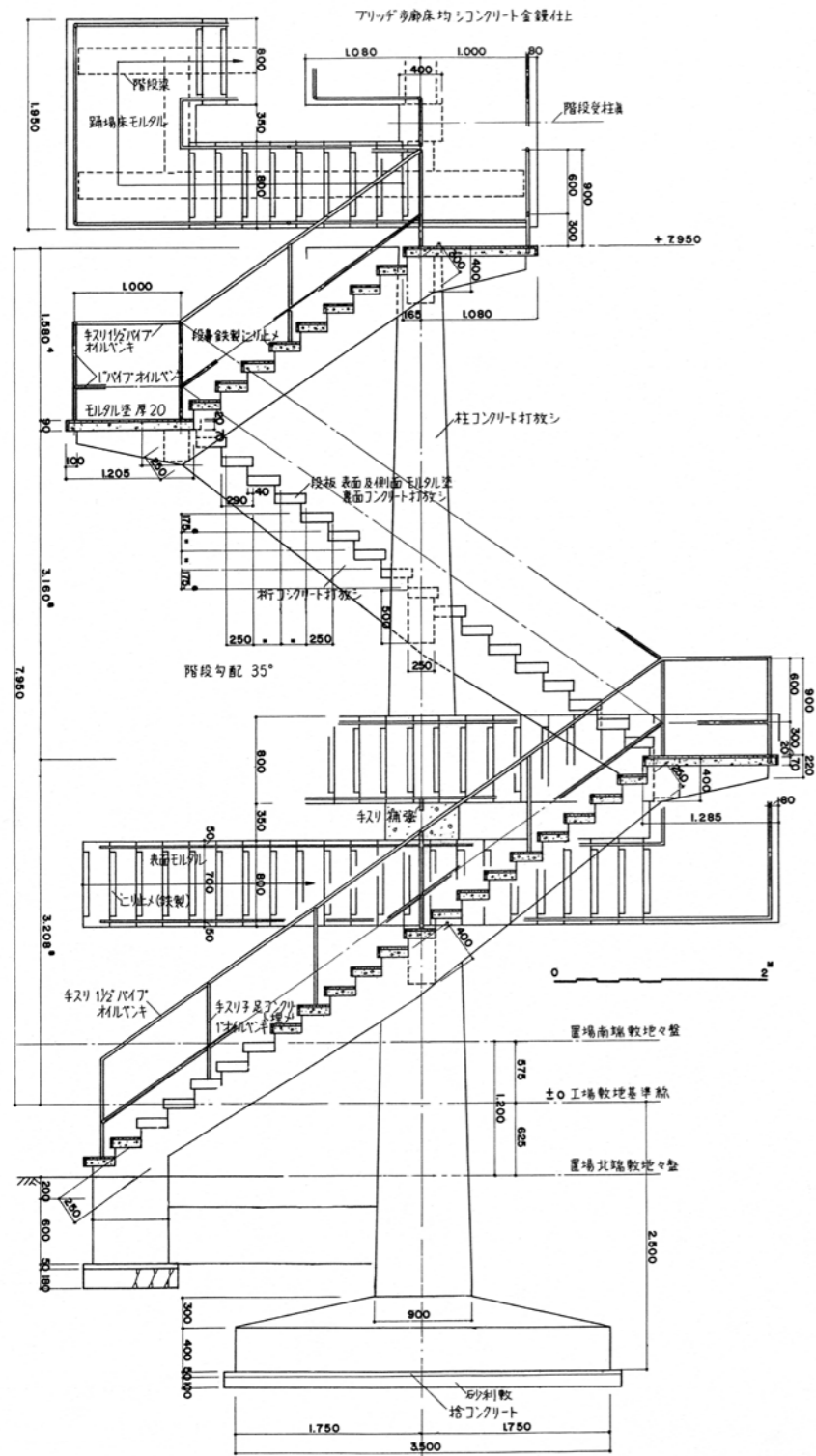


秩父太平洋セメントに保管されている石膏模型

[6] 『建築をめざして』(SD選書)ル・コルビュジエ著、吉阪隆正訳【鹿島研究所出版会/1967】

[7] 「谷口吉郎作品集」【新建築社編、淡交社/1981】

[8] 谷口吉郎「清潔な自動工場に」【国際建築】1956.9



秩父セメント第二工場 原料置場外階段詳細図【出典：『新建築』1956.10】
原料置場の長手方向立面に付く階段。上すばまりの1本柱を中心とした鉄筋コンクリート造打放しのキャンティレバーで、スティックかつ軽快なデザインである。キャンティレバーの踊り場が2つあり、ジグザグの線を構成して、立面のアクセントになる。段板を1本の斜め梁で支え、手すりは細いパイプのため、軽快感がある。斜め梁の断面を必要最小限にするため、曲げモーメントが最大になる箇所の成を40cmにして両端を細くしている【解説：藤岡洋保】

ろんな商品、タバコのラベルとかココ・コーラの広告とか、それ以前に日本人が体験しなかった原色を使った色が現れた。日本には朱はあったけど、原色の赤とは全く違う色だった。

古谷 | くすんだものというか。

谷口 | そうですね。当時、光とか色の感じが変わったのは、やはり戦中の反作用と思います。

古谷 | 当時は他にもモダニストがいたわけですけど、このセメント工場は色も独特ですね。松隈さん、日本人の戦後のモダニストの色は、どういう感じですか？例えば前川さんなんかは…。

松隈 | どうなのでしょう。ただ面白いと思ったのは、

神奈川県立音楽堂の入り口のブースのところは、黄色のペンキが塗ってあって、セメント工場の手すりの色と一緒になんです。黄色なんて、今までの建築の中では使われていなかった色だと思いますけどね。

谷口 | やっぱ当時のモダニストは、ル・コルビュジエの色の影響があるんじゃないですか。

古谷 | ありますよね。ル・コルビュジエの色…。

谷口 | あの色は非常に印象的ですね。原色ではないのだけど、日本のくすんだ色とも違う、不思議な色ですね。父が当時、よく使っていた色に、ブルーグレーもあります。

古谷 | なるほど、ありそうですね。ル・コルビュジエの色がいろんなところに(笑)。

谷口 | 慶應の幼稚舎とかは、木部はブルーグレー色に塗っているのです。

古谷 | 香川県庁舎にも色がありました、ちょっと小さいところに挿し色が入ってる。みんな、ある共通性があるんだけど、あいにく当時の写真はみんなモノクロなので、あんまりよく分からないですね…(笑)。

コラボレーションで裏付けた 新しい技術と合理性

古谷 | このセメント工場の設計は、この文章[1]を拝見すると、とにかく新しい技術を集めたことと、それから短工期、9か月でつくるんですよ。短工期でつくるといって、いろんな工夫をされているんです。その中にコンクリートはコンクリートなんだけど、本当はPSコンクリートでやりたかったけれども、お金が掛かりそうだからとか、それからシャレーン構造も検討したとありますが…。

谷口 | シャレーンはシェルです。

古谷 | シェルですか。シャレーンの新構造も進んでいるので、それもやりたいけれども、まだ完全に解き明かされていないとか。また、工事費の関係もあって、通常のコンクリートになったと書かれています。それと、合わせてこの文章の中では、日建設計工務と東工大の意匠、それから構造の先生お二人の協働。

谷口 | 二見(秀雄)先生と加藤(六美)先生。

古谷 | そう。それからプラントそのものは、デンマークのスミスという会社が入って協働設計になった。それらのことは、大学で研究している我々にとっては、実務家と共同して設計するのはとても良いテストケースとおっしゃっているんです。これはどうお考えになりますか。

谷口 | 非常に斬新ですよ。建築家のコラボレーションの最初でしょう。

古谷 | そうですね。

谷口 | 当時としては非常に新しい方法じゃないですか。工場などの設計には、建築家はほとんどかわらなかったと思うんです。そういう協働のチームをつかった秩父セメントの計画は、当時としては全く考えられないことをやったわけで、意匠の大学教授と日建設

計工務の人、構造専門の人、それから海外のプラント設計者を集めてチームを組織したことは素晴らしいと思います。

古谷 | その当時の秩父セメントがそれを必要だと考えて招集されたんでしょうね。

谷口 | 本当に素晴らしい。

古谷 | 建設委員会を組織して、生産、機械、輸送、建設の専門家が集まるということだった。もちろんその当時、東工大では水力実験室から始まるいろいろな実験棟もあるし、建築の実績もすでに豊富にお持ちだったから、技術的なものについては、より親しみを感じられたんですかね。他の先生方に比べると。

谷口 | 特に東工大という技術集団としての立場からね。

松隈 | それから、一番初めの著作集に出てくる「分離派批判」という論文がありますね[9]。つまり、芸術至上主義みたいな建築を否定する気持がお強くて、専門家がしてくれる答えにきちんと応える建築じゃなきゃいけないというところは、若い時からすごくあった。

谷口 | あれは当時のひとつの流行みたいなものですかね、「分離派」については…。

松隈 | でもなかなか書けないですよ、24歳で。

古谷 | 谷口先生はその後のセメント工場にまつわる文章では、非常に実用的なプラグマティックなことが纏々と書かれているんですよ。

谷口 | 技術的なことにも非常にこだわって書いています。

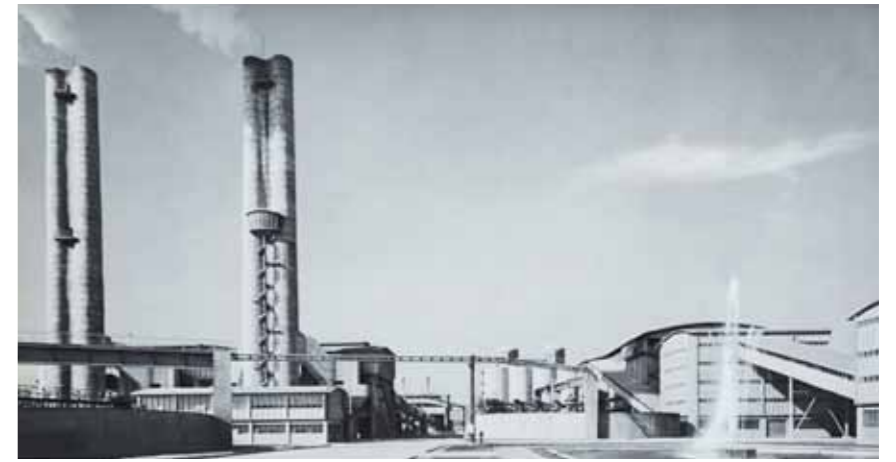
古谷 | でも最後に、そこにあっても造形とか色とかそういうものが必要だと書かれてる。その上でいかに合理的に設計を進めるか…なんですよ。それがとても印象的です。特に、例えば外壁をカーテンウォール化して、それ自体を軽く扱うという話なんかは本当にすごかった。

谷口 | カーテンウォールという言葉を実際に使っているのですか？

古谷 | 使っていらっしゃいます。この「セメント・シンフォニー」の中に「外壁」はカーテン・ウォールとして軽量化をはかり、鉄製サッシに厚肉のスレートがはめこまれた。窓の部分はワイヤー・ガラスで、その窓下に、掃除用の「歩み板」が取り付けられている」と書かれています。

谷口 | 1956年に？

古谷 | そうです。それで歩み板、掃除用のキャットウォークですね、それについても書かれています。理由としては、旧式のセメント工場では窓の掃除がおろそかになっていたと。高い所の窓に行けないから、ここでは、「塵埃がひどいばかりでなく、掃除の施設もあまり考慮されていないことにもよるので、とくに本工場では窓下に鉄製の歩み板を設けて、掃除人の通路および足台としたのである」ということ。そして、僕がなおすぞいと思うのは「外壁が柱よりも外方に突出しているのは、柱の構造寸法を自由にして、サッシの寸法がそれに規定されないためである」。つまり、自由な立面



竣工時の正面から見た外観【出典：『谷口吉郎作品集』】

にする！

谷口 | ミースのシーグラムはいつ頃でしたか？

松隈 | 50年代の後半…でしょうね。

古谷 | シーグラムは1958年でした。これはすごいですね。とにかく、柱から外壁を出すということは、柱の寸法を自由にするために…と書いてありますが、つまり柱とサッシの割付けが自由になることですよね。これを自由にするということは、規格サイズで、イレギュラーなものが入らずに全部つくれるということです。それが明らかにここで意図されていることが分かる。で、同時にそれが柱からカーテンウォールを外に出して懐が出来たので、その懐をいろいろと利用して使えると書いてあります。それに次いで先ほどの「1階の部分は構造を強固にするために、出入口と窓以外の部分には、コンクリート・ブロック、または空洞レンガが柱間に積みこまれている。この場合でも、将来の変更に對しては、壁体の取りはずしが、予め考慮されている」と。すごいですよね。本当に合理的な説明がされているんです。この当時の同時代的な他の方々は、どうですか？

松隈 | たぶん、伝統論争をやっている時期に入っていて、丹下さんが1955年に「美しきもののみ機能的である」というテーゼを出しまして、みんなはちょっと違う方向にいつているんですよ。どちらかという表現に入っていく時期に、谷口先生はそういうところにはいかない。ある種の強い意志を、この文章から読み取れますね。

古谷 | でも、ここまで合理性みたいなものを追求された方はいないんでしょう？

松隈 | そうでしょうね。この2年前に、前川國男が神奈川県立音楽堂をつくるんですが、あれはテクニカルアプローチというアプローチをして、やはり工業化という問題を踏まえながら、ある種の合理性を追求しています。しかし、谷口先生の方が厳格に追求されている印象が強いです。今、この写真集を見ますと、つい先日、ちょっと外観だけ見て思ったのですが、帝国劇場も立面の作り方がすごく似ていますよね。

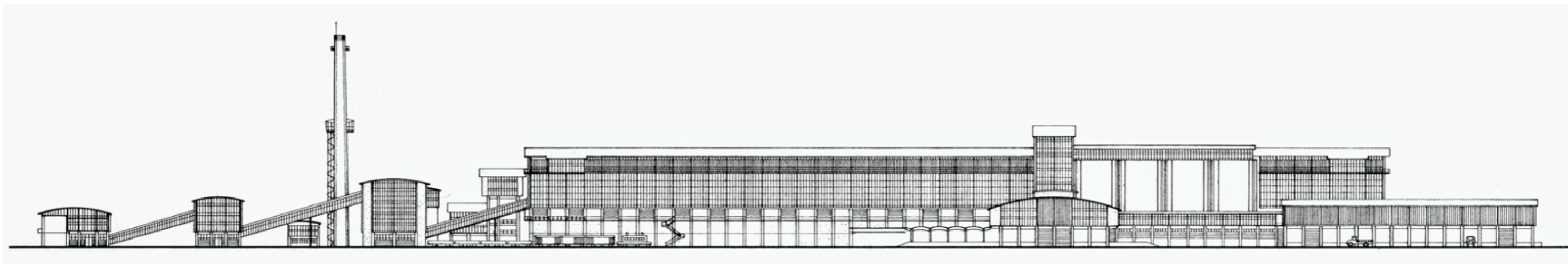
谷口 | そう、似ています。

松隈 | だからやっぱり、すべてに共通して流れているものが、それぞれの要素を自立的に扱いつつ、そこ



帝国劇場【1966】【出典：『谷口吉郎作品集』】

[9] 谷口吉郎「分離派批判」『建築新潮』1928.12



秩父セメント第二工場 東立面図【出典：「谷口吉郎作品集」引込み線側から見た立面。この工場では、複数のヴォリュームの構成が設計のテーマで、横長の原料置場と垂直に立ち上がる煙突による対比的な構成などにそれがうかがえる。工場の機能に対応した構成ではあるが、ヴォリュームが異なるさまざまな施設に一体感が感じられるのは、カーテンウォールの上層が下層より少し張り出して軽快感を出し、その上に薄いヴォールト屋根が載るといふ、谷口好みの意匠でまとめられているからである【解説：藤岡洋保】

一つひとつ合理性を追求するというやり方なんですよね。

古谷 | さらにそれが極まってついに屋根にいくんです。屋根はトタンでつくられるんです。そのトタンは波形成型したトタンでつくるのが合理的である。それから、ここはたまたまセメントの粉塵が舞っているから、基本的に強アルカリなので錆びにくい。ここには向いているだろう。さらにどうしても防水が必要な時には、そこにショットプラストをコンクリートの上に吹いて防水する…と、本当に挑戦的にいろいろなことをされている。

松隈 | そうですね。

谷口 | 1956年という、まだものがあまりなかった時代ですね。

古谷 | 昨日、それがここに書かれている通りに稼働しているのを目の当たりにしました。

松隈 | そうです、そうです。すごいなあと思いました。

かつて美しい寺院を築いたような技術と良心が…

谷口 | 工学的なものを設計することに対するこだわりと、ものとして見えない環境みたいなことを設計するこだわりは、直接的には関連がないのですね。「いかに生産性が高く、耐久性がある工場か」ということと、「清潔で、健康的な工場をつくること」、その辺の関連を当時どうふうにか考えたのか。僕は「セメント・シンフォニー」に書いてあるいろんな工学的なこと、建築技術的なことが求められたのは時代背景から分かりますが、緑とか芝生とか衛生とか、そういう環境的なことを、その時代に誰が求めたか、よく分からない。そういう余裕がなかった時代じゃないかと思うのですよ。

古谷 | そうなんですよね。そこが不思議です。

谷口 | そういうことに理解を示す人が、経営者の中にいたのかどうか。また、そういう計画の方針を実際に「秩父セメント」が打ち出したのかどうか。そのことが知りたかった。

古谷 | 学会賞を取られた時の谷口先生の文章にこういうことが書いてあるんですね【10】。「私たちは機械

時代に生きる技術者として、工場は生産能率の場であると同時に、美しい健康な生活の場であることを心がけて、そのために生産・機械・建築・施行の人々が力を合せ作ったこの上のない嬉しいことであつた」(原文のまま)。これが学会賞を受賞された時のコメントだったんですね。

谷口 | やはり、優れた経営者がいらしたのではないですかね。

古谷 | そうですね。例えば、まだ公害とか産業廃棄物の問題まで、言われていない時代ですよ。昭和30年の初め頃ですから。

松隈 | そういう環境造形みたいな発想はどこからきたのかということですね。

谷口 | 何しろものをつくらなきゃいけない時代だった。環境なんて、悠長なことを言っている時代ではなかったのではないかと。国中で生産性が一番要求される時代に「美しい工場をつくろう、木を植えよう」ということを誰が言い出したか。例えば建築家が言い出したとしても、余計なことだと普通だったら言われそうでしょう。

松隈 | そうですよ。

谷口 | 非常に興味があります。

古谷 | 早速、ネットで調べましたところ、どうやら秩父セメントの諸井恒平さんという人かもしれません。

松隈 | どこ生まれの方でしょうね。意外と藤村記念堂を見ておられたりするのかな。

古谷 | つねへいさんと読む。セメント王と呼ばれたと。まず、日本煉瓦製造株式会社に1887年に勤務して、秩父セメントの前身が、空洞レンガを焼いていた煉瓦工場だと書いてあります。1937年に会長になられて、41年にはお亡くなりになったと書いてあります。ようやく、辿り着きました。時代からすると長男の諸井貫一さんですね。

谷口 | お名前は存じていますが、その諸井貫一さんが素晴らしい方ですか。

古谷 | この方がセメント王のご長男です。

谷口 | そうすると、父は諸井貫一さんから頼まれたということになりますか…。

古谷 | たぶんそうだと思います【11】。

さて、依頼者の諸井さんが分かったところで、先ほどの話に戻りますが、生産性というか合理性の高い工場、あるいは、清潔指向みたいなものもありながら、同時に美しい健康な生活の場であることを心掛けたと書かれていて、僕もそれは読んだ瞬間にすごく今日につながるような、先見性がある考え方だと思ったんです。しかし当時は公害とか水俣病とか、四日市ぜんそくというのは、まだ世の中ではそんなに知られていない。にもかかわらず、このセメント工場では、すでにそこで働く人たちの健康だとか美しい環境ということが提唱されていた。これはやはり卓抜なことだと思えますね。

谷口 | その辺の年代的な関係を考えると、いわゆる環境問題が最初にアメリカで話題になって、例えば車が都市の主役だったのが、いつの間にか悪者になったのは、1960年の初め頃だと思います。その後から社会が次第に環境主導になってきたと思います。セメント工場の計画は、その少し前だったと思いますが、何かのきっかけで世の中が新しい方向に振れていった時代ですね。合理性と必要性に対して、新しく環境問題が加わって時代を先取りした計画です。

古谷 | 「セメント・シンフォニー」の最後の締めくくりが、またもや印象的なんです。「昔の人人は力を合せて美しい寺院を築いた。それには当時の技術が結集している。同時に、その建築には当時の建設的な良心がこもっている。そのために美しい感銘を後世の人に与える」(原文のまま)とあります。かつて人類はいろんな建築をつくってきて、まあ特に、寺院をつくるような時には、その当時のトップ水準のいろいろな技術を結集し、良心を込めてつくった。それが人々に感動を与えた。で、ここではその工場がそれになるものだという。「このセメント工場の建築はこれらの人人が奏するセメント・シンフォニーだと言い得るかもしれない」(原文のまま)と言っている。現在においては、こういう生産施設とか、新しい今日求められる近代的な工場をつくる時も、かつて寺院をつくった時のように…と。すごいアジテーションになっていますよね。

松隈 | 本当にそうですね。

良い施主には良い建築が生まれる

谷口 | 長い建築家としての経験から言うと、当然のことかもしれませんが、最終的に建築の質は、施主に拠るところが大きいですね。良い施主には良い建築が生まれます。建築をつくる時の目的の中に、施主の良心が込められていると、良い建築が出来ると思う。建築家の立場はあまり強くないが、施主には力があるから、プロジェクトが目指す必要性や合理性以外にどういう良心を込めるかということによって、建築の価値を上げることができる。だから諸井貫一さんの貢献は大きいと思います。

古谷 | うーん、そうですね。松隈さん、このセメント工場が後の建築家に与えた影響といますか、どういうインフルエンスがあったでしょう。明らかにひとつの時代を前に進める仕事ぶりだと思うので、大きな影響を与えたのではないかと思います。

松隈 | 当時の学会賞の審査員をちゃんと調べないといけないかもしれないですね。

古谷 | 学会賞の選評はここに出ているんです。評者の名前は書いてありませんけど、選評は出ています。これは学会誌です【12】。「この作品は、秩父市大野原に建設されたもので、設計は谷口吉郎氏を主設計者とした秩父セメント第2工場建設委員会でまとめられている。施工は清水建設・大成建設・戸田組・および安藤組の4社で」と書いてありまして「本工場はそのオートメーション化された生産工程に対応して厳密に配置された、雄大な建築群をまとめ上げることに成功したものである。その配置の厳密さは、工場内を縦横に走り廻るコンベヤーの延長の節約に、1メートルの長さをも問題にする程であったといわれ、また従来のセメント工場の塵埃の問題を、徹底した防塵装置で解決し、清潔感に溢れたセメント工場としての画期的なものとなっている。この工場は巨大な原料置場を中心とした。スケールの全く異なる複雑な建築群である。これらの建築群と、機械そのものを、一つの統一された全体にまで纏め上げた技術は、まれに見るべき域のものであるといえよう」、これが選評です。同じ年にミノ

【10】 谷口吉郎「秩父セメント株式会社・第2工場」『建築雑誌』1957.7
【11】 谷口吉郎「武甲山の山容」『諸井貫一追想文集』[秩父セメント/1969]

【12】 「2.作品について 秩父セメント株式会社第2工場」『建築雑誌』1957.7



谷口建築設計研究所で談笑する谷口氏(中)、松隈氏(右)と古谷氏(左)

ル・ヤマザキさんの神戸アメリカ総領事館と、業師寺厚さんの東京空港郵便局が学会賞の作品賞を受賞しています。

谷口 | 工場の設計について、父がいろいろと書いていますけど、もう少し施主が素晴らしいと書くべきでしたね(笑)。なぜかという、工場というのは、目的とする生産物が工程に従って製造できて初めて竣工になるわけです。工場の設計は、機械とか船みたいなもので、普通、エンジニアが主導であって、意匠を担当する設計者は入らない。それが意匠を担当する設計者を入れた設計チームを編成したということは、素晴らしいことだと思います。

古谷 | プラントですね。

谷口 | プラント設計というのは、デザインや環境など、生産性とあまり関係ないことは重要ではない。そこに“設計者を入れた”ということは特別なことです。

古谷 | プラント技術者だけで、建屋としては必要最低限につくる。

谷口 | そうそう、単に建屋をつくるだけです。

古谷 | 確かにそうですね。例外的に発注者の慧眼があったと…。そういうところは本当に素晴らしいですね。

谷口 | そういう発注者がいつもほしいですね(笑)。

松隈 | 村野さんが晩年にこんなことを言っているんです、「工場も美術館建築なんだ」と。つまり、「人間がいる場所は美術館と全部同じなんだ。人が働いている以上、すべての場所は美術館建築としてつくらないといけない」。何でそんなことを言えるのかというと、自分は小倉の工業高校を出て、八幡の製鉄所に勤めていた。その工場がいかにか非人間的だったかということをよく知っている。工場をつくるのだから、そこに適した美術館と同じものをつくらなければいけない。お金がなくなってしまうんだ、ということをやっているんです。もしかすると、村野さんにお聞きすべきだったかもしれませんが、セメント工場に対しての評価は、村野さんが一番分かったかもしれない。ちょっとそんな印象を持ちました。つまり工場という何とな

く日陰の存在、あるいはそこに働く人たちは劣悪でも良いみたいな印象がある中で、全く逆転することをセメント工場では実現しておられた。それから工場を見学に行って、とても良かったと思ったのは、人のいるところと機械が動いているところをきちんと分けて、働いている人たちの居場所をちゃんとつくっているんですよ。そこは、さっきの自然を取り入れることも含めて、そこで働いている人たちは誇りが持てるし、居心地の良い場所をつくろうということに、ものすごく応えている。実は、この会社の会社案内のパンフレットは、OBの方が撮った写真が表紙になっているんです。すごいですよ、神々しいというか、まさにお寺のような寺院のような雰囲気があるんです。やっぱりそこまで目指しておられたんだと思いました。

「一座建立」とは…

発注者と設計者と施工者

古谷 | ところで、今日どうしても伺いたいと思ったのが、谷口さんが広島市のゴミ処理工場を設計されることになった時の話なんです。それまでは工場は設計されていないですよ。博物館とか美術館とかは多いですが。

谷口 | 最近は建築の種類による実績が問われるようになりましてけど、当時は、設計者の選定で、あまり実績は重視されなかったようです。僕は大学で機械工学も学んでいますが、工場を設計した経験は、全くありませんでした。ある日、広島市の人が事務所にいらして、設計をお願いしたいということで、敷地とゴミ工場のビデオを見せられた。それで「私が工場を設計するのですか」と話したら、葛西の水族園を設計しているでしょう。だから海辺の建築が得意じゃないかと思っただけなんです。

古谷 | なるほど、なるほど(笑)。

谷口 | 「ゴミ工場は困ったな」と言ったら、「博物館や美術館は簡単でしょう。ゴミ工場の設計は大変難しい。建築家だったら難しいものをチャレンジした方がよろしいのでは…」というわけです。それで「よしやろう」ということになったんです。

古谷 | すごいですね。腕まくりさせちゃったんですね(笑)。セメント工場のことも意識されたでしょう？

谷口 | そう。それでいろいろと考えたのです。父のセメント工場の設計のことは、どこか頭の片隅にあったかもしれませんが、やはり広島ということで丹下先生の設計のことを考えました。

古谷 | 広島ですからね。

谷口 | それで敷地を見に行ったら、驚いたことに丹下先生が設定したピースセンターの軸線の真上の場所でした。これは大変なことになったと(笑)。「まず、この軸をどうしても通さなくてはならない」と、それから設計が始まったのです。設計が始まると、これは父も私も同じかもしれませんが、まず、同種同様の建築をたくさん見に行きます。それで多くのゴミ工場を見学し

て研究しました。父がセメント工場の設計した当時とは大きく異なりまして、どの工場設計においても、周辺環境への配慮が最大のテーマになっていました。

古谷 | とりわけてセメント工場のことは考えていらっしやなかったようですね。でも、僕はどこか目に見えないところで、何らかの影響があったんじゃないかなと思っています(笑)。

松隈 | やっぱり、きちんと正攻法で設計を積み上げていって、だけどその先にそれ全部を処理した上で何かを求めるところは、やはり、親子本当に共通しているものがある僕は感じています。

谷口 | 共通しているのは、父の建築も僕の建築も建築の普遍的なことを深く追求することでしょうか。どちらも形や表現は地味ですが。特に僕は建築家の3代目ですから、建築というものの限度は、他の人よりも感じていると思います。例えばデザインの抑制ですかね。あまり時代の潮流に乗ったようなことをすると、将来、自分が変わった時に必ず嫌になる。絵画とか彫刻だったら嫌な作品は隠すことができますけど、建築は永久にそこにある…。

古谷 | 建築の基本を追求するというDNAとして引き継がれていますね。最後に松隈さん、昨日はセメント工場を見学、今日は谷口さんにいろいろお話を伺って、ご感想はいかがですか。

松隈 | 僕は、今回、セメント工場が紹介される中で、今日話をしたようなことが紹介されることによって、この時期に、こういうことを考えていた建築家が存在したということ伝えることは、すごく大事なことだと思いますね。

古谷 | それから専門家たちのコラボレーション。施主も含めてコラボレーション、そういう共同によって成し得るものがあるし、今後ますます重要になってくると思います。それがすでに成されていた。逆に言えば、新しい時代を築こうとする気運が満ちていたからこそ、一丸となれたのかもしれませんが。

谷口 | それから、父がよく話していたことに世阿弥の言う「一座建立」の精神の大切さがあります。発注者と設計者と施工者が一体にならなければ良い建築はできないと。そのような観点からは、理解ある発注者のもとに、建築家が主導し、多くの専門家が加わった秩父セメントの計画は、理想的であつたように思われます。

松隈 | 造形的センスを培う土壌が今、見えなくなっちゃっているということですね。バラバラですよ。

谷口 | そうそう。

古谷 | とても貴重なお話を本当にありがとうございます。

[収録：2014年2月13日]

[取材協力] 谷口建築設計研究所 / 秩父太平洋セメント株式会社 / 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

たにぐち・よしお——建築家 / 1937年生まれ。1960年、慶應義塾大学工学部機械工学科卒業(機械工学士)。1964年、ハーバード大学建築学科卒業(建築学修士)。1964-72年、東京大学都市工学科丹下研究室、都市・建築設計研究所。1979年、谷口建築設計研究所主宰。2008年、日本芸術院会員。
主な作品：資生堂アートハウス[1978]、土門拳記念館[1983]、東京都葛西臨海水族園[1989]、丸亀市猪熊彦一郎現代美術館[1991]、東京国立博物館法隆寺宝物館[1999]、広島市中工場[2004]、ニューヨーク近代美術館[2004]など。

まつくま・ひろし——建築史家・京都工芸繊維大学教授 / 1957年生まれ。1980年、京都大学工学部建築学科卒業、前川國男建築設計事務所入所。2000年、京都工芸繊維大学助教授。2008年より現職。2000年よりDOCOMOMO Japanメンバー、2013年、同代表。工学博士(東京大学)。専門は近代建築史、建築設計論。
主な著書：『建築巡礼35 ルイス・カーン—建築への意志』[丸善 / 1997]、『再読 / 日本のモダン—アーキテクチャー』[共著、彰国社 / 1997]、『日本建築様式史』[共著、美術出版社 / 1999]、『近代建築を記憶する』[建築資料研究社 / 2005]、『前川國男 現代との対話』[編著、六耀社 / 2006]、『建築家 前川國男の仕事』[共編著、美術出版社 / 2006]、『関西モダニズム再考』[共著、思文閣出版 / 2008]、『坂倉準三とはだれか』[王国社 / 2011]、『原発と建築家』[共著、学芸出版社 / 2012]、『残すべき建築』[誠文堂新光社 / 2013]、『美術館と建築』[共著、青幻舎 / 2013]、『建築家 大高正人の仕事』[共著、エックスナレッジ / 2014]など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授 / 1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。
主な作品：アンパンマンミュージアム[1996]、詩とメルヘン絵本館[1998]、早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、ZIG HOUSE / ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院[2002]、神流町中里合同庁舎[2003]、茅野市民館[2005]、高崎市立桜山小学校[2009]、小布施町立図書館「まちとよテラス」[2009]、早稲田大学理工カフェ[2009]、庵庵[2009]、T博士の家[2010]、実践学園自由学習館[2011]、熊本市医師会館[2011]、中河原保育園[2012]、ルビシア滋賀工場[2012]など。

鼎談後記——古谷誠章 工場建築をただの生産工場に終わらせない

長いこと不思議だと思いつけたことがある。ベルリンにペーター・ペーレンスのAEGタービン工場がある。谷口吉郎はドイツに学んだから、当然、影響を受けただろう。秩父セメント第二工場の造形にも、その影響を感じる。そもそも、機能的が優先されるのが当たり前工場の工場に、“造形”が意識されていることこそが両者の重要な共通点だ。しかし、どうしても不思議だったのが、どんないきさつでこんなに美しい工場が生まれたのか、どうしてこのような仕事が建築家に依頼されたのか、だった。鼎談に当たっていくら資料を読んでも、それは分からなかった。『新建築』誌に発表された「セメント・シンフォニー」にこそ、谷口先生の建築家としてのいささか高揚した気分を感じるが、他はエンジニアのような、いたって生真面目な技術的な記述がほとんどであり、このような奇跡的な工場建築が生まれたその出自に触れたものはなかった。しかし、この鼎談中に谷口さんが思い出してくれた、戦前セメント王と呼ばれた創業者・諸井恒平氏のご長男、貫一氏の存在があったからこそ聞いて、ようやく分かった。良い建築が生まれる背景には、必ず良いクライアントとの出会いがある。「建主の良心が込められていると、良い建築が生まれる」という谷口さんの言葉には、実感が込められていて説得力があった。それが結果として、竣工後ほぼ60年を経てなお壮健に稼働中であり、懇切に案内をして下さった工場の方々、この建築を今でも誇りに思い、慈しまれている様子に如実に現れている。長年の念願叶って初めて見学したセメント工場は、技術の進歩と共に改修や変更が加えられているが、全体の佇まいは全く写真で見るとのものと変わりがなかった。鼎談では歴史家の松隈さんが、なんと谷口さんも見たことがなかった谷口先生の学生時代の記念写真や、卒業設計の図面を“発掘”して見せてくれた。写真には東京帝国大学で同窓の前川國男、岸田日出人ら、そうそうたるメンバーが顔を揃えていて、とても壮観だ。どの顔にも日本の新しい時代をつくる意志がみなぎっている。このセメント工場からも、戦後の復興期に、あるいは復興期を経たからこそ、機能優先である工場建築をただの生産工場に終わらせず、働く人々にとっての清々しい生活の環境を実現しようとした、建築家としての倫理観を強く感じる。

谷口さんの広島市の清掃工場にも、僕はこれに通じるものがあると確信する。市民が海に向かって通り抜けるガラス張りの空間から、稼働する工場内部がよく見通せるよう、なんとプラントのキャットウォークのすべてのグレーチングの目が、視線の抜ける方向に揃えられていた。これもただの工場ではない。

リユート奏者・ つのだたかしの巻

Tsunoda Takashi

中村好文：文、イラスト
Yoshifumi Nakamura



先日、久しぶりに大学時代の友人たちと居酒屋で会いました。しばらく雑談に興じていましたが、ふと、友人のひとりが真顔になってこう言いました。

「最近、俺ねえ、自分の生涯を振り返ってみて、ああ、あのことは結局モノにならなかったなあ、と思うことがあるんだけど、みんなはそういうこと、ない?」。

そして、その友人は、社会人になってから英会話をマスターしようといくつもの英会話スクールに通って勉強していたと打ち明けました。しかし、結局、その英会話をマスターできず、悔しく思っていると言うのです。「今さら、どうにもならないけどさ」と、寂しげに笑いながら。

そう言われてあらためて自分の来し方を思い起すと、ありました、ありました、私にもそういうことがいくつもありました。そして、そのことが苦い挫折感とともに心の底に淀んでいたことに気づいたのです。

たとえば、子供のころから音楽が好きだった私は、なにか楽器(それも、できれば古楽器)を、巧みに演奏できるようになりたいというひそかな願望を持っていました。でも、2年間ほど個人レッスンを受けていた縦笛も、結局、モノになりませんでしたし、教本と睨めっこで自己流に練習していたクラシックギターも途中で投げ出してしまいました。ギターを始めたころは、まず、クラシックギターをある程度弾けるようにしてから、しかるべき先生に弟子入りしてリユ-



左一遊歩道を歩く人の視線からちょっと外れた位置にある玄関。左右の袖壁と大きな庇に覆われている | 右一幅が180センチある広々とした廊下と玄関ホール。手持ちの本棚がまるで眺えたようにピッタリ納まっている



廊下からステップを2段降りたところにある食堂と居間。東南に広々とした庭を望む居心地の良い部屋。窓際の椅子はデンマーク製で、つのださん愛用の昼寝椅子

トを学ぼうと夢見ていたのですが、肝心の基礎となるギターがモノにならなかったため、夢ははかなく消え去ってしまいました。そんなわけで、20数年前、友人宅のホームコンサートでリユート奏者のつのだかしさんの演奏を間近に聴いたときは、羨望を乗り越えて、嫉妬の炎が胸を焦がしました。ところが、演奏後のパーティでつのださんが無類の歌好きで、専門の古楽以外に、昭和歌謡やオールディーズのヒット曲に精通していることと、興が乗ればそのたくい（たぐい）の歌をこぶしを効かせて披露してくれることが判明したとき、羨望と嫉妬は雲散霧消し、一方的に「同じ穴（むじな）の貉」的な親近感を覚えたのでした。そのときから私とつのださんとの愉快的付き合いが始まりました。やれやれ、また前置きが長くなってしまいました。今回の訪問先はそのつのださんのお宅です。

つのだ夫妻の家は、東京の西郊、西武多摩湖線の沿線にあります。住まいが桜並木の遊歩道に面していることと、あたりに緑地が多いため、どことなくまだ武蔵野の面影も残っています。古楽器の演奏家の住まいとしては理想的な環境かもしれません。8年ほど前、つのだ夫妻はこの場所に建っていた古家（ふるや）を買い取り、全面的な改修工事をして住まいと仕事場にしました。古家と書きましたが、もともとあった家は40数年前に建てられた質素な（というより粗末な）造りで、間取りが今の暮らし向きでないのは仕方がないとしても、部分的に壊してみると、土台と柱の下部がシロアリにやられて大きく欠損していたり、屋根にも壁にも床にも断熱材が入っていなかったり、必要な箇所に柱がなくて、ただでさえ貧弱な梁に荷重がかかり過ぎているなどの構造的な欠陥があったりして、家としては間取り的にも、構造的にも、性能的にも問題だらけでした。このため、改修は文字通り「基礎からやり直す」大規模な改修工事になりました…と、ここまで書いたらもうお察しただけですね。この改修設計と工事監理は私の事務所で手がけました。

工事内容をもう少し正確に言えば「増築」と「改築」ということになります。どんな増改築だったかは、図面（38頁）を参照していただければ一目瞭然ですが、工事は建物の仕上げ材や間仕切り



こじんまりしたレッスン室でリユートを奏でるつのださんと演奏に聴き入る私。なんとも贅沢なマンツーマン・コンサート

をすべて取り払い、いったん柱と梁の骨組み状態にして、現状の問題点を総点検するところからスタートしました。新築工事は事前に図面や模型でじっくり検討してから現場に乗り込むことができますが、改修工事はそういうわけにはいきません。現場で次々に発覚する問題点や不測の事態に臨機応変に対応し、即断、即決して工事を進めなければなりません。音楽にたとえると、楽譜通りに演奏するクラシック音楽ではなく、ジャズのセッションのように、その場の気分にあわせて演奏をアドリブで演奏していく反射神経とセンスが必要なのです。理屈をこねる前に体と手が動く実務的（実用的といってもいいと思います）なタイプが向いているということになるでしょう。

改修後の新居には、居間、食堂、台所、水まわりと、寝室ふたつ（主寝室と息子さんの部屋）など、いわゆる住宅としての用途のほかに、リユートを演奏するレッスン室と、奥様の主宰している音楽事務所のオフィスが必要でした。1・2階合わせて32坪の床面積にこれだけの用途を盛り込むのは至難の技ですから、しばし腕組みして天井を睨んだり、現状の平面図を眺めて腕をさすったりしていますと、「予算が限られているので贅沢は言えないけれど…」と、一応、遠慮がちにそぶりを見せつつ、つのだ夫妻から具体的な要望が出てきました。分かりやすく箇条書きにすると次のようになります。

1. レッスン室は演奏に集中できるように静謐な空間にしたい。
 2. 楽器を置けるスペースがたっぷり必要。
 3. 料理好きで夫婦揃って台所に立つので「それなりの広さ」が望ましい。
 4. 食器が沢山ある上、これからも増えそうなので食器の収納を充実させたい。
 5. 大人数の来客に備えて居間・食堂は大らかな空間だと嬉しい。
 6. その大らかな空間に、ときおり大人数が集まって楽器を奏でたり高歌放吟したりするので防音に配慮して欲しい。
 7. だんだん歳を取ることで2階の寝室に上がる階段の勾配はできるだけ緩やかに。
 8. 玄関の靴収納の充実。
 9. ゆったりした洗面台まわりと、湿気のない浴室。
 10. 勝手口があるととにかく便利そうね。
- まだ、そのほかにも色々あり、最後に…「工事費は格安に!」というドメの要望がついていました。

あらためて要望のひとつひとつを読み返すと、コンサートなど演奏活動以外は家にいる時間が長く、日々の暮らしを大事にするつのだ夫妻ならごくあたり前の要望ばかりで、どれもこれも無理難題というわけではありませんでした。ただ、それらを限られた面積と、限られた予算の中におさめるのがたやすくなっただけ

で…。中でも要望・5の「大らかな空間」を現状の床面積から捻出するのがちょっとした難問でした。あれこれ悩んだあげく、結局、庭側に6畳分ほど下屋のかたちで増築することで解決しました。そして「大らかな空間」を実現するためにその増築部分を含む居間・食堂の床全体のレベルを1階のほかの床から30センチほど下げることで、ゆったりした天井の高さを確保しました。

はっきり意図したわけではありませんが、できあがってみると、玄関から真っ直ぐに伸びるホール的な廊下を辿り、大きな回転ドアを開け、右斜めに回り込んだところで緩い階段を踏みしめて居間に降りていくシークエンスの変化が、ちょっと芝居がかっていて、空間の繋がりとして面白くなったように思います。別な表現をすると、この一連の「道行き」で、意識が居間に流れ込んでいく感じになり、この家ならではの長所が生まれたのです。

じつはこうしたことは、改修工事が終わってからも、私がことあるごとにこの家を訪れていて気づいたことです。そして、同じように気づいた中で一番大きなこと、一番大切なことは、この家が、つのだ夫妻によって上手にこなされていることかもしれません。家が、つのだ夫妻の暮らしの体型と生き方の姿勢にフィットしてきて、誰のモノでもないつのだ夫妻の「住まい」になっているように感じるのです。そして、そのことを感じるにつけ、つくづく家というのは、そこに住む人たちの暮らしのための容器だと思っています。私は若い建築家向けの講演会などで、「住まいには、住み手の人柄と生活習慣と趣味嗜好のすべてが、あますところ詰まっているものだ」と言ったり「そこに住む人の全人格、全人生を、まるごと放り込める容器のことを住まいと呼ぶのだ」と話したりしますが、つのだ夫妻の暮らしぶり、住まいぶりを見ていると、そのことをひしひし感じるのです。

おそらく写真からその雰囲気を感じていただけたと思いますが、つのだ夫妻は、自分たちが日々愛用している食器や、日常的に楽しんでいるDVDやCDや、大切にしている絵画や彫刻やアンティークの品々や、愛読書や楽器のコレクションを、家の中のしかるべき場所に、自分たちの好みのやり方でしつらえて、いかにも居心地良さそうに、愉しそうに暮らしています。

自分の手がけた家をそこに住む人たちが、慈しみ、愛おしみながら住みこなしているのを目のあたりにすることぐらい嬉しいことはありません。私が「建築家冥利につきます」という言葉を実感をもって噛みしめるのは、こういう家を訪問するときです。

なかむら・よしふみ——建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、栄道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品：三谷さんの家[1986]、REI HUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書：『住宅巡礼』[新潮社／2000]、『住宅読本』[新潮社／2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社／2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ／2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版／2010]、『建築家のすまいぶり』[エクステルジ／2013]など。

【撮影：相原功】



居間から食堂と台所方向を見る。左手に廊下から降りてくるステップが見える



左—食卓の上に見える大梁は新たに差し替えたもの。この梁だけでなく構造材を何本も追加したり差し替えて耐震性を上げている。右—居間・食堂と廊下を仕切る大きな回転扉は軸吊りで、90度開くと扉の両側を通ることができる



緩やかな勾配の階段。備えあれば憂い無し！改修後、数年経ってから手摺りも取り付け



左—廊下から食堂を見る。ステップを降りる手前左側にゆったりしたキッチンがある。右—部屋のあちらこちらにつのだ夫妻のコレクション（お宝？）が飾られていて、訪問者の眼を楽しませてくれる

賑わい空間を創出する 「うめきた」の まちづくり

JR大阪駅北側、かつて梅田貨物駅として使われた約24haの土地は、公募により「うめきた」と命名され、都心に残された最後の一等地と言われる。その約7haに、大規模な商業施設、オフィス、ホテル、マンションを備えた「グランフロント大阪」がオープンしたのが2013年4月。JR大阪駅を含め周辺地域のビルの建て替えが進む中で、ひととき規模の大きいプロジェクトだ。

この開発は、関西の今後の発展にかかわる重要プロジェクトとされ、まちづくりの5つの柱「世界に誇るゲートウェイづくり」、「賑わいとふれあいのまちづくり」、「知的創造活動の拠点づくり（ナレッジ・キャピタル）」、「公民連携のまちづくり」、「水と緑あふれる環境づくり」を掲げ、新しい魅力づくりに取り組んでいる。

残る約17haの「うめきた2期区域」は、世界に誇る“大阪の顔”となることを目指して、緑豊かなオープンスペースとなる。広く民間から提案を募集し、これまでにない斬新なアイデアを採用していく予定だ。

開業1年で来場者延数が5,300万人を突破した「グランフロント大阪」を中心に、今最も注目を集めている「うめきた」のまちづくりを紹介する。

北梅田から大梅田へ 「うめきた」の将来構想

橋爪紳也

Shinya Hashizume
大阪府立大学21世紀科学機構教授・大阪府立大学観光産業戦略研究所長

価値を創造する都市

「グランフロント大阪」は、JR大阪駅の北側、「うめきた」と称される再開発地域の先行開発区域に開業した施設群の総称である。その名称には、大阪の新しい玄関口にふさわしい「世界に開かれた最前線のまちであり続けたい」という想いが込められている。

「グランフロント大阪」では、複数のオフィス棟に加えて、商業施設や会議場、ホテル、超高層住宅などの都市機能を重層的に集積しつつ、立体庭園を有する大街区に収めている。日本が産み出した大都市型の“コンパクトシティ”の現時点における到達点を示すものだ。なかでも特徴的な導入機能が「ナレッジキャピタル」である。ここでは産学官の連携によって“感性”と“技術”の融合による“新たな価値”を創出し、今までにない商品やサービスを創造する場となることを目指す。

「未来が生まれ、大阪が変わり、時代が動き出す。…江戸時代の適塾や懐徳堂を例にあげるまでもなく、世界に目を向け、すぐれたものを取り入れ発信してき

期にかけて、市街地の周辺部に立地した大規模工場や駅の跡地である。大阪駅北地区、すなわち「うめきた」と呼ばれる用地も、梅田貨物駅跡であった。再開発の端緒は国鉄民営化がされた1987年にさかのぼる。国鉄清算事業団が梅田貨物駅の機能を吹田操車場跡地に移転して、跡地を売却する方針を示したのだ。民放テレビ5局を集める「メディアシティ・フォーラム」などの案が議論された時期もあるが、吹田市の反対によって計画は遅れる。ようやく1999年になって、機能の半分を大阪市内の百済貨物ターミナル駅に移すことを前提に、2010年度に貨物機能を移転する方向性が示された。

2002年、大阪市は大阪駅北地区のコンセプトを世界から募集する国際コンペを実施し、2004年に「大阪駅北地区まちづくり基本計画」をまとめる。先行開発区域である図中のA、B、C地区が、三菱地所、オリックス不動産を代表とする9社のグループに売却されたのは2006年のことだ。そして2013年になって、先行開発区域である「グランフロント大阪」が開業した。

国鉄の民営化からおおよそ四半世紀が経過して、ようやくプロジェクトの前半部分が完了したかたちだ。同様に操車場の跡であった東京汐留地区の再開発の進捗と比べると、余分に時間を費やしている。その分、公民連携によるエリアマネジメントの仕組みを導入する点など、新たなまちづくりの発想が取り込まれたと見ることができる。

対話型のマスタープラン作成と 大阪版 BID

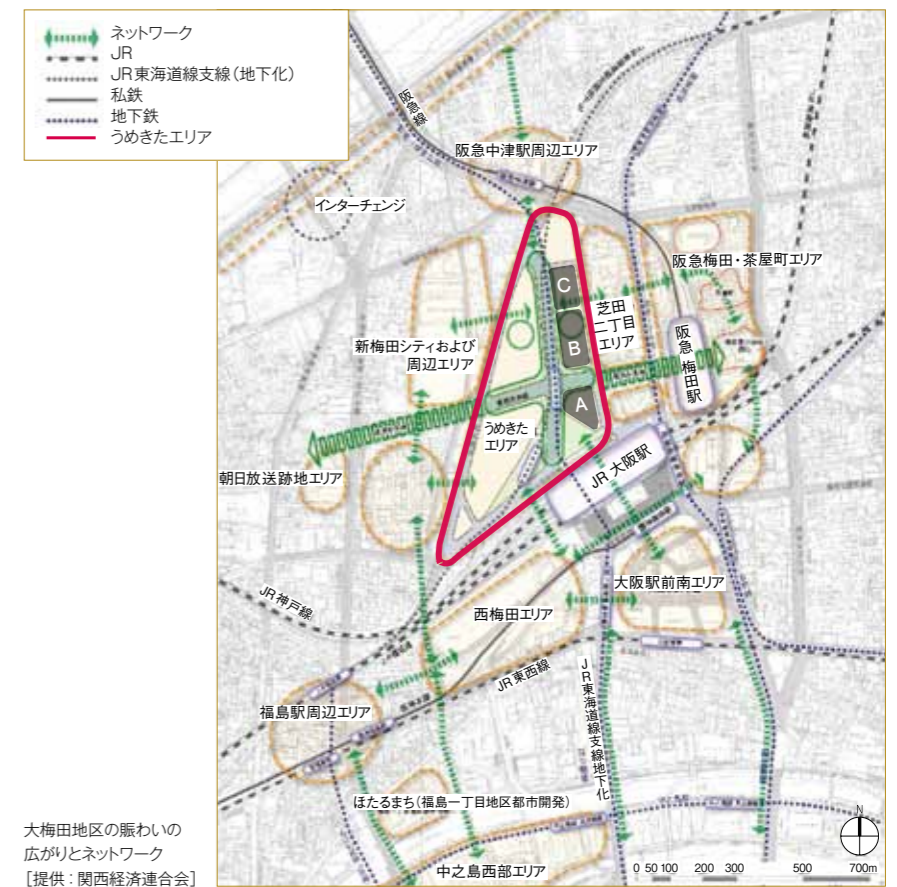
今、先行開発区域である「グランフロント大阪」に続いて、約17haの広さを有する「うめきた2期区域」の事業が動き出している。大阪市は「都市再生緊急整備協議会」と、産学官で構成する「大阪駅周辺地域部会」を設置した。部会では民間からの提案を募り、選定された事業者との対話を通じてプランを策定する方向性が示された。従来に

ない“みどり”の空間を創出するという前提のもと、まずプロポーザルを経て民間事業者を絞り込み、対話の上で最終的なコンペの要綱を定めるという“対話型”のマスタープラン作成が試みられることになる。土地を保有する独立行政法人「鉄道建設・運輸施設整備支援機構」が既存施設を撤去する2年の猶予期間中に、最善の活用策を官民で考えようというわけだ。

また「うめきた2期区域」の事業においては、「グランフロント大阪」に導入されたエリアマネジメントの考えを発展させ、周辺の地権者が運営費用を負担する BID（詳細は57頁）の導入に向けた議論がなされている。BIDは米国や英国など諸外国の都市再生に採用された制度である。ニューヨークのタイムズスクエアやブライトンパークなど各地に成功事例がある。しかし日本ではまだ法制度化がなされていない。“大阪版BID”が具体化すれば、対話型のビジョン作成と併せて、我が国の再開発事業にあって、その方法論においても画期的な先例となるだろう。

大梅田構想 都市のリノベーションに向けて

「グランフロント大阪」の開業は、ハービス OSAKA、大阪サンケイビル、大阪富国生命ビル、阪急百貨店梅田本店、大阪ステーションシティなど、近年、JR大阪駅周辺で進められてきた建て替え事業と相まって、従来、「梅田」と呼ばれてきたエリアの機能を高度化させた。要するにJR大阪駅を取り囲むように再開発プロジェクトが連鎖し、エリア全体が大きく姿を変えたわけだ。もっともこの動きは、まだ道半ばである。今後数年から10年以内に、「うめきた」の2期事業の進展に加えて、大阪中央郵便局や大阪神ビルの建て替えなど、超高層ビルのさらなる建設が見込まれている。さらに将来、「うめきた」の西側や北側のエリアにも再開発の動きが起こることだろう。機能がより充実し、拡張された未来の



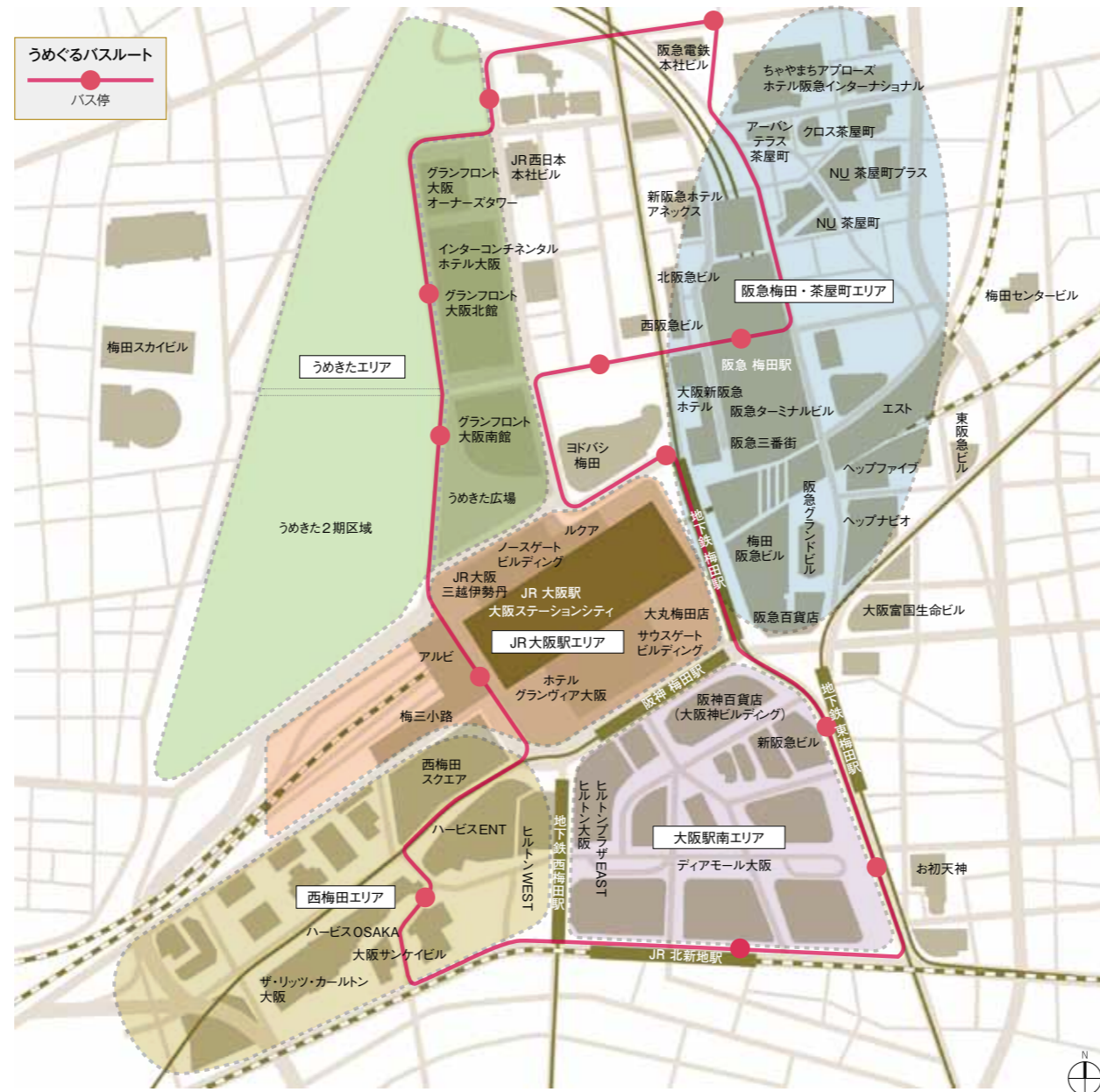
大梅田地区の賑わいの広がりネットワーク
[提供：関西経済連合会]

「梅田」エリアは、仮に「大梅田」と呼ばれている。関西経済連合会の研究会において、「大梅田ランドデザイン」が作成されたのは2007年11月のことだ。7駅が立地し12路線が乗り入れる梅田エリアは、言うまでもなく傑出した交通の利便性と商業施設の集積を誇る。現状でも、1日に約250万人もの乗客が往来する西日本最大のターミナルである。このポテンシャルを最大限に活かすべく、整備されつつある新街区と既存街区の調和を図って、「大梅田」のビジョンがまとめられた。そこでは人を中心とした歩行者ネットワークの形成や、広域交通体系における中枢拠点機能強化、機能の複合化により多面的に交流を生み出す街区の創出、環境共生都心の創造などが強調されている。

はしづめ・しんや——大阪府立大学21世紀科学機構教授・大阪府立大学観光産業戦略研究所長／1960年生まれ。京都大学工学部建築学科卒業、同大学大学院工学研究科修士課程、大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。建築史・都市文化論専攻。工学博士。大阪府立大学21世紀科学機構教授・大阪府立大学観光産業戦略研究所長・大阪市立大学都市研究プラザ特任教授・浙江大学客員教授。創造都市や都市文化施設、盛り場や商業施設にかかわる総合的な研究を展開。また各地で観光政策の立案、市民参加型のまちづくり、地域ブランディング、イベントプロデュースを実践。大阪府特別顧問・大阪市特別顧問・イベント学会副会長・大阪商工会議所都市再生委員会副委員長・大阪府文化振興会議会長ほか。主な著書：『倶楽部と日本人』[学芸出版社／1989]、『日本の遊園地』[講談社／2001]、『集客都市』[日本経済新聞社／2002]、『モダン都市の誕生』[吉川弘文館／2003]、『飛行機と想像力』[青土社／2004]、『大大阪モダン建築』[監修、青幻舎／2007]、『明治の迷宮都市』(ちくま学芸文庫) [筑摩書房／2008]など。

「うめきた」は、単なる貨物駅の再開発事業ではない。従来は“駅裏”だと意識されてきたエリアを“表”に転換する先導役となるとともに、駅を挟んだ南北エリアの一体化を促進し、梅田エリア全体のリノベーションを図る上でのトリガーとなるプロジェクトである。東京だけではなく、今後、日本の各都市は、東京五輪が開催される2020年を目標として、従来の都心の“再都市化”、いわば“アーバン・リニューアル”に向けて動き出す。「梅田」から「大梅田」に遷移しつつあるJR大阪駅周辺の事業は、先行するモデルのひとつとなることだろう。他の再開発地区の後塵を拝しつつ、四半世紀をかけてようやくかたちを見せつつある「うめきた」のプロジェクトは、一周遅れで時代の先端となる可能性を秘めている。

大規模プロジェクトで変わるJR大阪駅周辺



- 1 Granfront大阪：うめきた先行開発区域プロジェクトとして、梅田貨物駅跡地24haのうち東側約7haを開発。商業、オフィス、ホテル、住宅を含む4棟の高層ビルが2013年春にオープンした。大阪の新しい玄関口にふさわしい「世界に開かれた最前線のまち」を目指す
- 2 うめきた2期区域：Granfront大阪より梅田スカイビル方面を望む。17haの広大な土地が、今後の開発を待っている
- 3 大阪ステーションシティ「時空(とき)の広場」：1日に250万人が乗降し、7駅12路線が乗り入れる西日本最大の拠点・JR大阪駅が、百貨店、専門店、レストラン、オフィス、などさまざまな機能を集積させ、大阪ステーションシティとして、2011年5月に開業。南北をつなぐ5階の「時空(とき)の広場」は、まち全体の回遊性の核となるよう、定期的にイベントを開催し、賑わいをつくり出している【提供：大阪ターミナルビル株式会社】
- 4 西梅田スクエア：大阪中央郵便局舎の建物の老朽化から2012年に取り壊し、現在はイベント広場になっている。今後は郵便局以外に、劇場やオフィス、商業施設などが入った高層ビルが計画されている。旧局舎(吉田鉄郎設計)の正面玄関部分は保存され、新しい建物に取り込まれる予定

- 5 うめぐるバス：Granfront大阪の開業に合わせて、梅田地区を巡回する「うめだ、ぐるっと、めぐる」「うめぐるバス」が運行を開始。レンタサイクル「うめぐるチャリ」も設置されるなど、新しい交通サービスで歩いて楽しむまちを目指している。バスは大人100円、子供50円。一日乗車券は大人200円、子供100円
- 6 クロス茶屋町：北山孝二郎設計で、第27回大阪まちなみ賞を受賞した「アーバンテラス茶屋町」(2006年竣工)の隣に、「新・旧の融合」をテーマとした「クロス茶屋町」が2011年にオープン。隣接する公道よりも広い幅員6mの通り抜け空間をつくり、まち全体の回遊性を高めている
- 7 茶屋町界隈：茶屋町に立地する商業施設「NU茶屋町」(写真左、2005年竣工)に続き、2011年に高層マンションを備えた「NU茶屋町プラス」(写真右)が対面に完成。茶屋町の路面性を施設内に取り込んだ設計で、回遊を楽しめる施設となっている
- 8 大阪ステーションシティ：左手が大阪ステーションシティ「サウスゲートビルディング」で、ホテルグランヴィア大阪や大丸梅田店などが入っている。中央奥は梅田阪急ビルで、地上41階のオフィスタワーを備え、2012年11月に阪急百貨店梅田本店の新店舗が全面開業した。今後は、隣接する阪神梅田本店の建て替えも予定されている

大阪の新しいまち「グランフロント大阪」 都心におけるエリアマネジメント

廣野 研一

Kenichi Hirono

三菱地所株式会社大阪支店副支店長・一般社団法人グランフロント大阪TMO事務局長

「グランフロント大阪」誕生から1年

2013年4月26日、JR大阪駅北側に新たなまち「グランフロント大阪」が誕生しました。大阪の玄関口に誕生したこの新しい「まち」は、梅田貨物駅跡地である全体約24haの都市再生特別地区「うめきた」のうち、東側約7haの土地を先行開発区域として、「関西の再興」という社会的な使命のもと、開発事業者12社が総力を結集し、推進したプロジェクトです。

この開発の推進に当たっては、2004年に「大阪駅北地区まちづくり推進協議会」が発足し、開発の意義・方針が産官学の代表により協議され、同年、開発の方向性として大阪市により「大阪駅北地区まちづくり基本計画」が策定されました。その基本方針に基づき、我々開発事業者12社、設計会社、施工会社各々が持つ知見、ノウハウを結集して、関西の再興の一翼を担うプロジェクトの計画検討を重ね、事業を推進したもので、2004年から約9年の月日を経て、まちびらきを迎えたプロジェクトになります。

ゆとりある空間の点在が特徴

施設構成としては、JR大阪駅側から、「うめきた広場」、「南館(タワーA)」、「北館(タワーB・C)」、「オーナーズタワー」という大きく4つのゾーニングで構成されます。このまちの中核施設である知的創造拠点「ナレッジキャピタル」を始め、ターミナルの立地としては国内最大級となる266店舗が集積した商業施設・ショップ&レストラン、関西最大級のオフィス、新しいスタイルのラグ

ジュアリーホテル・インターコンチネンタルホテル大阪、525戸の分譲マンション「オーナーズタワー」という衣食住遊の機能を備えた複合施設です。

これらの複合機能に加えて、都心立地にありながら、都会の喧騒を忘れてゆとりくつろいでもらえるよう、ゆとりがあり、水と緑があふれる空間を整備し、自然と人が集まり、賑わいと触れ合いを促進する建築空間となっています。まちの中にせせらぎがあり、豊かな緑の木漏れ日の下で散策し、立ち止まっておしゃべりする、そのような賑わいが生まれたらという思想から、植栽・水景施設を整備しています。

その代表的な空間が、JR大阪駅前に広がる約10,000㎡の広大な憩い空間「うめきた広場」です。デザイン監修として建築家・安藤忠雄氏も参画し、周囲の水景施設から浮かび上がるよう楕円広場・大階段が特徴的な空間です。敷地西側を南北に貫く約500mの歩道には、シンボルとなる3列植栽の「いちよう並木」を配するとともに、せせらぎを感じながらお散歩を楽しんでいただける水景を設えています。また、立体的な緑の空間として、北館の北側には約4,000㎡の庭園「ザ・ガーデン」、南館と北館の9階には合計10,000㎡を超える屋上庭園「テラスガーデン」を設けています。

オープンスペースを活かしたまちづくり

2013年4月26日のまちびらき以降、大変多くのお客さまにお越しいただき、約10ヵ月後の2014年2月末時点で来場者延数は4,600万人を突破し、連日



うめきた開発区域図 [提供: グランフロント大阪 TMO]

活況を呈しています。これは、皆さまの期待の表れだと受け止めています。

一方で、建物(ハード)は一度つくり上げると大きな機能更新は難しいことから、まちの魅力維持・向上には、エリアマネジメント(ソフト)による常に新しい情報発信・プロモーションによる進化が必要不可欠と考えています。“まちをつくる”フェーズから“まちを育てる”フェーズを推進する組織として、まちの一体的な運営を担う「一般社団法人グランフロント大阪TMO」(以下、TMO)を2012年5月に、開発事業者12社により設立しました。

TMOは、官民や周辺地権者と連携したまちづくりを進める一方で、まち全体のプロモーションを担ったり、まちのオープンスペースを活用し、まちのブランディング、付加価値向上を図る組織として、大阪市が所有する公共用地をTMOが管理・運営を行うという“新しい公共”のモデルケースになります。もともと、公共用地の利活用には制約されている事例が多いですが、この「うめきた広場」では、公民連携による先進的な取り組みとして、3Dプロジェクションマッピングやビアガーデン、小学生の体力

向上を目的とした運動会、「梅田ゆかた祭(盆踊り)」の開催など、さまざまな催事を展開しています。

また、南館と北館の間を横断する「けやき並木」は市道に当たるため、本来、営利店舗の設置はできませんが、2011年の都市再生特別措置法改正により創設された「道路占用許可」の特例制度を活用し、東京・新宿に次ぐ全国2例目となる、公道上でのオープンカフェの営業や広告事業が認められています。広告は行政・学識経験者と共に「景観ガイドライン」を策定し、自主審査の枠組みを構築しました。このような公民連携によるエリアマネジメントの取り組みにより、幅広い層の方々に楽しんでいただ

けるまちづくりを進めていきます。

エリアマネジメントを梅田地区全体に拡げる

この“まちを育てる”エリアマネジメントの取り組みは、梅田地区全体においても展開しています。梅田の各エリアをつなぐエリア巡回バス「うめぐるバス」、レンタサイクル「うめぐるチャリ」も運営しています。さらに、梅田地区の競争力、集客力、地域力を高めることを目的として、大阪・梅田地区で大規模再開発を行っている西日本旅客鉄道株式会社、阪急電鉄株式会社、阪神電気鉄道株式会社と我々TMOの4社で、「梅田

地区エリアマネジメント実践連絡会」を2009年11月に設立しました。

まず、まちづくりの方向性を共有し、まちのブランド価値“まちの質”を高めていくため、①駅から拡がるまちづくり、②歩いて楽しいまちづくり、③新しい時代のまちづくり、の3つを活動コンセプトとし、「コンセプトブック」を2011年10月に作成しました。エリア全体の魅力と集客力の向上を意識し、互いに進めることで、持続的なまちの発展を図っていくという考えに立ったものになります。

具体的な活動としては、夏には「梅田ゆかた祭」(2012年より毎年開催し、過去2回開催)、冬には「梅田スノーマンフェスティバル」(2010年より毎年開催し、過去4



グランフロント大阪全景: 2013年の開業時、敷地西側より全景を望む。手前は「うめきた2期区域」 [提供: グランフロント大阪 TMO]

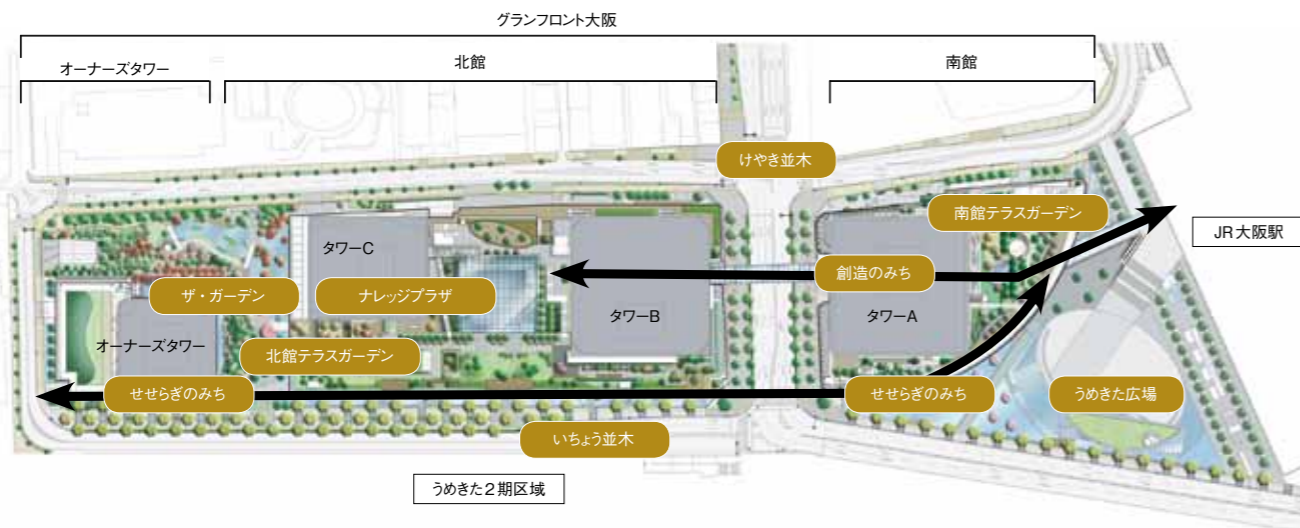
回開催)という地域活性化のイベントを開催しています。「梅田ゆかた祭」では、浴衣という日本が世界に誇る文化と打ち水という日本古来のエコ活動をテーマに、地域の商業施設と連携してイベントを開催しました。「梅田スノーマンフェスティバル」では、梅田地区全体をスノーマンの装飾や音楽ライブなどでクリスマスモードを演出してエリアの回遊性を高めるイベントを実施しています。

“まちづくり”は、竣工後が本当の始まりであり、エリアマネジメントは日本の魅力を高めるための切り札であると考え

ます。“多くの人々や感動との出会いが新しいアイデアを生む”まちの実現のために、官民協調しながらエリアマネジメント活動を進めていきたいと思っています。

ひろの・けんいち——三菱地所株式会社大阪支店副支店長・一般社団法人グランフロント大阪TMO事務局長／1960年生まれ。1983年、三菱地所株式会社入社。1989年、同都市計画事業室。1997年、大手町・丸の内・有楽町再開発計画推進協議会(大丸有協議会)事務局次長。2001年、同事務局長。2008年、大丸有エリアマネジメント協会理事。

- 1 グランドフロント大阪北館テラスガーデン：9階から梅田の西側を一望できる憩いの場
- 2 いちょう並木：約500mにわたりイチョウを植栽。幅9mの「せせらぎのみち」と幅11mの公道による計20m幅の歩行者沿道空間となっている
- 3 せせらぎのみち：水都大阪をイメージした水景
- 4 うめきた広場：JR大阪駅北口とグランフロント大阪南館を結ぶ約10,000㎡の駅前広場。公共用地を民間の開発事業者12社が計画、整備、運営する“新しい公共”のモデルケースとして、質の高い維持管理を実施。イベントを催し地域交流の場としても賑わう
- 5 創造のみち：JR大阪駅からグランフロント大阪南館・北館を貫く、開放的な吹抜けの歩行者モール
- 6 The Lab. みんなで世界一研究所：分野を超えた交流から新たな価値の創出を目指す知的交流拠点・ナレッジキャピタルに入る施設のひとつ。企業や大学などの最先端の技術・活動を分かりやすく紹介する展示エリアで、実際に体験もできる
- 7 グランフロント大阪北館1階のナレッジプラザでのイベント風景：生産者が集まりこだわりの食材を販売した「Umekikiマルシェ」。ナレッジプラザでは、さまざまな交流イベントが催される
[提供6・7：グランフロント大阪]



グランフロント大阪配置図：グランフロント大阪では公民連携による都市空間マネジメントを実践し、人々が集えるさまざまなオープンスペースを設けている【提供：グランフロント大阪TMO】





8



9



10

8 梅田ゆかた祭：2012年からスタートした梅田の夏のエリアイベント。2回目の2013年にはうめきた広場での盆踊りも実施。約4,800人が参加して楽しんだ

9 梅田スノーマンフェスティバル：2010年からスタートした梅田の冬のエリアイベント。まち歩きを楽しめるよう梅田の各所に音楽ライブやワークショップなどの会場を設置。梅田地区エリアマネジメント実践連絡会だけでなく、大阪市なども主催に入り、年々規模を拡大している

[提供8・9：グランフロント大阪]

10 沿道店舗によるオープンカフェ：道路占用許可の特例制度により全国2例目となる公道を活用したオープンカフェ。賑わいのある歩行空間を演出している

11 ザ・ガーデン：グランフロント大阪北館北側に広がる約4,000㎡の庭園。豊かな植栽で四季の移ろいを感じられる

12 歩道空間の照明柱を活用したパナーラッグ：公道を活用した広告などの収入は、道路管理・維持費などまちづくりに使われている



11



12

成長・発展し続ける JR大阪駅周辺地域

上溝憲郎

Norio Umemizo
大阪府都市計画局企画振興部うめきた企画担当課長兼経済戦略局企画部調整担当課長

民間開発の機運が高まった JR大阪駅周辺

JR大阪駅周辺地域は、1日の乗降客数が約250万人の西日本最大の交通ターミナル地区であり、業務・商業が集積する一大拠点である。近年、大規模な民間建築物を建て替えるプロジェクトが次々と進められ、これまで大阪、関西の中核を担ってきたこの地域がさらなる成長、発展を続けている。その中核的なプロジェクトが、「都心に残された最後の一等地」と呼ばれる約24haの梅田貨物駅跡地において進められている「うめきた」の開発である。

2002年7月、この地域を含む約490ha（JR大阪駅周辺・中之島・御堂筋周辺地域）のエリアが都市再生特別措置法に基づく「都市再生緊急整備地域」に指定され、都市の活性化に寄与する、自由度の高い建築が可能となった。また、「大阪駅北地区（現・うめきた）まちづくり基本計画」が2004年に策定され、これまで高い立地ポテンシャルを持ちながら、それを活かした土地利用ができなかったこの地区のまちづくりが、いよいよ動き出すことが実感された。これらが、JR大阪駅周辺での民間の開発機運を高めてきたきっかけとなったと思われる。

地区の中心にあるJR大阪駅では、南北連絡橋、橋上駅舎、駅全体を覆う巨大な大屋根の設置などの駅部の大改修が行われるとともに、北側の駅ビルが「うめきた」の玄関口となる開放感のあるアトリウム空間を備えた複合施設・ノースゲートビルディングに建て替えられた。その他にも、阪急百貨店が入居する梅田阪急ビル、大阪サンケイビル（現・ブリーゼタワー）、大阪富国生命ビル



1970年頃の梅田地区：梅田貨物駅の向こうを流れるのは淀川【提供：阪急電鉄株式会社】

などの建て替えが次々と進められた。さらに、2012年1月には、「都市再生緊急整備地域」のうち、「うめきた」を含むJR大阪駅周辺の一部の地域が、都市の国際競争力の強化を図るために緊急かつ重点的に市街地の整備を推進する地域として「特定都市再生緊急整備地域」に指定され、インフラ整備等に対する国からの支援、道路上空の建築に対する特例措置などが可能となった。この制度を活用して、阪神百貨店が入居する大阪神ビルディングと隣接する新阪急ビルが、その間の道路を残したまま一体的に建て替えられる計画となっている。

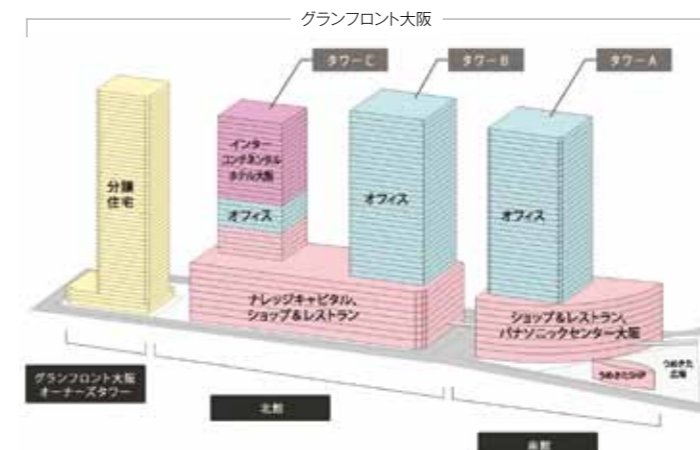
「グランフロント大阪」の中核施設

「うめきた」の東側部分については、先述の「大阪駅北地区まちづくり基本計画」のもと、先行開発区域として開発が進められ、2013年4月、地区全体にわたり水や緑が豊かなオープンスペースを確保し、ゆとりと潤いのある都市空間を形成するとともに、質の高い商業・業務・ホテルなどの機能が集積した新しい拠点「グランフロント大阪」がオープンした。その中核となる施設が、「ナレッジキャピタル」である。

「ナレッジキャピタル」は、最先端の技術や情報と多様な人々の交流を通じて、今までにない商品、サービスを生み出すことを目指す複合施設である。

企業や大学が一步先の未来を提案し、ユーザーとの関係性を構築する「フューチャーライフショールーム」の他に、新たな価値の創造の場となる「ナレッジオフィス」と「コラボオフィス」、先端技術を見て、触れて、体験して、語り合う交流施設「The Lab. みんなで世界一研究所」などから構成されている。なかでも、多彩な才能が集い、分野を超えた知的交流の場となっている会員制サロン「ナレッジサロン」は、開業時700人であった会員数が10ヵ月後の2月末には約1,900人となるなど、予想を大きく上回る伸びを見せた。このことは「ナレッジキャピタル」の今後に大きな期待を抱かせる。現在、平日の平均来場者数は400人を超え、2014年3月から「ナレッジサロン」の目的である“コラボレーションからプロジェクト創出”をさらに活性化させるため、表現の場となる「プレゼンラウンジ」を新設している。

また、大阪市が開設した「大阪イノベーションハブ」では、起業家、エンジニア、デザイナーといった多様な人材を集めて試作品開発を競うなど、多くのイベント



グランフロント大阪の施設構成概念図



ナレッジキャピタルの施設構成図【提供2点とも：グランフロント大阪】



2

- 1 改修後のJR大阪駅：手前が造成が始まったうめきた2期区域。ノースゲートビルディングやグランフロント大阪、うめきた広場が見える
- 2 ナレッジプラザ：グランフロント大阪北館の中心に広がる大吹抜けのプラザではさまざまなイベントが開催される【提供：グランフロント大阪】
- 3 大阪イノベーションハブ：イノベーション創出のためのプラットフォームとして大阪府がナレッジキャピタル内に開設した施設【提供：大阪市】



3

「うめきた2期区域開発に関する民間提案募集」で選定された「総合的に優秀な提案10者」

2013年10月11日-11月11日に募集要項が公表、配布された「うめきた2期区域開発に関する民間提案募集」には、40者から提案書が出され、2014年3月末に、総合的に優秀な提案10者、プランニングやデザイン等が優秀な提案10者が選定された。今後は、今回選定された優秀提案者との“対話”を行いながら、2015年度「まちづくりの方針」を作成し、うめきた2期区域のまちづくりの推進に取り組む予定だ（*はグループによる応募者の代表法人。詳しくは大阪市ホームページへ）



トを開催している。その他、世界的なイノベーション拠点であるシリコンバレーに若手を派遣するワークショップを実施。国内外から人材・情報・資金を誘引し、新製品・新サービスにつながるプロジェクトの創出・支援を行う場と仕組みづくりに取り組んでいる。

“みどり”を軸とした「うめきた2期区域」のまちづくり

「うめきた」の西側部分、まだ開発されていない「うめきた2期区域」と呼ばれる約17haの区域については、防災機能を備えた緑豊かなオープンスペース“みどり”を軸とし、“大阪の顔”となるような質の高い都市空間を創出するまちづくりの実現を目指している。この考え方のもと、昨年度、民間のデベロッパーや設計者などから、独創的でありながら実現性のあるまちづくりについての提案を求める「うめきた2期区域開発に関する民間提案募集」を実施した。

2013年10月から応募を受け付けたところ、46者からの応募があり、12月にそのうちの40者から提案書が提出された。その内訳を見ると、国内からの応募者が23者、海外からの応募者（アメリカ合衆国、イギリス、イタリア、シンガポール、中国、フランス）が17者であった。建築家の安藤忠雄氏が委員長を務める審査会に、これらの提案を審査いただき、空間や建物のデザインや土地利用計画などのまちづくりの面で優れているだけでなく、事業面での実現性なども含めて、総合的に優秀な提案を10者、プランニングやデザインなどに関して優秀な提案を10者、合わせて20者の優秀提案が、2014年3月末に選定された。この中には、アメリカやヨーロッパ諸国の設計事務所を代表者とする、あるいは構成員に含む提案が4者含まれている。今後、これら優秀提案者との対話を行い、2期開発の基本となる「まちづくりの方針」を2014年度に作成、この方針

に基づいて、“みどり”を軸とした斬新で独自性が高く、世界に強く印象付ける都市空間を目指したい。先行開発区域の「ナレッジキャピタル」を中核とする高度な都市機能の集積と連携し、「うめきた」全体として、世界から人材や投資を呼び込み、我が国の国際競争力を強化しながら、国土強靱化に寄与する拠点を形成していきたいと考えている。また、このような質の高いまちづくりを実現し継続していくためには、地域が自ら考え、自らがまちの管理・運営を行うエリアマネジメントの導入が不可欠である。大阪市が2014年3月に制定した「大阪市エリアマネジメント活動促進条例」による新たな制度も活用し、公共と民間事業者とが連携した、これからの都市モデルとなるようなまちづくりを目指していきたい。

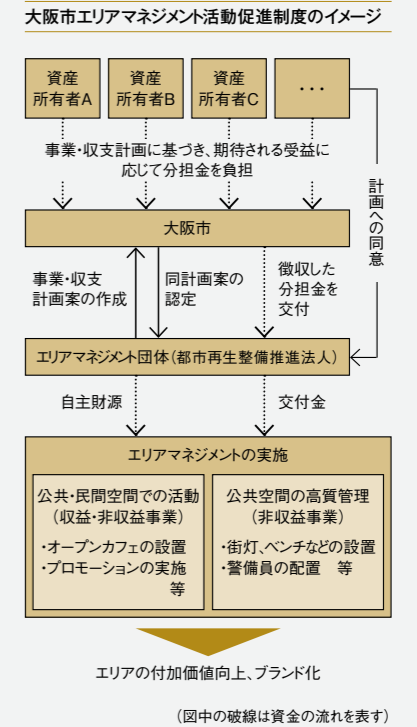
上記コンペについては大阪市ホームページの「市政」→「市の主要計画、指針・施策」→「都市再生」2014年3月27日に掲載

日本初のBID制度創設への試み

辰巳康夫
Yasuo tatsumi
大阪市都市計画局都市計画課長

成熟社会を迎えた我が国においては、まちづくりは、単に開発時の一過性で終わらせるのではなく、絶えず発展していくよう時間軸で捉えることが不可欠であり、民間主導による柔軟なまちづくりであるエリアマネジメントは、今後ますます重要になると考えられる。このような背景のもと、大阪市では2014年3月に「大阪市エリアマネジメント活動促進条例」を定めて新たな制度を創設した。この制度は、欧米を中心に法制度化が進み、成果を上げているBID制度[*]をモデルとし、地権者等が自ら負担し、自ら質の高い水準でまちを管理・運営することを公的に位置付けたものである。具体的には、以下の3つの現行法制度をパッケージ化している。
①対象地区が目指すまちの将来像などの大方針を、都市計画法に基づく「地区計画」として制定
②「地区計画」のもとに、2011年度に新たに都市再生特別措置法に盛り込まれた「都市利便増進協定制」に基づき、活動主体となるエリアマネジメント団体が、道路等の公物管理者などと、

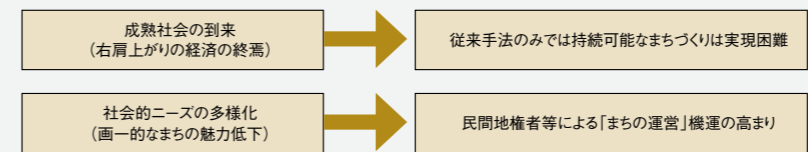
区内のまちなみ、まちの運営などの活動内容とその費用負担などを定めた協定を締結
③協定に定めた活動に要する費用のうち、樹木や街灯、案内板など「都市利便増進協定制」に位置付けられた施設の一体的な整備または管理については、地区内の地権者等が負担し、地方自治法に基づく分担金として市が徴収してエリアマネジメント団体に交付
上記の3つにかかる手続きは、その多くが法令上は本市が決定、認定などの権限を有しているが、実際には、活動主体であるエリアマネジメント団体が活動区域や活動内容、その収支計画などの案を作成することとしている。また、活動地区内における道路など本市が管理する公物の占用についてもできるだけ柔軟な運用を図りたいと考えている。これにより、活動主体となる団体は、事業内容や地権者等の地元調整などに大きな責任を負う反面、従前の任意のエリアマネジメントに比べて実質的に大きな権限を有することになり、より自由度の高



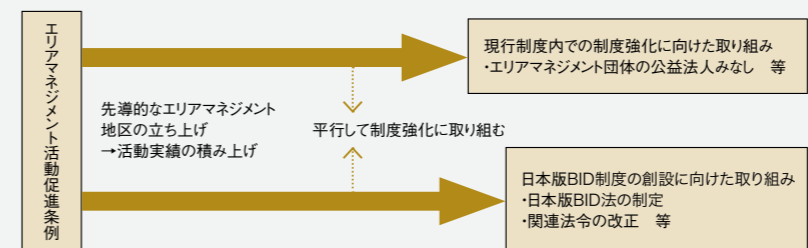
い活動が可能になると考えている。この制度は、エリアマネジメント活動を公的に位置付けて活動財源を制度化した点では我が国でも初となる画期的な試みである。しかしながら、現行法制度の枠内での創設としているため、分担金は本来、行政サービスの対価であるため、分担金を財源とする事業は公的なものに限定される。また、活動主体であるエリアマネジメント団体(一般社団法人等)の自主財源確保にかかる税制優遇が限定的であるなど、欧米型のBIDとは隔たりがあるのも事実である。今後は、我が国における真のBID導入の端緒となるべく、まずはこの制度の活用により大阪でのエリアマネジメントの実績を重ねていきたい。

[*] BID(Business Improvement District) 制度：地権者などをつくる地域管理団体が対象地区の資産保有者等からの負担金を主財源として、地域の美化や警備等の地域改善事業などを行い、地区の価値を高める仕組み

エリアマネジメント活動促進の背景



BID制度創設に向けた今後の取り組みイメージ



非物質の象徴“アルミニウム”を物質として再考する

中村拓志
Hiroshi Nakamura

正直に告白すれば、アルミニウムは嫌いだった。アルミは金属の中でも軽くて扱いやすく錆が出ないから、クラスの優等生的存在である。無表情で存在感が薄い優等生。テンピラ的な言いがかりかもしれないが、僕はそこが気に入らない。本性はどこにある？ もっと素顔を見せたらどうだ、そんな気持である。もちろんその扱いやすさ故に、一円玉やアルミサッシ、アルミ缶など、アルミニウムは日常のあらゆるところに使われ、僕らにとって当たり前の存在となっている。そんな現代において、僕はアルミをどう扱えばよいだろうか。かつては、アルミの軽さが注目された時代もあった。バブルの熱狂の中、建築も“商品”にすぎないとシニカルなスタンスで、軽くて工業製品のような建築が流行した。とにかくその軽さと無表情さはインパクトがあったから、アルミは非物質の象徴のように取り上げられた。しかし、建築はどうあがいても重いもので動かないし、アルミは歴然とした物質である。僕はまず、その当たり前のところからスタートしたい。アルミの特性を引き出すことに集中するのだ。物質の本性、その特性。それはデザイナーや建築家がコントロール不可能な“自然”である。それを引き出すことは、人智を超えた自然への敬意と対話

のためのデザインである。自然とのかかわり方を引き出す素材使いこそ、現代に生きる僕がすべきことだと思った。

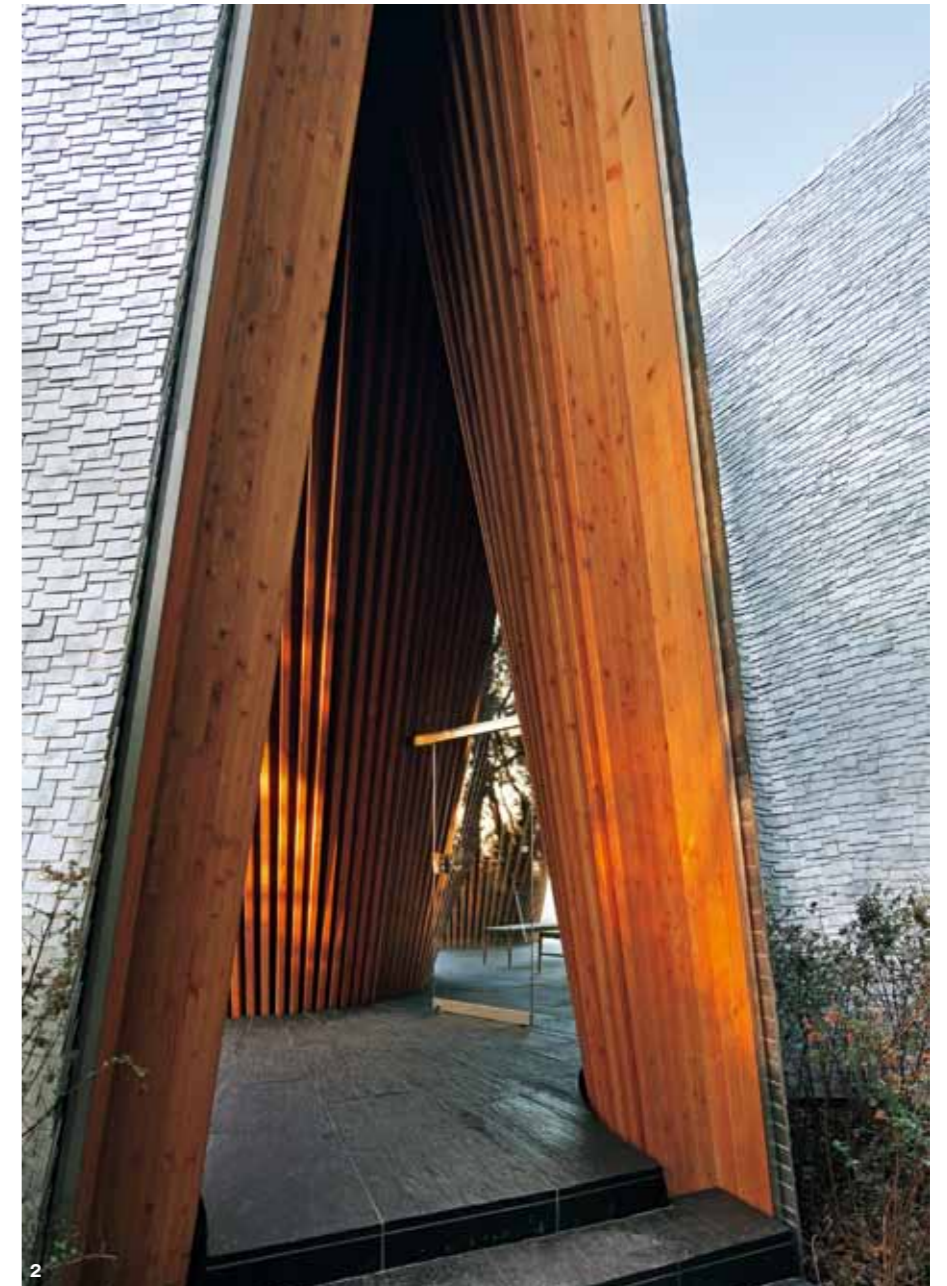
狭山湖畔霊園の「森の礼拝堂」は三次曲面の屋根形状を持つ。そこで細かい部材を張り重ねる乱葺きとすることで、曲面への追従を可能にした。次に素材であるが、軽量で柔軟性がありながら同時に耐久性があること。可能であればこの地域由来の素材がよい。そう考えて、アルミの砂型鋳物の工場に行き着いた。敷地から車で1時間ほどの距離にある埼玉県川口市は『キューボラのある街』として知られ、かつては鋳物産業で栄えた場所だ。建築がその地由来の建材で構成されるということは、その建築が経済的にも表象としても地域に根差すことを意味し、愛着を育む大きな要素になるはずだ。

アルミは融点が約660℃と銅や鉄と比べて低い。アルミ屑を集めてガス炉で溶解すれば簡単にリサイクル可能だ。この最大の利点であり個性をそのまま表現するために、屋根材にアルミの溶解した痕跡を残したいと考えた。敷地上空は雑木林の枝葉で覆われていて、樹液がたたくさん落ちてくる。このランダムなテクスチャは、外観の汚れを目立たせない効果もある。そこで既製品の均質なアルミの板材をカットするのではなく、砂型にアルミを流し込んで、屋根材1枚1枚に異なる流紋が現れる鋳物にこだわった。この流紋こそ、建築家がコントロール不可能な“自然”の姿であり、アルミのドロドロした本性である。次に表面は仕上げを施さず、素地のままとした。通常、アルミ表面にはアルマイト処理と呼ばれる人工的な酸化被膜が施され、摩耗や腐食を防止する。しかしこの表面処理はアルミのせつかくの風合いを壊してしまう。そもそもアルミは空気中で自ら酸化被膜を形成し、腐食の進行を止めることができる。自分で自分のことをちゃんとできるヤツなのだ。その厚みはささやかである

けれども、板厚を十分確保すれば腐食で穴が開くということはない。アルミの大きさは180×200mm程度で6種類。屋根に合わせて曲げるには、厚さ4mm以下が求められた。しかしこの薄さは鋳物の限界値であった。アルミの液体が砂型の中でうまく回らず、当初の成功率は1割を下回った。そこで砂の粒度や鋳型の傾き、湯口や排出口の位置などさまざまな工夫を重ねた。鋳物職人たちの仕事は普段、工業製品としての均質性の確保に重きを置いている。しかし我々が求めたのはそれとは真逆の、流紋が残る荒々しい表情やランダムさであったから、ずいぶんと戸惑わせてしまったが、完成した鋳物には職人の思いまでが込められたような、味のある表情が生まれた。

屋根葺きはさらなる困難を極めた。粘板岩のスレート屋根のように2-3枚を重ねて葺くのであるが、平面形状は下部から上部にかけて円弧から直線へと姿を変え、勾配も部位ごとに異なる。縦横で曲率が異なるから、地上で機械曲げた後に実際の部位に当てて、ズレを手曲げて補正しながら貼った。乱葺きにしたのは、樹液などの汚れが目立たないように配慮したからだ。目地が揃わないように展開図に基づいて墨出ししたが、世界地図が必ずどこかに歪みを持つように、三次曲面の展開図にも必ずズレが生じてしまうことも、作業の遅れに拍車をかけた。最終的には寺社仏閣をつくる宮大工たちの手も借りながら何とか完成した。

出来上がったアルミは製作過程の痕跡を残しながら、アルミニウムの素地の優しさをとどめたまま、空や緑の色を柔らかく反射している。自分の個性を少し誇らしげに。でもそれでいて素直な表情を見ていると、アルミニウムという素材が今までと少し違って見えた。こんなに味があって生き生きとしたアルミニウムに、僕は初めて出会ったのだった。



森の礼拝堂

1 アルミ鋳物の製作過程：鋳造テクノと共同開発し、小泉アルミが手づくりで製作した。1枚ごとに異なる流紋や、焼きの色が付いたアルミニウム材【提供：NAP建築設計事務所】

2 森側エントランス：直線で構成された棟から、木を避けるために円形で構成された軒にかけて緩やかなカーブを描くアルミ乱葺きの屋根。アート作品の製作などを得意とする職人集団・有限会社フラットが手掛けた

3・4 アルミ鋳物のディテール：開口部の端部に、4mmの切りっばなしのアルミ屋根の小口が見える。通常の薄物鋼板は唐草と呼ばれる曲げ金物で小口を取り纏うが、ここではアルミという素材が堂々ともものものとして立ち現れる。空や樹木、鑑賞者の服の色などを柔らかく反映しながら、物質感のある表情を見せている

【写真2-4：Nacása & Partners Inc.】



なかむら・ひろし——建築家・NAP建築設計事務所代表取締役／1974年生まれ。1999年、明治大学大学院理工学研究科博士前期課程修了。1999-2002年、隈研吾建築都市設計事務所。2002年、NAP建築設計事務所。
主な作品：Lanvin Butique Ginza [2004]、House C—地層の家 [2008]、録museum [2010]、東急プラザ表参道原宿 [2012] など。



貴重な水を使わず、水資源を汚染しない、循環型無水トイレシステムの普及に向けて

今井茂雄

Shigeo Imai

(株)LIXIL 総合研究所
新事業創造部 グローバル環境インフラ研究室 室長

はじめに

トイレは人々の健康な生活に不可欠であるにもかかわらず、19世紀に水洗トイレが発明されてから、画期的なイノベーションが起きていません。世界に目を向けると、水不足は深刻な社会問題であり、水洗トイレの設置が困難な地域があります。水不足の問題に加えて、高齢化・過疎化が進む地方都市では、下水道インフラの維持費が住民への大きな負担となることから、下水道が敷設できない地域や水資源が乏しい地域に適した画期的なソリューションが必要です。

環境変化や新たな市場のニーズに適合した商品の研究・開発はLIXILが持続的に事業成長を遂げるために、避けては通れない課題と考えています。この考えに基づき、さまざまな地域のニーズに適合する商品の開発に向けて、ベトナム、ケニア、インドネシア、そして日本の4カ国で活動を進めています。

グリーントイレシステムとは

貴重な資源である“水”や“電気”を使わずに、安全にし尿を処理するには？ この課題に答えるヒントとなるのは、日本で古来より行われてきた“堆肥づくり”です。自然界に存在する微生物の力で、し尿が発酵・分解され、再資源化される原理です。

LIXILのトイレは、固体・液体を簡易的に分離し、尿と便を分けて貯留します。この“分離”が重要で、臭いの発生を抑える他、効率的に堆肥をつくることができます。

水洗トイレの設置が困難な地域へ、安全で快適なトイレを提供することに加え、

今まで廃棄されてきたリンや窒素を肥料など、貴重な資源として回収することが可能となります。

グローバルな実践活動

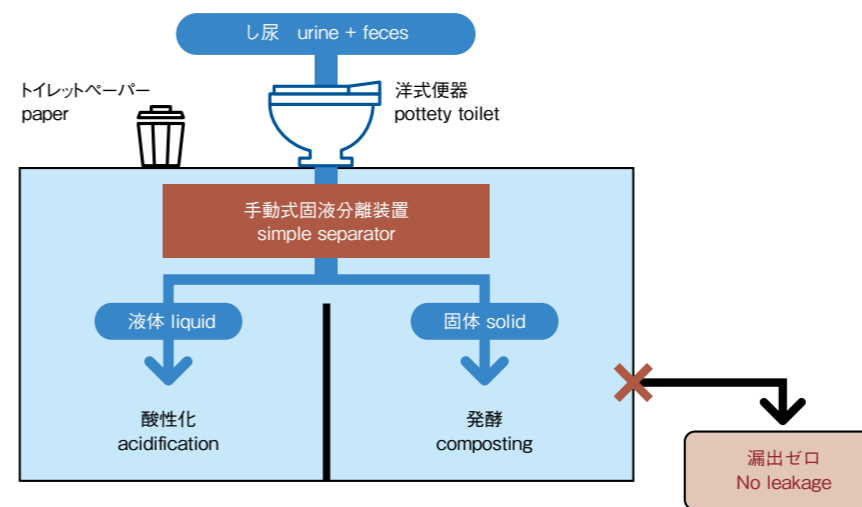
LIXILのグリーントイレシステムプロジェクトは2008年に始動し、問題が顕在化している新興国や地方都市をターゲットとして、LIXIL自らが実践しています。

1. ベトナムでの挑戦

ベトナムは、水資源も比較的豊富で、都市部においては9割以上の方が水洗トイレを利用しています。しかしながら、汚水処理の整備が不十分であるため、周辺域の河川の汚染が深刻化しており、解決が求められています。ベトナム北部は、し尿からコンポストをつくる習慣が残っていることから最初の実証の場としてハノイを選びました。2012年にはハノイ建設大学と共同プロジェクト契約を結び、ベトナムの新たな国家認証に向けた実証試験を進めています。

2. ケニアでの挑戦

2013年6月に開催された「TICAD V」のアフリカンフェアのケニア共和国ブースにて、グリーントイレの他、水の簡易浄化システム、廃バッテリー蓄電システムを備えた、「インフラフリーユニット」の展示を実施し、国内外の方々から高い関心を集めることができました。ケニアは人口約4,000万人、GDP成長率が高く、若年層の人口増加を背景に購買力のある中間層が形成され、今後のさらなる成長が期待されています。その反面、急激な人口増加と都市集中により、インフラ整備が追いつかず、国を挙げてこの整備に取り組んでいます。2014年1月には、「ケニア共和国の非都市部における水資源保全と衛生環境改善のための“循環型無水トイレシステム”普及促進事業」が、JICAが公募した「第1回 開発途上国の社会・経済開発のための民間技術普及促進事業」に採択され、同年5月には実証試験に向けた実験設備の設置を行いました。アジア諸国とは異なり、アフリカは人間



ベトナム・ハノイ市

- 1 市内：最新のグリーントイレ
- 2 市内：河川に汚水や生活排水が流入している
- 3 市郊外のトイレ
- 4 農村部の一般的なトイレ
- 5 電気も水も使わないLIXILのグリーントイレの模式図：便と尿を分離し、尿は酸性化させ、便は好気性発酵で堆肥化する



ベトナム
6 初期型のグリーントイレ
7 コンポスト(堆肥)を取り出している住民
8 内部の様子

ケニア・ナイロビ市
9 市内：人口密集地域のキベラ地区の様子
10 現地住民説明会の様子



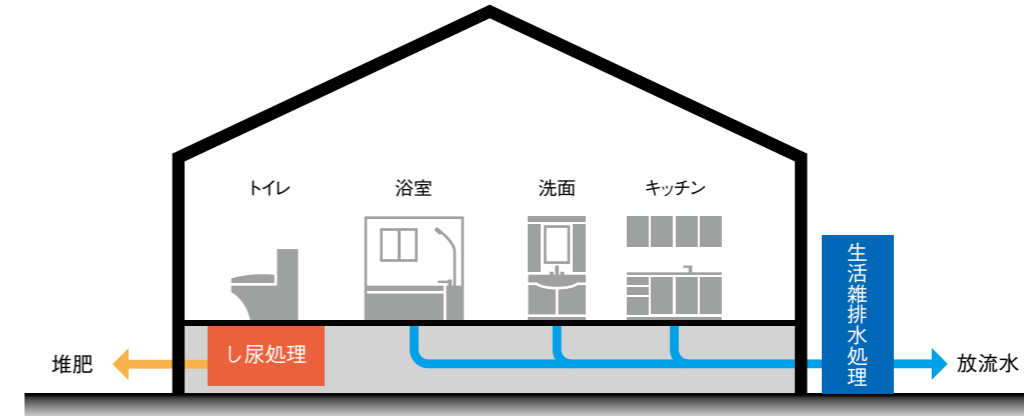
のし尿を肥料として利用する慣習がない地域です。再資源化に関する正しい理解と共感を得るために、現地の団体や住民の方々との意見交換会を通じて、当初は実証試験への参加に反対していた住民の方たちも、最終的に「実証試験を成功させて、ケニアからアフリカ全土を変えていきたい」、「水洗トイレを使う人たちが、このトイレに切り替えたい」という考えまでになりました。

実証試験を通じて、ケニアの風土・慣習に合わせて改良を進め、普及可能な商品づくりにつなげていきます。

3. インドネシアでの挑戦

インドネシアは2.4億人という世界第4位の人口規模であることに加え、1万

8,000もの島から成り立っていることから、大規模で効率的なインフラ整備が困難であり、特に下水道や処理施設の不在は、農村における土壌や水資源の汚染につながり、深刻な問題になっています。下水道の整備の大幅な遅れから年間600万tのし尿が未処理の状態、河川や運河に排出され、腸チフスや下痢が蔓延する原因となっています。この解消に向けて、「インドネシアにおける循環型無水トイレを利用した保健衛生改善事業」をJICAへ提案し、2013年9月に「協力準備調査(BOPビジネス連携促進)」として採択されました。インドネシアは、水資源が豊富なため、ムスリム(人口の87%)にも使用可能なグリーントイレシステムを目指します。



11

4. 徳島県上勝町での挑戦

徳島県上勝町は徳島市中心部から車で1時間の山間部にある、過疎化と高齢化が進むまちですが、上勝町の取り組んでいる先進的な活動は国内外から注目を集め、年間2,500人を超える視察者が訪れます。代表的な活動として、料理に添える葉っぱ(つまもの)ビジネスと、日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」があります。34品目に及ぶ、ゴミの分別や、生ゴミ処理機などの導入を推進して、全戸自己処理を実施し、最後に残った課題として、家庭などから発生する排水汚泥の削減・資源化を検討すべくグリーントイレシステムの共同実証試験がスタートしました。

シャワートイレが使用可能なグリーントイレシステムで「従来の快適性を維持しながら、最小限のエネルギーによるし尿の資源化」を目指しています。実証試験の開始から1年間、発生した汚泥の引き抜きは不要であり、生活雑排水の放流水質は浄化槽と同レベルであることが確認されました。特に、窒素、リンの放流水質は高度処理型浄化槽レベルであることが確認されました。少子高齢化する日本、特に地方ではコンパクトで、地域にあるエネルギー(水力・太陽光など)を活用しながら、持続可能な仕組みが求められています。2011年に襲った東日本大震災の教訓も踏まえ、今後も上勝町とLIXILは実現

に向けた取り組みを強め、住民・上勝町と共に、改良を進めていきます。

最後に

衛生的なトイレを使えない世界の人口を半分にするという国連の目標(MDGs:ミレニアム開発目標)が来年2015年に迫っています。また、人口爆発に伴い資源が限界にあることから、このグリーントイレシステムによるイノベーションは必須であると考えています。

日本で2011年3月11日に東日本大震災が起き、被災地では、上下水道や下水処理施設は破壊され、水洗トイレは使えなくなりました。先進国においては人口減少が深刻でインフラをどう維持するかが課題となりつつあります。世界各地での実証を通じて、グリーントイレを将来的には先進国を含めた世界で活用できるシステムとして完成させたいと考えています。



12
13
14

徳島県・上勝町
11 グリーントイレシステム実証研究イメージ図
12・13 試験機を設置した住宅と建屋
14 34品目のゴミ分別をする住民[提供：上勝町]

15・16 LIXILが東日本大震災の被災地に設置した電気や水を使わないトイレ



15

16

建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内

http://archiscape.lixil.co.jp/

LIXILのWEBサイト「アーキスケープ」のご案内です。

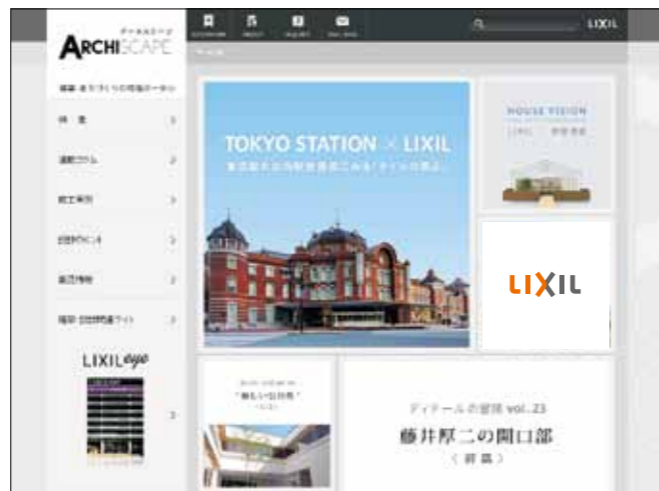
「アーキスケープ」は建築やまちづくりに携わる専門家の方々のための情報ポータルサイトで、特集・連載コラム・施工事例などを紹介しています。

特集では、最新の建築事例や話題のプロジェクトを取り上げ、その背景を詳しく解説するとともにそこで使われた技術・製品をご紹介します。また連載コラムでは、LIXIL商品の施工事例をご紹介します。新しい表現や建築、まちづくりの魅力を探っていきます。一方、興味のあるカテゴリーを登録することによって、最適な記事を表示するコンシェルジュ機能や、関連記事をすぐに参照できるレコメンドも搭載しています。

LIXILの企業情報誌「LIXIL eye」のバックナンバーはすべてPDFデータでご覧いただけます。

LIXIL独自の豊富な情報をタイムリーにお届けするWEBサイト「アーキスケープ」を、ぜひご利用ください。

http://archiscape.lixil.co.jp/



施工事例 index

http://archiscape.lixil.co.jp/pickup

同志社大学 今出川キャンパス 良心館

「良心館」は、同志社大学今出川キャンパスに新設された校舎で、景観保全に配慮し、校内に残る重要文化財との調和を図るようデザインされています。建物全体が温かみのあるレンガやタイルに囲まれ、風合いのあるテラコッタ陶板のルーバー、カーテンウォールなどを組み合わせることにより、豊かな表情を醸し出しています。



■建築概要■

所在地：京都府京都市上京区烏丸東入御所八幡町106他 | 規模：地下2階、地上5階 | 構造：SRC造、S造 | 工期：2010.12-2013.3 | 設計：同志社大学今出川キャンパス整備設計共同企業体(東畑建築事務所・類設計室) | 施工：戸田建設

川越駅西口駅前広場

川越駅西口駅前広場の改修工事が完了しました。道路交通機能、アクセス機能を回復させ、歩行者が安全に移動できることを目的に計画。高速バスのりばのシェルターには、エコに配慮し、太陽光発電パネル機能を搭載したソーラー仕様のGK-A型が取り付けられています。シンプルでシャープなデザインが、まちに調和しています。



■建築概要■

所在地：埼玉県川越市脇田町24-9 | 施工：川越市都市計画部川越駅西口街づくり推進室

あべのハルカス オフィス階

“立体都市をデザインする”をコンセプトに建てられた、高さ日本一の超高層建築「あべのハルカス」。そのオフィス階のトイレ空間に、機能性とデザイン性の高いLIXIL商品が採用されています。自動水栓・オートソープ内蔵のノセルカウンター、節水性・清掃性に優れた壁掛け式の大便秘器・小便器など、最先端のリフレッシュコーナーの雰囲気が漂っています。



■建築概要■

所在地：大阪府大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43 | 規模：地下5階、地上60階、塔屋1階 | 構造：S造、SRC造 | 工期：2010.1-2014.3 | 設計：竹中工務店 | 施工：竹中工務店・奥村組・大林組・大日本土木・銭高組共同企業体

長野女子高等学校

1925年開校の長野県内で最も歴史のある長野女子高等学校が、新校舎の整備を行いました。入り口の門扉は、引き戸のラングベールが採用され、本体はベースローラー部分でしっかりと固定されているため、開口部にレールを敷く必要がなく、浮いたままの開閉が可能です。その他、自然の風を利用して、電力などを使わない、自然風力換気窓のユラードや、駐輪場には、スマートでスタイリッシュなAR型のサイクルポートが設置されています。



■建築概要■

所在地：長野県長野市三輪9-30-18 | 施工：学校法人長野家政学園長野女子高等学校

LIXILからのご案内

「キュービア」が「レッドドット・デザイン賞 プロダクトデザイン2014」を受賞

LIXILの洗面器用・手洗器用水栓「キュービア」が、「レッドドット・デザイン賞 プロダクトデザイン2014」を受賞しました。「レッドドット・デザイン賞」はドイツのノルトライン・ヴェストファーレン・デザインセンターが主催する国際的なデザイン賞で、革新性、機能性、人間工学、耐久性、環境対応など9つの基準で審査が行われます。今年度は世界53カ国から4,815点に及ぶ応募があり、LIXILとしての応募、受賞は今回が初めてとなります。

「キュービア」は、塊から削り出したような重厚感のある、金属の質感を活かしたデザインで、空間を引き締めます。直線と直線を円弧で滑らかにつなげた美しいラインをつくることにより、緊張感の中にも繊細な優しさを表現しています。機能面では「エコハンドル」を搭載し、よく使うハンドル正面位置で水を出す省エネ設計により、無意識に使っている、お湯のムダ使いを防止し、省エネを実現します。LIXILでは、今後もさらなるデザイン探求と商品性向上に努めています。



洗面器用・手洗器用水栓「キュービア」

LIXIL出版 新刊案内

http://www1.lixil.co.jp/publish/

LIXIL BOOKLET「背守り——子どもの魔よけ」
執筆：佐治ゆかり、夫馬佳代子ほか
定価：1,800円[税別、好評発売中]

現代建築家コンセプトシリーズ17
『大西麻貴+百田有希/o+h | 8 stories』
執筆：大西麻貴+百田有希/o+h
定価：1,800円[税別、好評発売中]

『アトリエ・ワン コモナリティーズ——ふるまいの生産』
執筆：塚本由晴、貝島桃代、田中功起、中谷礼仁ほか
定価：2,700円[税別、好評発売中]

上—LIXIL BOOKLET「背守り——子どもの魔よけ」 | 中—現代建築家コンセプトシリーズ17『大西麻貴+百田有希/o+h | 8 stories』 | 下—『アトリエ・ワン コモナリティーズ——ふるまいの生産』

10+1 WEB SITE http://10plus1.jp/

建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

10+1 DATABASE http://db.10plus1.jp/
雑誌「10+1」の全記事について検索できます。

ギャラリー＋イベント

http://www1.lixil.co.jp/culture/

LIXILギャラリー | 東京

建築とデザインと
その周辺をめぐる巡回企画展

背守り——子どもの魔よけ展

会期：開催中、8月23日[土]まで
子どもの魔よけとして着物の背中に縫い取られた「背守り」、端切れからつくられた「百徳着物」。子どもの命を守る豊かな造形と衣文化を紹介します。



袴下にモスリン紐の背守り
【所蔵：鳴海友子 | 撮影：石内都】

現代美術個展

石内都展——幼き衣へ[写真]

会期：開催中、8月23日[土]まで



「幼き衣へ」
[30×43cm | 2013-14年]

やぎもの個展

岸映子展——陶

会期：開催中、7月11日[金]まで



「心象風景」
[38.5×54×9.5cm | 2014年 | 撮影：永田陽]

山田晶展——陶

会期：7月15日[火]-8月21日[木]
オープニング・パーティ
日時：7月15日[火]18:00-19:00

LIXILギャラリー | 大阪

建築とデザインと
その周辺をめぐる巡回企画展

建築の皮膚と体温——イタリアモダンデザインの父、ジオ・ポンティの世界展
会期：開催中、8月19日[火]まで
1本のスプーンから高層ビルまでデザイ

ンし、イタリアモダンデザインの父と呼ばれるジオ・ポンティ。“軽やかさ”、“薄さ”を追求した建築の皮膚(表面)へのこだわりを、空間展示や直筆スケッチ、映像などから読み解きます。



小石形のタイルが埋め込まれた壁面：ホテル・パルコ・ディ・プリンチピ(イタリア・ソレント)のレセプション【撮影：梶原敏英】

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと
生活文化をつなぐ企画展

手のひらの太陽——「時を知る、位置を知る、姿を残す」道具展

会期：開催中、9月7日[日]まで
会場：「土・どろんどろん館」企画展示室
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
人は古来、さまざまな方法で太陽を利用してきました。人類最古の科学装置とも言われる日時計を中心に、六分儀やカメラ・オプスキュラなど、太陽を身近なものとして利用しようと試みてきた人びとの知恵の結晶を紹介します。



LIXILギャラリー | 東京

所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL: GINZA 2階
Tel: 03-5250-6530
開館時間：10:00-18:00
休館日：水曜日、8月14-17日

LIXILギャラリー | 大阪

所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel: 06-6733-1790
開館時間：10:00-17:00
休館日：水曜日、8月14-17日

[INAXライブミュージアム]

所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
開館時間：10:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)
共通入館料：一般：600円、
高・大学生：400円、
小・中学生：200円

の働きといったものについて論じました。後期になるにつれて、曲線が変わっていくことも見つけました。

最近、アーメダバードとチャンディガールに行ってきました。伊東（豊雄）さんに声をかけてもらっての、突然の旅です。アーメダバードは、なんと静かで、何か歴史が感じられ、とても魅力的な街だと思います。宗教と文化があることが、こんなにも街を豊かにしているか、と感心しました。でも片方で、実は二年前にも行っているのですが、その時と比べて、ちょっと動物と人の混じり具合が減っているようで、それは少し残念でした。どうしてなのか質問したら、幹線道路は動物が歩くのが禁止されたのだ、と説明されたり、動物も車が多すぎるから歩きたくなくなったんだ、と説明されたりで、実のところ何が本当かはわかりませんでした。もともとなんで道を歩くのか、何かを運んだのかという質問には、放牧されているのだ、という答えが返ってきて、皆が驚きました。アーメダバードは、街が人やいろんなものによって作られているという感じで満ち満ちていました。道に座り込んでいる人がいて、お皿を洗っている人がいて、犬の家族が死んだように路上で寝て、車の横

を子供達がバイクに山乗りになって通り過ぎて行きます。快適そうでした。実は私の父が一九六〇年にエンジンニアとしてインドの山奥に約一年常駐していたのですが、その時のおおらかな雰囲気はまだ残っているようにすら感じられました。インドは、単に国というよりも、大きな大陸という印象を受けました。

アーメダバードの街からチャンディガールに移動すると、ちょっとがっくりでした。チャンディガールは、町全体が近代主義的な考え方で作られています。アーメダバードの交差点はいろんなものが混ざり合うから大変なことになっていますが、チャンディガールでは交差点が必ずラウンドアバウトになっていて、うまく交通整理されていました。あちこちで人と動物が混沌と混ざり合うアーメダバードと比べ、チャンディガールでは、自動車と歩行者、自転車、すべてが分けられていて、それが町の楽しさを消している感じがしました。もちろん州議会堂を始めとするコルビュジエの建築はどれも、大変素晴らしいものでした。インドの巨大さにふさわしい宇宙的広がりがありましたし、同時に、ヨーロッパのコルビュジエの諸建築の集大成とも言えるような厚みを感じました。で

妹島和世様

妹島さんからインドの動物の話聞いて、植物だけではなくて、僕のまわりにいた動物のこともいろいろ思い出してきました。家のまわりには、たくさん動物がいました。粗末な我が家は大倉山から歩いて二、三分です。今は大倉山という、私鉄の沿線の、渋谷から二〇分足らずの駅——駅前からマンションが立て込んでいるという感じですが、当時の大倉山は里山そのまま、山裾に農家がなあって、我が家の二軒先のジュンコちゃんの家も、大きな農家でした。

ジュンコちゃんちは、まずヤギを飼っていて、それがとても臭かった。ヤギの小屋の奥側に、防空壕が二本掘ってあって、そこには巨大なかえるがたくさん棲んでいたし、壁にはムカデやゲジゲジはついていて、僕はトライはしましたが、防空壕の突き当たりをついに確かめることができませんでした。

この防空壕の前には、とてつもなく深いため池が掘ってあって、水の色は真っ黒で、そこに長い糸をたらし、アメリカザリガニをつりあげるので、この池でとれるザリガニは、田んぼの畦でとれるザリガニよりも何倍も色が濃くて、僕は池の深さのせいだと思っていました。大倉山から池に流れ込む沢には、この

世のものとは思えないようなきれいなオレンジ色をした沢ガニがいました。

きわめつけの動物は、ジュンコちゃんちの床下に棲んでいたヘビ（青大将）で、台所の床板をあけると、どがった顔をよろつと出すのです。

ジュンコちゃんちと僕の家の間には、ちよつとお兄ちゃんのヨシタカちゃんの家があつて、そのヨシタカちゃんのお父さんは、昔は日本の自動車技術のバイオニアだったそうですが、リタイアして、たくさん犬と猫にかこまれて暮らす、動物好きの酔っ払いでした。

僕もジュンコちゃんやヨシタカちゃんちと同じように動物をたくさん飼いたかつたのですが、父がそれを許してくれませんでした。三隻につとめていた父は、きちんとした性格で、世話もできない、責任もとれない動物を飼うことはまかりならぬの一点張りでした。父のこの「近代主義的態度」は、妹島さんがいうところの、なんでも整理して考えるという方法に近い気がします。

妹と一緒に何とか頼み込んで、やっとのことで猫が一匹我が家に戻ってきました。父は妹には弱かったのです。

ところが父はこの猫を、トイレの始末ができないならしない動物として叱り、たたくのです。僕にはそれが耐えられませんでした。「猫なんだから、仕方ないじゃん」となんだか反論しましたが、父は聞き入れずに猫をたたき続けました。そしてついには、箱に入れて、猫を捨て

もそのコルビュジエの建築であつても、まち全体の体験を変えることはできません。計画してゼロからすべて作るという試みが適したスケール、或いは、その大きさと使いながら完成される時間の関係などがあるのかなあと思いました。

いろいろ違うことが一緒にある状態というのは、ダイナミックでもあるけど、問題も起こります。それをコントロールするのに、整理していくというのが通常取られる手段だと思います。しかしこれだけ新しい技術が発達した現在、もう少し、整理しない状態で、違うものが問題を起こさないで一緒にいられる方法が見つけられてもいいのにはと思います。

このとしになって、やっと、私は植物が春になって出てきたりすることに喜べるようになってきました。出てきた小さな芽を見て枯れてなかったとほつとし、シヤクナゲの花が今年は二つでなく三つ咲いたと自慢し、花が散り始めると急いで拾い集めて乾燥したり、レモンや夏みかんを収穫して新聞紙に巻いておいしくして配つたりと、本当に面白いものだと思います。のようにになりました。

二〇一四年五月一日

にいきました。父は整理がやたらによくで、ちゃんとしていないものが大嫌いで、猫のいい加減さ、だらしなさが耐えられない「近代主義者」だったのです。

動物嫌いの父の反動なのかどうか、僕ははずつと獣医にあこがれていて、作文にも獣医になりたいと書いていました。ピアノを習っていた佐治真理子先生のお父様が、佐治愛犬病院の院長先生で、あんなふうに犬や猫と暮せたらいいな、とあこがれていたせいもあります。

しかし小学四年生のときに、志望が変わりました。東京オリンピック（一九六四）のせいです。父に連れられて訪れた丹下（健三）先生の代々木体育館を見て、中に一歩先を踏み入れて、天から降ってくる光に出会ってしまった、こんなものを作る人、すなわち「建築家」になろうと、大決心をしたのです。代々木が「近代主義」であつたのか、「動物」であつたかは難しい問題です。両方であつたと今の僕は思っています。

二〇一四年五月二日



隈事務所の建物の脇に住むのら猫

隈 和世

くま・けんご——建築家・東京大学教授／1954年生まれ。1979年、東京大学建築学科大学院修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。
主な作品：水／ガラス[1995]、森舞台／登米市伝統継承館[1996]、馬頭広重美術館[2000]、根津美術館[2009]、橋原木橋ミュージアム[2010]、浅草文化観光センター[2012]、長岡シティホールアオーレ[2012]など。

妹島和世

せじま・かずよ——建築家／日本女子大学大学院修了後、伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て、1987年、妹島和世建築設計事務所設立。1995年、西沢立衛とSANAA設立。
主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、ニューミュージアム[2007]、ROLEXラーニングセンター[2009]、犬島「家プロジェクト」[2010,2013]※、ルーヴル・ランス[2012]など（※以外はSANAA）。

最近、アーメダバードと チャンディガールに行ってきました。

隈研吾様

クマさん、何から何まで私と対象的だから面白かったです。今世界中を走り回っているクマさんからはちょっと想像し難いですが、でも、なんとなくじーっと地面を見つめている子供のクマさんも思い浮かべられそうです。

小さい頃、私も大いに土に触れていました。でもそれは野菜作りではなく、家のアパートの裏山に登っての洞穴作りであったり、夏の間、祖母の信州の家に行き、その裏に広がる山や池や竹林の探検ごっこであったりで、ひどい時には、ドロドロの水たまりにとびこんで遊んでいる写真も残ったりしています。遠巻きに他の子供達が見ています。母に手伝わ

されて、イヤイヤ野菜作りもしていました。私は茨城県日立市にある父の勤める会社の社宅で大きくなりました。昔ですし、田舎ですから、敷地は広くて、家の周りにぐるっと庭が広がっていました。どうしてかわかりませんが、母が野菜作りをしていて、毎年手伝われました。そしてよく、朝ご飯のように、赤カブとかきゅうりとかサラダ菜などを取りに行かされました。ジャガイモ堀もやったり、とうもろこしも取ったり。でも全然面白

いと思いませんでした。だいたい食べることに興味がなかったもので、取り立てて喜ぶことも知らなかったし。草むしりをさせられたり、一年の最後に土をならしたり。母も素人なので、連作して、大失敗という夏もありました。

だからクマさんが植物の論文を書いたと読んで驚きました。私はそんなこと思

ビュジエの曲線という論文を卒論として書きました。富永譲先生の御指導のもと友人と二人で、コルビュジエの全作品の曲線を取り上げて、コルビュジエの曲線



コルビュジエの「織維業会館」に佇む猿

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

私たちは、優れた製品とサービスを通じて、豊かで快適な住生活の未来を創造する住まいと暮らしの「総合住生活企業」です。

XT8800 力-RP-LX-5 01 2014.6.20発行



* X T 8 8 0 0 *



9 0 1 1 4 0 4 0 6 5